一肇×虚淵玄
のタッグが紡ぐ
公式ノベライズ

まどマギ
公式ノベライズ

毎社文庫。

劇場版 魔法少女まどか☆マギカ［新編］叛逆の物語 10/26より全国ロードショー

☆
ニ1-01
一肇
魔法少女まどか☆マギカ（上）
星海社文庫

Presented by Hajime Nitomoto
Based on the story by Magica Quartet
Published by SEIKAISHA

小さな愛蔵版、☆星

9784061389564

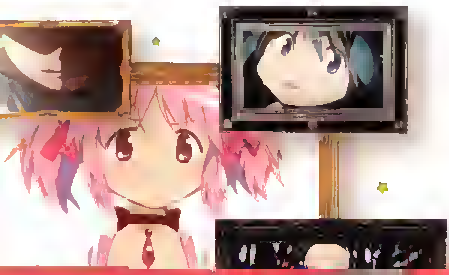
1920193006902

ISBN978-4-06-138956-4
C0193 ¥690E（0）

定価：本体690円（税別）

DIVE INTO
THE BOOKREVIEW
&INFORMATION!

こんなわたしでも、あんな風に誰かの役に立てるとしたら、それはとっても嬉しいなって——
ちょっぴり気弱な女子中学生・鹿目まどかは完全無欠の〝魔法少女〟に変身することで、理想の自分になれると信じていた——その残酷な真実を知るまでは……。
〝魔法少女〟ものの新境地を切り開いたTVアニメ「魔法少女まどか☆マギカ」を、虚淵玄監修のもと一肇が公式ノベライズ！　これは鹿目まどかの目線から語られる、奇跡と魔法の物語。



☆星海社FICTIONS
「フェノメノ」シリーズ
それは、ありとあらゆる怪異を詰め込んだ青春怪談小説。
最新作『フェノメノ肆 四回裏事件』今秋発売予定！

一肇 安倍吉俊

ニトロプラス制作ビジュアルノベル版『願いの叶う家』
現在、無料配信中。http //www.nitroplus co jp/game/phenomeno/

一肇 Hajime Ninomae

作家。ニトロプラス所属。『桜ish一推定魔法少女一』（角川スニーカー文庫）でデビュー。現在、星海社 FICTIONS より『フェノメノ』シリーズを刊行中。他、代表作として『くくるくる』『幽式』（いずれもガガガ文庫）などがある。
ソイッターアカウントは @nino_haji

何が飛び出すか
誰にもわからない！

星海社ウェブサイト
最前線
http://sai-zen-sen.jp

たった今、ここが「最前線」。
そう断言できる才能と作品を
全力で打ち出していきます。
すべてはここから始まります。

「最前線」編集長 星海社代表取締役副社長 COO 太田克史

魔法少女まどか マギカ（上） ISBN978-4-[illegible]

ニト-01

☆
ニ1-01

一肇

魔法少女まどか☆マギカ（上）

星海社文庫

Presented by Hajime Nitomo
Based on the story by Magica Quartet
Published by SEIKAISHA

9784061389564

1920193006902

ISBN978-4-06-138956-4
C0193 ¥690E（0）

定価：本体690円（税別）

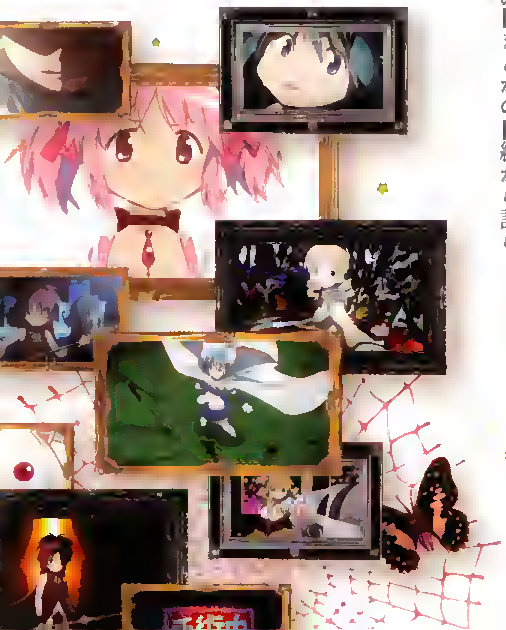
DIVE INTO
THE BOOKREVIEW
&INFORMATION!

こんなわたしでも、あんな風に誰かの役に立てるとしたら、それはとっても嬉しいなって――

ちょっぴり気弱な女子中学生・鹿目まどかは完全無欠の〝魔法少女〟に変身することで、理想の自分になれると信じていた――その残酷な真実を知るまでは……。

〝魔法少女〟ものの新境地を切り開いたＴＶアニメ『魔法少女まどか☆マギカ』を、虚淵玄監修のもと一筆が公式ノベライズ！　これは鹿目まどかの目線から語られる、奇跡と魔法の物語。

I



一肇 Hajime Ninomae

作家。ニトロプラス所属。『桜ish一推定魔法少女一』（角川スニーカー文庫）でデビュー。現在、星海社 FICTIONS より『フェノメノ』シリーズを刊行中。他、代表作として『くくるくる』『幽式』（いずれもガガガ文庫）などがある。
ツイッターアカウントは @nino_haji

庫

一肇

魔法少女まどか☆マギカ（上）

☆
二1-91
一肇
魔法少女まどか☆マギカ（上）

魔法少女まどか★マギカ

PUELLA MAGI
MADOKA MAGICA

上

星海社文庫

魔法少女まどか☆マギカ（上）

一肇

Illustration　原画・谷口淳一郎　彩色・serori

CONTENTS

第一章 「夢の中で逢った、ような……」 007

第二章 「それはとっても嬉しいなって」 063

第三章 「わたしなんかで、良かったら」 113

第四章 「そんなの、聞いてない」 155
第五章 「わたしが、心を決める時」 193
第六章 「こんなの絶対おかしいよ」 235
あとがき 278

第一章　夢の中で逢った、ような……

わたしに、本当の友達っているのかな……？

中学に入った頃から、時々そんなことを考えるようになっていて——

学校が終わった後に、一緒にショッピングモールに行くのが友達なのかな？　試験勉強を一緒にしたり、クラスメイトのうわさ話をしたり、好きな男の子のことを語り合ったりするのが友達なの？　そこのところが曖昧でふにゃふにゃしてて、よくわからなくなってしまうのです。それは多分、どこまでが知り合いで、どこからが友達なのか、わたしにはよくわからなくて——そして、結局、わたしには本当の友達と呼べる人がいないんじゃないかって、心細くなってしまうのです。

でもきっと、そんなことを口にしちゃったら、さやかちゃんは「は？　それって冷たくない？　あたしは何な訳？」って怒るだろうし、仁美ちゃんは「それはとても傷つきましたわ。今日まで築き上げてきた私たちの友情は砂上の楼閣であったというわけですの？」なんて言うと思います。きっとさやかちゃんも仁美ちゃんもわたしのことを友達と思ってくれていて——ただ、わたしがふたりの友達になれてるのかなって、ひとりで不安になるのです。本当の意味でわたしが誰かの友達になれたことなんてないんじゃないかって、そ

う寂しくなるのです。
なんて――そんなことを考えながら寝ちゃったせいかもしれません。
その日、わたしは、不思議な夢を見ていました。
そこは、世界の終わりのような場所で――
空は赤く染まり、街は見るも無惨に壊れ果てていて――
そんな何もかもが終わってしまったような世界で、わたしはひとりで、崖の上に立ち尽くしていました。
そして、その視線の先には――見たことも無い怪物が浮かんでいました。
怪物は、空を埋め尽くすほど大きな身体をしていて、甲高い嗤い声をあげています。
その回転する身体とともに、辺りのビルを紙のように燃やし、倒していきました。まるで人間の築いてきたものすべてを憎むように、破壊し尽くしていました。
がくがくと――足が震え始めます。早くここから逃げ出したい。そう思うけれど、わたしの足はまるでそこから動かなくって――
「……え？」
その時、わたしは気がつきます。
その巨大な怪物は、街を壊すというより何かを追い払っていて。
そして、その何かというのが――

その怪物から見れば、豆ほどに小さな……ひとりの少女であることを。
それは——黒髪の、とても奇麗な子でした。
黒と白とグレーの衣装に身を包み、空中で跳ね、飛び退り、時折、急反転して怪物に挑んでいました。あの巨大で恐ろしい怪物に、彼女は、たったひとりで立ち向かっているのでした。
「……が……がんばって……！」
思わずわたしは手を組んで、応援してしまいます。
でも、わたしのそんな小さな声なんて彼女に届くはずもなく——
やがてその子は、また、怪物のまき散らす風圧に木の葉のように弾き飛ばされて。
「き……きゃあああぁッ」
わたしが叫ぶと同時に——その子は、一気に遠くのビルの壁に叩きつけられていました。
「……ひどい……ひどいよ」
わたしは……もう、歯の根が合わないほど震えていました。
だけど、死んでしまったと思っていた少女は——
崩れたビルの壁にめり込んだまま、まだ生きていて——その美しい顔は苦痛に歪み、身体中は傷だらけだったけど、全身の力を振り絞ってビルから身体を引きはがそうともがいていました。

そして、その時――

彼女が、一瞬だけ、わたしの方を見つめた気がしました。

その子の視線に射抜かれた瞬間――どうしてか、わたしの心臓は、とくんと高鳴ります。

強く、気高く、どこか哀しげなその瞳の輝きは、まっすぐにわたしの心を突き刺して――

わたしが何か大事なことを忘れているような不安な気持ちにさせるんだけど……そこにまた、気味の悪い怪物の嗤い声が響き、凄まじい音とともに、彼女はビルごと怪物に吹き飛ばされてしまいました。

「どうして……どうして……？」

わたしが、涙声でそう叫びかけた時――

「どうして、彼女があんな目に遭うのか。キミはそう訊きたいんだね？」

突然、背後から、かわいらしい声がします。

びっくりして振り返ると――

そこには、見たことも無い不思議な生き物が佇んでいました。

赤い目がくりくりとしてて、耳の中から、うさぎのような長い耳がもうひとつ生えていて――そして、その耳には金色のピアスのようなものがついています。

「あ……あなたは、誰……？」

けれど、それには答えず、その不思議な生き物は囁きました。

「仕方ないよ。彼女一人では荷が重すぎた。でも、彼女も覚悟の上だろう」

その言葉に導かれるように——再び目をやると、遠くに飛ばされ、なんとか起き上がろうとする黒髪の少女の上に、怪物の巻きおこした風圧で吹き飛んだビルの残骸が落ちていくところでした。わずかに身体を捻って避けようとした彼女だけど、すべてを躱すことはできず——大きなコンクリート片に直撃され、足が奇妙な方向に捻れたのを、わたしは見てしまいました。

「き……きゃあああっ！」

思わず、わたしは顔を覆ってしまいます。

「そんな……あんまりだよ！　こんなのってないよ！」

いつしか溢れ出していた涙とともにそう叫んだ時、黒髪の少女が、わたしに向かって何か叫んでいるのに気がつきました。

「え……な……に……？」

でも、その声はわたしには届きません。

それでも、彼女はわたしに向かって何かを叫び続けていました。

それは、真剣な表情で——見ているわたしの心が掻きむしられるほどの切実さで。

それでも、弱虫なわたしの足は、ふるえて、動かなくて……

彼女の元に駆けつけて、助け起こしてあげることもできないのです。

——わたし、なんてダメなんだろう……

弱い自分が、悔しくて、腹立たしくて……涙が、ぼろぼろとこぼれ落ちます。

「諦めたら、それまでだ」

その時、再びその声が響き——

「でも、キミなら運命を変えられる」

あの不思議な生き物が、いつしかわたしのすぐ近くでちょこんと座り込んでいました。

「避けようのない滅びも、嘆きも——すべてキミが覆せばいい。そのための力が、キミには備わってるんだから」

その時、ようやくその声が、頭の中に直接響いていることに気がつきました。

染み込むように、響くように、かわいらしい声が頭の中を跳ね回って——同時に、見覚えの無い誰かの姿が、次々と思い浮かんでは消えていきます。

黄色のフレアスカートが無惨に破れて、血まみれになっている少女。

青いミニスカートがずたずたに裂かれ、折れた剣を片手に横たわる少女。

そして、赤く雄々しいノースリーブの服が千切れ——目を開けたままこと切れる少女。

「……誰？　……この子たちは……誰なの？」

「それら避けられなかった悲劇も——今まさに、目の前で起きようとしている悲劇もすべて、キミなら変えられるんだ」

わたしは……懸命に首を動かして、再び、黒髪の少女の方に目をやります。
彼女は、まだ何か必死にわたしに叫んでいました。懸命に目を凝らすけど、その口元の動きだけではわたしには何を言おうとしているのかわかりません。
「……本当なの？」
わたしの口から、掠れた声がもれていました。
「わたしなんかでも……本当に何かできるの？　こんな結末を変えられるの？」
「もちろんさ」
不思議な生き物は、赤い瞳を輝かせて一度飛び跳ねます。
「キミならすべてを変えられる。全部変えられるんだ！　だから――」
……だから――？
「だから、僕と契約して魔法少女になってよ！」

○

……ジリリリリリリリリリリリ！
「ふ……ふわっ!?」

そのけたたましい音に、がばっと身体を起こすと――

そこは、見慣れた自分の部屋でした。枕元には、お気に入りのクマさんのぬいぐるみがあって、カッパさんのぬいぐるみがあって、大好きな花柄のクッションがあります。

ぼんやりと顔を横に向けると、カーテンの向こうからは、眩しい光が注ぎ込んでいました。

「……はうぅ……夢オチ……？」

むにむにと手を伸ばして目覚まし時計を止めると、わたしはようやく息を吐き出しました。

出窓ににじり寄って窓を開けると、初夏の気持ちのよい日差しと、柔らかな風が注ぎ込みます。単純なわたしは、それだけでもう怖かった夢が遠ざかっていく心地がします。

真下に見える小さな家庭菜園には、パパがいました。そのいつものエプロン姿を見て安心したわたしは、

「おはよー、パパ」

と窓から顔を出して手を振りました。

「おはよう、まどか」

そう、立ち上がってこちらに微笑んでくれたあの人が、わたしのパパ――鹿目知久です。

「ママは？」

そう尋ねると、温かい声で静かに喋るパパは、軽く肩をすくめて言いました。
「タツヤが行ってる。手伝ってやってくれるかな？」
「はーい」
飛び跳ねるように部屋に戻り、わたしは駆け出します。これは毎日の我が家の恒例行事なのです。
部屋から飛び出て、廊下を駆け抜け、ママの部屋に飛び込みます。
「マ～マっ！　あ～さ！　あ～さっ！」
案の定、ベッドの上で布団にくるまるママの上に股がったタツヤが、ぽかぽかとママを叩いてます。三歳児のパンチくらいで起きるママじゃないんだよね、とそのまま窓まで駆けて、わたしはカーテンを開け放ちます。それから「タツヤ、といててね」と弟に微笑み、一気に掛け布団をひっぺ返しました。
そして、軽く息を吸い込んで、一言。
「お・き・ろ～っ！」
「ひゃあああああ～っ!?」
なんかここ最近、わたしの楽しみになりつつある朝の行事。
そして毎回、面白いリアクションで飛び起きてくれるママ――鹿目詢子はやっぱり素敵でした。

○

「……で、なんだっけ？　昨日なんか相談がどうとか」
まだ寝ぼけ顔で歯を磨きながら、ママが訊いてきたので、わたしも思い出しました。
「……ああ、あのね。仁美ちゃんにまたラブレターが届いたよ。今月になってもう二通目」
「ほほう」
「それでね、どう返事したらいいのか悩んでて、ママに訊いてみてくれないかって」
「あたしに？　どーして？」
「……うーん」
どうしてと言われても。
「それはやっぱり、仁美ちゃんから見てもママは頼りになるということじゃないのかな」
「ふうん……まーいいけど。ずばり言っちゃっていいのか？」
「う……うん」
「直にコクるだけの根性もねえ男は、駄目だな」
一刀両断、でした。
けど、こんなことどう仁美ちゃんに伝えたらいいんだろう、とわたしの手が止まってい

る間にも、ママはさっさと歯を磨き終えて、わたしの横の洗面台で顔を洗い始めます。わたしも慌てて歯を磨き終えるんだけど、その時にはママはもう顔を洗い終わっていて、奇麗な髪を梳かし始めています。手際良く身だしなみを整えていくその仕草に、身内ながら惚れ惚れしてしまいます。

「ああ、和子のやつはどう？」

不意にそう訊かれて、また手が止まっていたわたしは慌てて顔を洗いながら答えます。

「センセーはまだ続いてるみたい。ホームルームで惚気まくりだよー。今週で三ヶ月目だから、記録更新だよね」

「さあ、どうだか。今が一番危なっかしい頃合いだよ」

ママは、すでに神業的なスピードでメイクに入りながらそう言います。

ちなみに、和子、というのは――

わたしの担任の早乙女和子先生のことで、ママとは高校時代からのお友達です。

見た目も悪くないし、優しいと思うんだけど……現在34歳で、まだ花の独身なのでした。

「本物じゃなかったら、大体この辺でボロが出るもんさ。まぁ乗り切ったら一年はもつだろうけど」

「……ふうん」

はっきり言って恋愛ごとにうといわたしです。

あ、恋愛ごとだけじゃないか、って自分に突っ込みながら、ようやく顔を洗い終わったわたしは、とにかく必死に寝癖を直すことに専念です。ママはといえば、もうすでに女優さんのように完璧メイクを完成させていました。どうして、母娘なのにこれほど要領の良さが違うのか情けなくなるけど、なんとか寝癖を押さえつけて——わたしは、茶色と赤色のリボンを前に、はたと手を止めてしまいます。

「……リボン、どっちかなぁ？」

おずおずとそう尋ねると、ママは「こっち」と即座に赤色のリボンを指差しました。

「えー？　派手すぎない？」

「それぐらいでいいのさ。女は外見で舐められたら終わりだよ？」

そうにっこり微笑んで、ママは赤色のリボンを手に取ると手際良くわたしの髪に結んでくれます。

「うん、いいじゃん。これならまどかの隠れファンもメロメロだ」

「いないよぉ、そんなの」

「いる、と思っておくんだよ。それが美人の秘訣」

そうウインクされて、わたしはまた狼狽えてしまいます。

それから、そっと鏡に映る自分を見つめました。

——どう見ても派手すぎると思うんだけど。

そう自己主張することにすら、勇気の出ないわたしなのでした。

「さ、ご飯だ！」

がしっと肩を組まれ、わたしはママに引きずられるようにキッチンへと向かいました。

食卓にはすでにタツヤが幼児用の席に着いてて、キッチンではパパが手際良く朝食を準備してくれていました。ふわんといい香りが漂ってきて、わたしのお腹がくう、と鳴きます。

さて——ここらへんで、パパの作ってくれた朝食を紹介します。薄力粉100%のさっくりふわふわのトースト。塩漬け肉を練って詰めて薫製した手作りソーセージ。地鶏卵の目玉焼きとレタスのサラダ。パパはホント、家事の天才です。何事も合理的なママが結婚してすぐ主婦交換を申し出たのも、今では納得してしまうのです。

「ああ、幸せだなあ」

ママが嬉しそうに席に着くと、エプロン姿のパパが微笑みます。

「先に食べてて。もう出る時間だろう？」

「悪いねー。じゃあ、遠慮なく」

早速ママは、左手一本でトーストを取り上げ、右手で新聞を器用に広げます。そして、一面からもの凄い早さで記事を読みつつ、パパが淹れてくれたコーヒーを飲んで、同時にタツヤの世話もこなします。なんか手が六本ある阿修羅さまみたいだけど、これがわたし

のママなのです。ひとりで三人分くらいの働きをこなしつつ、それでいてそのどれもがわたしよりも正確で早いのです。

隔世遺伝というやつなのかなー、なんてたまに思うんだけど、それに対してママはいつも、訓練さ、と微笑みます。なんでもママは、なるべく家族とたくさん過ごす時間が欲しくて、ちゃっちゃと仕事を片付けようと脳の並列処理という特技を覚えたらしいです。そしたら、いつの間にか会社で責任ある地位に就かされちゃったから世の中うまくいかないよねーとよく溜息をついてます。

「コーヒー、おかわりは？」

パパの質問に、いいや、と軽く答えて——

ママは、タツヤの口を拭いてやり、新聞も奇麗に畳んで立ち上がります。

「おっし、じゃあ行ってくる！」

そのままパパとタツヤの額にキスして、わたしには手を伸ばしてきました。わたしは立ち上がり、その手をジャンプして叩きます。いわゆる、ハイタッチというやつでした。

そして、にっこり微笑んで出て行くママは——やっぱり世界一素敵でした。

いつかわたしもあんな風にかっこよくなれるのかな——？

なんて、ぼんやりしていたら、

「ほらほら、まどかも急がないと」

「……え？」

そのパパの声で時計を見ると——もう八時近くになってます。

「うわ、遅刻しちゃうよぉ……！」

慌てて、まだ半分近く残っていたトーストとサラダを口に運んで、鞄を手にします。パパに幼稚園の上着を着せてもらっているタツヤの頭を撫でてから、パパとハイタッチをして、急いで家から駆け出しました。

そうして、爽やかな日差しの中に飛び出した時には——

今朝見た悪い夢なんて、すっかりわたしの心から消え去っていたのでした。

○

「おっはよー！」

見慣れたふたりの影を通学路で見つけたわたしが、手を振って駆け寄ると——

「おはようございます」

「まどか、遅ーい！」

ひとりはにっこりと、そしてもうひとりは、にかりと微笑みながら振り向きました。

丁寧に、頭を下げてお辞儀してくれるこの奇麗な子は、志筑仁美ちゃん。

清楚な彼女は、見滝原中学校に入学してから仲良くなったクラスメイトで——そして、すかさずわたしを羽交い締めにしてくるこのショートカットの子が、小学校から一緒の美樹さやかちゃんでした。

「……ご、ごめん」

わたしが切らした息を整えつつそう謝ると、さやかちゃんは、突然「おお？」とわたしの髪を見つめてきました。

「かわいいリボンじゃん」

「そ、そうかな……派手すぎない？」

照れくさくてそう訊き返すと、仁美ちゃんが微笑みます。

「とても素敵ですわ」

おしゃれ上手の仁美ちゃんにそう言われると、すこしだけ安心できるわたしでした。

そのまま、三人並んで仲良くいつもの通学路を進みます。

今日も、空は雲ひとつなく——

抜けるような青空が広がっていました。

わたしは、大きく息を吸い込みます。緩い坂を下るように駅方向に顔を向けると、そこには見滝原の街が広がり、遥か地平には山々が霞むように連なっていました。

——新しいものと古いものがとてもうまく融合している、住むには最高の街さ。

前に、ママが気持ち良さそうに目を細めてそう言っていたのを思い出します。
確かに、駅前には大きなショッピングセンターがあったし、広めの公園も多くて、朝や夕方には犬を飼っている人たちが仲良く散歩させています。いつも誰もが笑顔で歩いているようなそんな街——それが、わたしの住む見滝原町でした。
「で……まどかさん。訊いてくれました？　例のこと」
仁美ちゃんがどこか照れたようにそう尋ねてきたので、わたしは頷きました。
ここに来るまでにもどう伝えるかわたしなりに考えたんだけど、結局、ママの言ったことをそのまま伝えます。
「あのね、直に告白できるようにならなきゃ駄目だって」
「やっぱり、そうですよね……」
仁美ちゃんが、何か考え込むように頷くと、
「いやー、相変わらず、まどかのママはかっこいいなぁ」
さやかちゃんが感心するように声を上げました。
「そ、そう？」
「そうだよ！　美人だしさ。バリキャリだし、ホント憧れちゃうよ！」
「やっぱり、そうだよね……」
……うーん、それはとても嬉しいことだし、自慢できることなんだけど……

わたしとしては——ママがかっこいいほど、プレッシャーが凄いのです。

ママはいつだってすぐに自分の考えを言うことができて、わたしにはできません。そしてママは自分の考えをすぐに行動に移すことができて、わたしはやっと思いついた自分の考えを、行動に移す時にまた迷ってしまうのです。結局、ママが十の行動をする間に、わたしはようやくひとつ行動するような有様でした。だから、ママが褒められれば褒められるほど、どうしてわたしはこんなにどんくさいんだろう、と落ち込んでしまうのです。

わたしがひとりぐるぐると考え込んでいると、

「まとかさんのお母さんみたいに、きっぱり割り切れたらいいんだけど……はぁ、返事どうしようかしら」

仁美ちゃんが、静かに溜息をつきました。

それで、わたしも慌てて——そうだよね、どうしようね、と一緒に考え始めます。

「しかし、美ましい悩みだねぇ」

さやかちゃんは、呑気な顔つきで伸びをしながらそう言うけど……実は、ちょっぴりわたしもそう思います。

——どこかの男の子から手紙をもらったら、どんな気持ちがするんだろう？

そんなふわふわとしたわたしの想像は、いつしか口から勝手に飛び出していました。

「いいなあ、わたしも一通くらいもらってみたいなあ……ラブレター」

「お？」

……え？

気がつくと、さやかちゃんは――満面の笑みでわたしににじり寄ってきています。

「まどかも仁美みたいなモテモテな美少女に変身したいと？　そこでまずはリボンからイメチェンですかな？」

「ち……違うよぉ、これはママが……」

「さてはママからモテる秘訣を教わったな!?　けしからん！　そんな破廉恥な子はこうだ！」

「や、やッ、ちょっと！　やめてぇ」

何を隠そう、わたしはたいへんくすぐりに弱いのです。手が伸びてきただけで、まだ触れられていないのに身をよじってしまうほど、くすぐりの刑恐怖症です。

「さ……さやかちゃん！　やめてっ！　きゃはは」

「わはははっ。可愛いやつめ。でも男子にモテようなんて許さんぞー。まどかはあたしの嫁になるのだ！」

これはさやかちゃんの口癖なのですが、そんなことより――

「いやーッ」

わたしが全力で拒否しても、くすぐったくて笑顔になっちゃうので、さやかちゃんはよ

りいじわるモードに突入です。嫌なのに強制的に笑顔にされてしまうなんて――くすぐりの刑は、この世で一番ひどい刑だって声を大にして言いたいんだけど……きゃははは、やめてー！

そして、それは――

「……コホン」

と仁美ちゃんが咳払いして。

「……あぅ」

たくさんの生徒たちが、目を丸くして見つめていることに気がつくまで続いてしまったのでした。

○

「えー、今日は大事なお話があります」

朝のホームルームのことでした。

教壇の向こうで、担任の早乙女和子先生のいつにない真面目な口調が響きます。

「皆さん、心して聞くように」

眼鏡の奥の瞳が、きらりと輝いていました。

そしてその低い声色に、そこはかとなく緊張感が漂って、教室中を静かにさせます。
「はい、中沢くん！　目玉焼きとはッ、固焼きですかッ？　それとも半熟ですか!?」
突然、指名された中沢くんは強ばった表情で立ち上がります。
それから、しばらく黙った後――愛想笑いを浮かべておずおずと答えました。
「えと……どっちでもいいんじゃないか、と……」
すると、その通りっ！　と和子先生は拳を突き上げました。
「そう、どっちでも宜しい！　たかが卵の焼き加減なんかで女の魅力が決まると思ったら大間違いです！」
無事正解した中沢くんは、突然の緊張から解かれて、へなへなと席に着きます。
和子先生は、いよいよ言葉激しく唾を飛ばしました。
「女子の皆さんはくれぐれも！　半熟じゃなきゃ食べられないとか抜かす男とは交際しないように！　そして男子の皆さんは絶対に、卵の焼き加減にケチをつけるような大人にならないこと！」
どうしてか……和子先生は、肩で息をついてました。
――別れたか……
――別れたんだねぇ……
同時に、さわさわと教室のあちこちで囁き声が響きます。

しかし、言いたいことを思いきり言い切った和子先生は、すっきりしたのか、ほつれた髪をさっと手櫛で直して、にっこりと微笑みます。

「はい、それから。今日は皆さんに転校生を紹介しまーす」

「……おい、そっちが後回しかよ？」

さやかちゃんの的確な突っ込みがわたしの耳に届き――

「じゃあ、暁美さーん、いらっしゃーい」

和子先生の言葉に促されるように、扉を開けて入ってきたその少女を見た瞬間。

わたしの心臓は、とくん、と高鳴りました。

……うそ、まさか……。

同時に、クラス中から、おおお、とどよめきが響きます。

「うわッ……すげー美人！」

さやかちゃんも興奮してそう叫んでいたけど――

わたしはひとり心の中で「まさか、そんなまさか」と呟いていました。

そう……長い黒髪に、人形のように整った顔立ちを持つその少女は――今朝、わたしの夢に出てきたあの子なのでした。

「はーい、それじゃ自己紹介いってみよー」

和子先生が騒然とする教室を黙らせるように言うと、その子は静かに口を開きます。

「暁美ほむらです。よろしくお願いします」

だけど――

そこから先、みんながどれほど待っても、暁美さんは何も言いません。

黒板に「暁美ほむら」の「暁美ほ」まで書いていた和子先生は、目で続きは？　と促していたけど、暁美さんは無視するように黙り込んだままでした。

さすがに、教室中に気まずさが漂い始めた、その時――

暁美さんは唐突に動くと、和子先生からチョークを取り上げ、自ら黒板に「暁美ほむら」と完成させて、またこちらに向き直ります。それから長く奇麗な黒髪をさらりと揺らして、深々と頭を下げるのでした。

マイペースというのか、変わっているのか、その強い存在感に、クラスの誰もが固まっていたけど……やがて誰かが手を叩いたことをきっかけに、クラス中からばらばらとした拍手が起きました。

けど――わたしは、拍手をすることも忘れていました。

それは、その少女がまっすぐにわたしを見つめていたからで……

鋭く、強く、凛とした瞳の輝きに、射抜かれていたからで。

そう、それは――今朝の夢のように。

わたしは、指先すら動かせないほど固まってしまっていました。

今の今まで忘れていた、あの嫌な夢を思い出します。
世界の終わりのような、赤黒く染まる空、乾いた大地。
そして、崩れたビルの向こうに浮かぶ、巨大な怪物——
思わず、目を瞑ってしまいます。頭を振って、夢の光景を追い払い、もう一度そっと目を開いたんだけど——まだ、暁美さんは冷たい視線でまっすぐにわたしを見つめているのでした。

「暁美さんって、前はどこの学校だったの？」
「前は部活とかやってた？　運動系？　文化系？」
「すごい綺麗な髪だよねー。シャンプーは何使ってるの？」
休み時間になって、転校生・暁美ほむらさんの周りにはみんなが集まっていました。
はしゃぐように次々に話しかけるクラスの子たちの質問にも、暁美さんは小さく僅かに答えています。
「不思議な雰囲気の人ですよね、暁美さん」
声がして顔を上げると、わたしの横には仁美ちゃんとさやかちゃんが立っていて、やっぱりわたしと同じように彼女の様子を見つめていました。
「ねぇまどか、あの子、知り合い？」

「え……」
「なんか、さっき思い切りガン飛ばされてなかった？」
さやかちゃんの質問に、わたしは言葉が詰まります。
ガン飛ばされるってよくわからないけど……でも、睨まれていたのかな？　夢で助けなかったから？　ううん、そんなまさか——あれは夢で、だいたいさっき初めて出逢ったはずなのに、今朝の夢ですでに逢っていたなんて、そんなおかしなことが起こるわけが——
自分でも何が起きているのかよくわからなくて、わたしは結局さやかちゃんに言葉を返すことができませんでした。
——と、その時。
「ごめんなさい」
暁美さんが突然、周りの子たちの言葉を遮って立ち上がります。
「なんだか緊張しすぎたみたいでちょっと気分が……保健室に行かせてもらえるかしら？」
「えッ？　あ、じゃあアタシが案内してあげる！」
「私も行く、行くッ」
慌ててそう言う周りの子たちに、暁美さんは首を振ります。
「いえ、お構いなく。係の人にお願いしますから」
そのまま、振り返ってわたしを見ました。

また、わたしの心臓が、どくんと激しく高鳴ります。まっすぐにわたしを見つめたまま、近づいてくる暁美さんに——わたしの膝はいつしか震えていました。

「鹿目、まどかさん」

そう言葉をかけられて、思わず、はいっと答えてしまいます。

「あなたが、このクラスの保健係よね？」

「え……えと、あの」

「連れて行ってもらえる？　保健室」

わたしを見下ろす彼女の瞳は——

夢と同じ、冴え冴えとした強さがあって……わたしは、否応も無く頷いてしまいました。

歩幅に合わせて、腰まで届く黒髪が揺れます。

わたしの前を歩く暁美ほむらさんは、歩調に迷いがなくて、これではまるでわたしが学校を案内されているみたいでした。廊下ですれ違う生徒達はみんな暁美さんに見とれていて——それが、見知らぬ女子であるせいか、とても整った容姿のせいかわたしにはわからなかったけど……でも、多分、後者だと思います。だって、男の子がみんなほけえっとしていたから。

そんな暁美さんと連れ立って歩くわたしは、まるでなんでもできる漫画の主人公とその

引き立て役みたいです。もともとすべてに自信のないわたしにとって、とても辛い時間でした。

でも――そんなことばかり考えていじけてても仕方ないよね。

とにかく暁美さんに話しかけてみよう、と勇気を出して声をかけてみました。

「あの、わたしが保健の係って、どうして……？」

「……」

「えっと、あの」

「早乙女先生から聞いたの」

「……あ、そうなんだ……そうだよね、あは」

謎が解けてすこし微笑むことができたわたしだけど、そのまま会話を弾ませていくことができません。

「……えっと、さ。保健室は……」

「こっちよね」

「や、うん、そ、そうなんだけど……いやだから、その、もしかして……場所、知ってるのかな、って」

「……」

「……」

ものすごく気まずい沈黙が、わたしたちの間に漂っています。
誰もが笑ってる学校の廊下で、わたしたちだけが、まるで鉄の檻に閉じ込められているかのようでした。何か……何か、話さないと。このままずっと黙って歩いて行くことに、わたしはもう耐えられません。
「あ――暁美さん？」
「ほむら、でいいわ」
……そんなこと言われても、わたしはさやかちゃんだって、仁美ちゃんだって、名前だけで呼び捨てにしたことがありません。
「ええと……じゃあ、ほむら、ちゃん？」
「……なにかしら」
「あ、う、えっと、その――か、変わった名前だよねっ」
その瞬間でした。
不意にほむらちゃんは、立ち止まりました。
その背中に、わたしは慌てて言い足します。
「い、いや、だから、あのねっ、変な意味じゃなくてねッ、その……か、かっこいいな、なんて――」
すると、ほむらちゃんは、ゆっくりと振り向きました。

その形の良い唇はきつく引き結ばれていて、その瞳には、より強い輝きが満ちていました。

そして、わたしの顔を見据えて、一度何か言おうとして呑み込みます。

わたしの膝はもう砕け落ちそうでした。がくがくとした足の震えが全身に伝わっていきます。

そこは、ちょうと別棟へと続く渡り廊下の真ん中で——

わたしたちの周りには、誰もいませんでした。そう、ここには、わたしとほむらちゃんのふたりだけなのです。

「鹿目まどか、あなたは——」

ほむらちゃんは、そのまま静かに言葉を継ぎます。

「自分の人生が貴いと思う？　家族や友達を大切にしてる？」

「……え？」

その質問が何を意味しているのか——

そして、なぜそんなことをわたしなんかに問い質すのか。わたしにはさっぱりわからなくて、ただただわたしは、どうしてこんなところでこんなことになっているのだろう、と震えていました。すごく怖くて、すごく逃げ出したくて——でも、足が動かなかったのは……

そんなことを訊いてくるほむらちゃんの瞳が、とても真剣だったからだと思います。この質問には、わからないとか、考えたことがないとか、そんな言葉で逃げちゃいけないんだ、とどうしてかそれだけがわかりました。

だから――

わたしは、答えます。

「わ、わたしは――大切、だよ。家族も、友達のみんなも、大好きで、とっても大事な人たちだよ」

「本当に？」

「本当だよっ、ウソなわけないよ！」

思わずそう叫び返すと、ほむらちゃんは、ひとつ頷き――

「もしそれが本当なら、今とは違う自分になろうだなんて絶対に思わないことね」

「……え」

「さもなければ――」

まっすぐにわたしを見つめて、ほむらちゃんは言います。

「すべてを、失うことになるわ」

そして、そのまま踵を返し――歩き出していきました。

わたしはそこにひとり取り残され……

いまほむらちゃんに言われた言葉をずっと頭の中で繰り返していました。でも、どれだけ考えても、まるで意味がわかりません。

そしたら、数歩先まで歩いていたほむらちゃんがまた立ち止まり、振り向きます。

そして、どこか哀しそうな顔つきで囁きました。

「あなたは、鹿目まどかのままでいればいい。今まで通りに、これからも」

○

「えーっ？　何それ？」

さやかちゃんの素っ頓狂な声がファーストフード店に響いて、わたしは思わず唇に指を当ててしまいます。

その日の放課後のこと――

わたしとさやかちゃんと仁美ちゃんは、駅前のショッピングモールですこしお喋りをすることにして、三人でファーストフード店に入っていました。辺りには、わたしたちと同じ中学の生徒たちが多くて、あまり内緒話に適さない場所なのだけど……ここは、さやかちゃんのお気に入りの場所なのでした。

「あの後、あいつに、そんなこと言われたの？」

「やっぱり変わった子ですのね」
さやかちゃんと仁美ちゃんの言葉にわたしも頷きます。
「わけわかんない、よね……」
「文武両道にして才色兼備、かと思いきや実はサイコな電波さん――かーッ、どこまでキャラ立てすりゃあ気が済むんだあの転校生は!?　萌えかッ？　そこが萌えなのかッ!?」
天井を見上げて再び叫び出すさやかちゃんだったけど、わたしはもう身を縮めるしかありません。
「今日の数学の時間だって見たろ？　河東の出したあんな意地悪い問題、すらすらと解いてたし」
「体育の走り高跳びだってとても素晴らしかったですわ」
仁美ちゃんも、オレンジジュースを口に含んで頷きます。
「完璧なフォームで、易々と170をクリアしてました。体育教諭の牛島先生も、県内記録だって驚いてましたし」
……そうなのでした。
今日の体育の時間、わたしも、バーを鮮やかに越えるほむらちゃんの残像がいつまでも目に焼き付いてしまって……それでぼうっとしてたら、いつしかほむらちゃんもわたしを見つめてて……そして、わたしはまた蛇に睨まれたカエルみたいな状態で縮こまってしま

ったのでした。
「まどかさん、本当に暁美さんとは初対面ですの？」
仁美ちゃんのその質問に――わたしは、えっと固まります。
「う……うん、常識的にはそうなんだけど……」
そう答えると、すかさずさやかちゃんが突っ込んできました。
「なにそれ？　非常識なトコで心当たりがあると？」
「……あ、ええと」
もうどうしようもなくなって、仕方なくわたしは今朝見た夢にほむらちゃんが出てきたことをふたりに話しました。あの世界が滅び去ったような、恐ろしい光景。そこで見た巨大な怪物と、それに立ち向かうんだけど、まるで歯が立たないまま打ち倒されるほむらちゃん――そして、何かかわいらしい姿の生き物がわたしの横にいて……その子に何か言われたような――
……しかし、でした。
そのすべてを話し終わる前に――
「ぎゃはははははっ！」
「あはは、ふふふっ」
ファーストフード店内には、さやかちゃんと仁美ちゃんの笑い声が響いていました。

「わ、笑うなんてひどいよぉ」
わたしは猛抗議しますが、さやかちゃんは涙を拭きながらわたしの肩をぽんぽんと叩きます。
「すげーッ、まどかまでキャラが立ちはじめたよッ」
……ああ、もう消えてしまいたい。
わたしの顔がとんとん熱くなって、真っ赤に染まっていくのを感じます。
「つまり、何か？　まどかとあいつは夢の中で逢ったってこと？　あー、もぉ決まりだ！　それ前世の因果だわ。あんたたち時空を越えて巡り会った運命の仲間なんだわ！」
「……わたし、真面目に悩んでるのに……」
そう涙目で小さく抗議したのですが、もうさやかちゃんは椅子が倒れそうな勢いで笑ったままでした。
「でも、まどかさん。こういう可能性もありますわ」
仁美ちゃんが目尻を拭きながら、言います。
「もしかしたら、本当は暁美さんと会ったことがあるのかもしれませんわ」
「えっ？」
「まどかさん自身は憶えていないつもりでも、深層心理には彼女の印象が残っていて、それが夢に出てきたのかもしれません」

……そんなことって――あるのかな？

「それでき過ぎてない？　どんな偶然よ」

さやかちゃんがまだ涙を拭きながら突っ込むけど、仁美ちゃんはすまして言います。

「あら、前世の因果よりは筋の通った説明ですわ」

なんか、話がどんどん理解できない方向に転がっていってる気がするわたしです。

「あら、もうこんな時間？」

不意に、仁美ちゃんが腕時計を見て眉を顰め――

「ごめんなさい、お先に失礼しますわ」

そう言って、鞄を手に立ち上がりました。

「今日はピアノ？　日本舞踊？」

そう笑って尋ねるさやかちゃんに、

「お茶のお稽古ですの。もうすぐ受験だっていうのに、いつまで続けさせられるのか」

そう仁美ちゃんはさらりと答えます。

「うはぁ……小市民に生まれて良かったわぁ」

さやかちゃんが溜息まじりに言うけど……同感です。仁美ちゃんは、それだけ忙しくいろいろな習い事をこなしつつ、成績も落としていません。ママと同じように並列処理ってやつをマスターしてるのかもしれません。

「わたしたちも……行こうか？」
そうさやかちゃんに言うと、おう、と応えたさやかちゃんは——
鞄を持って立ち上がると同時に、どこか照れくさそうに尋ねてきました。
「……あ、まどか。帰りにCD屋寄ってもいい？」
でも、その仕草でわたしにはわかります。
「いいよ。また上条くんの？」
「へへ、まあね」
それは——
普段、男勝りなさやかちゃんが、同性のわたしから見ても、どきどきしてしまう女の子の表情を見せる瞬間なのでした。

「さやかちゃんは、えらいね」
モールの二階にあるCDショップに向かう途中のエスカレーターで——わたしがそう呟くと、さやかちゃんは照れたように笑います。
「なんだよ、いきなり」
「……だって、いつも自分のお小遣いを上条くんの為に使って」
そう言うと、ううん、とさやかちゃんは顔を振ります。

「あたしなんて、恭介のしてる苦労に比べればなんてことないよ」
それから、天井を見上げて囁くように言いました。
「だけどさ——神様って残酷だよね。恭介は、今も左手を満足に動かすこともできないんだよ？　あんなにものすごいバイオリン弾いてたのにさ……」
「……うん」
上条恭介くんというのは、わたしたちのクラスメイトで——そして、さやかちゃんにとっては、幼なじみの男の子でした。
ふたりは幼稚園の頃からの幼なじみで、家も近所で、よく家族ぐるみで遊んでいたそうです。上条くんは、小さい頃からそれはバイオリンが上手で、全国大会にも何度も出場してて、誰からも将来を期待されてて——でも、そんな上条恭介くんは……
中学二年生にあがった今年の春、交通事故に遭ってしまったのでした。
「恭介のバイオリンを聞いた人の顔を、まどかにも見せてやりたいよ。誰も彼もまるで子供みたいな顔になっちゃうんだ。みんな口を半開きにして、全身耳になったみたいに聞き入って。そして演奏が終わると涙溜めて拍手するんだ。あたしは小さい頃からそれがとても嬉しくて、誇らしくって——あいつは、あたしの友達だって、大声で言いたかった。つーか言いまくってたけどね」
そう、えへへと笑うさやかちゃんの瞳はとても輝いていて——

上条くんが巻き込まれた不幸には深く同情してしまうんだけど、さやかちゃんが上条くんのことを話したり、懸命に彼が喜びそうなCDを探す様にはとてもこう胸がほくほくとしてしまうというか……うまく言えないんだけど、ものすごく応援してあげたい気持ちになってしまうのでした。

「んじゃさ、まどかは好きなとこ見てて」

お店に着くと早速さやかちゃんは、クラシックコーナーに向かいます。

わたしは手を振って、それからしばらくうろうろとした後、新譜CDの試聴コーナーに向かいました。そこには、好きなアーティストの新譜があって、わたしは思わずヘッドフォンを手に取ります。

髪を耳にかけ、ヘッドフォンを嵌めて、スイッチを押します。やがて前奏が流れてきて、音量の調節をした、その時――

《……けて》

何か、声が聞こえました。

「……あれ？」

台詞入りのCDなのかと思って、一度すこし音量を上げてまた最初から聞き直します。けど、今度はその声は聞こえてきません。

「気のせい……かな？」

もう一度、音楽に集中しようとしたその時でした。

《……助けて》

今度は、はっきりと聞こえました。

思わずヘッドフォンを外して辺りを見回すと、

《……助けて……まどか……》

確かに、誰かが救いを求めていて——そして、わたしの名前まで呼んでいました。

「……え？　えッ？」

けど、わたしの周りにいる誰にもその声は聞こえていないようで……

そしてそれは、わたしの耳ではなく、頭の中に直接響いていることに気がついてびっくりします。

《助けて……助けて……まどか……》

——まどか。まどか。まどか——

どこかで聞き覚えのあるその声は、はっきりわたしの名を呼んでいました。

「……誰？　誰なの？」

わたしの呟きに、隣にいた大学生風の男の人が怪訝な顔をしたけど、わたしはそのまま声の主を探すように、ふらふらと店を出ました。

どこかから響き続ける、その声に導かれるように——

鞄を抱えて、ショッピングモールの奥へと進みます。
進むほど人が少なくなり、やがて誰もいない寂しい倉庫のような場所に行き着きました。
そしてそこには、非常口と書かれた鉄の扉があり、それを開けると――
非常階段へと続いていて、風がわたしの髪を舞い上がらせました。
《助けて……助けて……！》
階段に出ると、いよいよその声も大きくなって――
「どこにいるの？　あなた誰？」
そう問いかけたけど、わたしの声は届いていないようで、ただ一方的に「助けて」という言葉だけが、切なく頭に響きます。この声の主が誰だかわからないけど――とにかく、この上なく、真剣に助けを求めていることだけは、わたしにもわかりました。
「待ってて、すぐ行くから」
とにかく声のする方向へと、向かうことにして――わたしはそのまま非常階段を上り、上の階へと進みました。息を切らして一番上の階にたどり着き、そしてそこにあった防火扉を開くと……中は、薄暗く、がらんとした空間でした。
多分、改装中の場所で、コンクリートが剝き出しで、工事用の機材があちこちに転がっています。
でも、そこには誰もいませんでした。ただ、だだっ広い、薄闇が広がっていて――

すこし怖くなって、わたしの足は竦みました。
けれど、いよいよ頭の中に響く誰かの声が大きくなります。
《助けて……まどか……助けて……》
「……どこ？　どこにいるの？」
少し震えた声で、そう尋ねた瞬間――どこかから、がこん、という音がして。
びくっとしたわたしの頭上で、ボイラー用のエアダクトの蓋が外れていました。
そして、そこから何かが転がり出てきて――
「きゃあああっ」
思わずへたり込んでしまったわたしの胸に、何かが飛び込んできました。
見れば、それは――真っ白で、柔らかくって……
耳からまた長い耳を伸ばしたような、不思議な生き物でした。
猫でもなく、うさぎでもなく、まるで見たことの無い……ううん……わたしは、この子を、いつかどこかで見たような。でも、それがどこだか思い出せなくて、たぶんめちゃくちゃ頭が混乱してて、それはきっと――その不思議な生き物が、血まみれであったからだと思います。
「……だ、だいじょうぶ？　ねえ、だいじょうぶ？」
そう尋ねたけど、わたしの腕の中で弱々しく震えるその未知の生物は返事をしません。

いえ——返事ができないほど衰弱していました。今にも死んでしまいそうなほど怪我だらけで、時折手足を痙攣させていました。

「……あなた、なの？　わたしを呼んでいたのは？」

そう呼びかけると、その不思議な生き物は薄く目を開けます。

そしてその瞳は、深紅に輝いていました。どこか潤み、何かを訴えかけてくるようなその眼差しは、わたしの心の中の何かをひっかきます。わたしはやっぱりどこかでこの生き物と出逢っている……そんな気がして、それがどこか懸命に思い出そうとしていた、その時——

カツン。

誰もいないはずの空間に、わたし以外の靴音が響き。

思わず振り返ると、そこには——

今朝の転校生……暁美ほむらちゃんが、佇んでいました。

「……ほ、ほむらちゃん？」

「そいつから離れて」

否応ない口調で、そう冷たく返されます。

そして——

その姿は、学校の制服ではなくて、黒と白とグレーでデザインされた不思議な服で——

「だ、だって、この子、怪我してる……」
わたしがそう言った瞬間、腕の中の不思議な生き物がぎゅっとしがみついてくるのがわかりました。
そして、靴音を響かせてほむらちゃんが近づいてくるほどに、その小さな生き物の震えが大きくなるのを感じます。
「だ、駄目だよ！　酷いことしないで！」
「あなたには関係ない」
わたしは、胸にその生き物を抱えたまま後ずさります。
「だって、この子、わたしを呼んでた！　聞こえたんだもん、『助けて』って」
「そう……」
けれど、ほむらちゃんは歩みを止めません。むしろその瞳が、冷たく細められて、すごく怒らせてしまったような気がして――
……駄目だ、怖い……怖いよ。
思わずその不思議な生き物を抱きしめながら、その場にへたり込んでしまった、その瞬間――
「まどかッ、こっち！」
さやかちゃんの声がして顔を上げると、目の前は白煙に包まれていました。

「早く、こっち来い！」
咄嗟に立ち上がると、そのまま必死に不思議な生き物を抱えてさやかちゃんの方向に駆けます。さやかちゃんはどこから持ってきたのか、消火器を持っていてわたしとほむらちゃんの間に噴射していました。消火剤の勢いが小さくなったところで、勢いよく消火器をその場に投げ捨てて、わたしの腕を摑むと、
「走れッ！」
さやかちゃんは駆け出します。わたしも懸命にさやかちゃんの手を握り返し、足に力を込めて続きました。
「なッ……何よ、あいつ!?　今度はコスプレで通り魔かよ!?」
入ってきた扉の方向に駆けながら、さやかちゃんはそう叫びます。
わたしはまだ何が起きて、どうしてこんなことになったのかよくわからなくって——
左手は、さやかちゃんの手を離さないように。そして右手は、腕の中でぐったりとするあの不思議な生き物を落とさないように必死でした。
「っつーか、何ソレ？　ヌイグルミ……じゃないよね、生き物!?」
「わかんない……わかんないけど、この子を、助けなきゃ！」
白煙の立ちこめた空間で、そう返すわたしだけど——
何か、とても嫌な予感がしていました。悪い夢を見る時に、それがよくない夢になりそ

うだってわかる、あの感覚にとても似ていて……それは、そんなに奥へと入って来ていないのに、これだけふたりで駆け続けても、入ってきた非常口にたどり着けないせいかもしれません。

「さやかちゃん、こっちでいいのかな？」

「合ってる……はずだけど」

さやかちゃんも、どこか自信なげにそう言い返します。

リノリウムの硬く冷たい床であったはずのそこは、なぜかわずかに弾力を感じます。うーん、床だけじゃなくって——壁も、天井も、どこかねじ曲がっているような気がしました。わたしが動揺してるのか、それとも消火剤を吸い込んでしまって頭がどうかなってしまったのかもしれません。とにかく、ほむらちゃんの出現から、何かがずれてしまったような気がしていました。でも、そのことを考えると、心臓が痛いくらいどきどきと高鳴り始めるので、わたしはたださやかちゃんの手を、ぎゅっと強く握りしめていました。

「ひ、非常口は……？　どこよ、ここ!?」

さやかちゃんが、怯えたように叫び——

白く歪んだ世界のどこかで、誰かの嗤い声を聞いた気がしました。

そして——わたしは、見てしまいました。

そこには、黒い蝶が舞っていました。そこかしこに、顔の無い男の人が佇んでいました。

死んだ街が横たわっていて、朽ちた樹木が寂しげに頭をもたげています。
そう——そこは、すでにコンクリートの空間などではなくなっていました。
まるで、誰かの悪い夢に彷徨い込んでしまったような——
上も下も左も右もわからない、とろとろに崩れた空間と成り果てていました。
「やだ……やだよ……これ、なに？」
わたしがさやかちゃんに身を寄せると、さやかちゃんも声を震わせます。
「じょ……冗談だよね？　あたしたち、悪い夢でも見てるんだよね？　ねっ、まどかッ」
どこかで、じゃらりと何かが音を立て、嗤い声は続きます。じゃらり、じゃらり、としたその音は、どこかで鎖が強い力で引っ張られる音で——そこに子供たちの声が重なります。楽しげで、哀しげで、壊れていて、聞いていると、頭の中がぐるぐるとかき混ぜられていくような、薄気味悪い声でした。何かを数えるように声がわたしたちを包み、脇の下をくぐり抜け、足下を通り抜けていきます。
「さ……さやかちゃん！」
もう、わたしの膝の震えは限界でした。
弱虫で、臆病で、のろまなわたしが、いつも感じている劣等感すら——本当は感じることすら図々しいと思い知らされるような……そんな恐ろしい何かが、這い寄ってくるのを感じていました。

じゃらり。

ひときわ大きく、鎖が揺れる音がして――

次の瞬間、それが弾け飛ぶのがわかりました。

そして、わたしたちの周りをすでに無数の何かが囲んでいることを知ります。歌うように、踊るように、ただぬぐい去れないほどの悪意だけを漲らせ、世界をけたけたという嗤いだけが満たしていました。

もう……

わたしの心は、限界でした。

「き……きゃあああああっ」

ついにさやかちゃんが、叫び――

わたしと不思議な生き物に力いっぱい抱きついてきた、その時――

周囲が突然、目映く照らされ――地面から、温かな光が吹き上がります。

その光は、力強く辺りに広がり、薄気味悪い声たちを蹴散らし、それはやがて――わたしたちを包むように、周囲に丸い円陣を刻み込みます。

「あ、あれ……!?」

「これは――」

さやかちゃんとわたしが呆気にとられていると、

「危なかったわね――」
とても落ち着いた優しい声が、異空間に響きました。
「でも、もう大丈夫」
恐る恐る、その声の方を振り返ると――
そこには、わたしたちと同じ見滝原中学校の制服に身を包んだ人がいました。
カールされた明るい髪をふたつに結び、スタイル抜群のその人は――
にっこりと微笑み、手の中の何か光り輝くものを大事そうに抱えて、歩み寄ってきました。
「キュゥべえを助けてくれたのね。ありがとう。この子は私の大切な友達なの」
それは――
どこまでも深く、どこまでも包み込むような、素敵な笑顔でした。
一瞬で足の震えが止まり、もう何もかも大丈夫だって思える――そんな微笑みでした。
「わ、わたし……呼ばれたんです。頭の中に直接、この子の声が」
そう説明すると、その人はまた優しく微笑んで、
「なるほどね」
そう呟いて、わたしとさやかちゃんを温かな眼差しで見つめてきました。
「その制服、あなたたちも見滝原の生徒みたいね。二年生？」

「は、はい。あの、あなたは――？」
さやかちゃんがそう尋ねると、
「そうそう、自己紹介しないとね」
くすり、と笑ってからその人は大きな瞳をわずかに細めると、でもその前に、と付け足します。
「ちょっと一仕事、片付けちゃっていいかしら」
その言葉と同時に――
その人は片足で弧を描くようにステップを踏み、手の中で光る宝石のようなものを両手で持ち直します。優しかった顔つきが、どこか凛々しく引き締まり――その表情の変化は、絶望の淵にいたわたしの心を力強く包みます。
彼女の差し出した光る何かから、より強い光が溢れ、それはその人の身体を包みました。足下を辿る光は、彼女の革靴をブーツに変え――
身体を転がり上る光は、チェックのスカートを黄色の艶やかなフレアスカートに変えます。
気がつけば、その人の姿は、見たことも無い素敵なデザインに変わっていて――光をまき散らしながら、彼女は飛び上がっていました。
わたしとさやかちゃんが呆然とする中――

その人はいつの間にか、たくさんの銀の鉄砲を空中に浮かべ、それを一斉に撃ち放っていました。その弾丸は、わたしたちを包む光の円陣の外に容赦なく降り注ぎ――さっきまでわたしたちを取り囲んでいた、薄気味悪い何かを全部吹き飛ばしてしまいました。

「……す、すごい」

わたしが腕の中の不思議な生き物を抱きしめてそう呟いているうちに、急速に辺りが元の空間に戻って行きます。もう――圧倒的でした。わたしとさやかちゃんが立てなくなるほど恐ろしい何かを、この人は自己紹介の前に微笑みながら消し去ってしまったのでした。

その人が空中で一度くるり、と回転して着地すると同時に――

「も……戻った！」

さやかちゃんの声が弾みます。

辺りはもう、さっきまでわたしたちがいた、改装中の部屋へと景色を変えていました。

でも――

その人は、まだ厳しい表情を解きません。

「魔女は、逃げたわ」

そう、工事現場の奥の薄闇に向けて声をかけます。

わたしたちがそちらを見ると、そこから靴音を響かせて登場したのは――

あの黒と白の衣装に身を包んだ、暁美ほむらちゃんでした。

「仕留めたいならすぐ追いかけなさい。今回はあなたに譲ってあげる」
その言葉に、ほむらちゃんの頬がぎゅっと締まります。
「私が用があるのは――」
「呑み込みが悪いのね。見逃してあげるって言ってるの」
有無を言わせないその人の言葉に、ほむらちゃんは一度わたしの胸の中の生き物を睨みつけます。わたしがぎゅっと抱きしめると、どこか悔しげに視線をまたその人に向けました。
「お互い、余計なトラブルとは無縁でいたいと思わない？」
微笑んでそう言うその人を、ほむらちゃんは一度冷たく見据え――
冷たかったその瞳に、哀しみに似た不思議な輝きを一瞬浮かべて、踵を返します。
そして、そのまま――
闇の向こうへと、消えていったのです。

「――ありがとう、マミ。助かったよ」
その人が手を当てて何かを施した後、耳の長い生き物は息を吹き返したように言います。
「お礼はこの子たちに。私は通りがかっただけだから」
マミ、と呼ばれたその人が微笑むと、その不思議な生き物は赤いくりくりとした瞳をわ

たしたちに向けてきます。長いしっぽをふわりと回転させて、飛び跳ねながら言いました。
「どうもありがとう！　僕の名前はキュゥべえ」
「キュゥべえ……？　あなたが……わたしを呼んだの？」
おずおずとそう尋ねると、キュゥべえはかわいらしく頷きます。
「そうだよ。鹿目まどか。それと――美樹さやか」
「え……なんで、あたしたちの名前を？」
わたしは、もう散々頭の中に響くこの子の声を聞いていたからそんなに驚かなかったけど――さやかちゃんは、目を丸くしていました。けれど、キュゥべえはそんなことはまるで気にせず、淡々と、そして切実な口調で訴えてきました。
「僕、キミたちにお願いがあって来たんだ」
「……お、お願い？」
キュゥべえが、うん、と頷いた瞬間――
わたしは、突然、今朝の夢の光景を思い出しました。
曖昧に薄れかけて、途切れ途切れだった夢の欠片が、頭の中でくっきりと蘇っていました。
そうだ――
そうだ、わたしはこの子とも逢っている。

このキュゥべえと名乗る不思議な生き物も夢の中に出てきて。
そして――
夢と同じようにその赤い瞳を輝かせ、夢と同じようにこう言ったのでした。
「僕と契約して魔法少女になってよ！」

第一一章　それはとっても嬉しいなって

「私は――巴(ともえ)マミ。あなたたちと同じ見滝原中の三年生」
夕暮れの日差しにオレンジ色に髪を輝かせて、その人は優しく微笑みます。
「そして、キュゥべえと契約した魔法少女よ」
そこは――
マミさんの暮らすマンションの一室でした。
わたしとさやかちゃんは、あのショッピングモールから、マミさんに誘われるまま、彼女の家にお邪魔(じゃま)してました。
玄関から部屋に通されると、
「うわ……」
さやかちゃんが声を上げ、わたしも「素敵な部屋……」と思わず目を丸くしてしまいます。
そこは広めのワンルームマンションで、薄黄色で装飾されたベッドがあって、その横には、机があって辞書とか教科書とかが丁寧に並べてあって――とにかくすべてがきちんと片付いていて、そのどこにもマミさんのかわいらしくもしっかりとした性格が滲(にじ)み出てい

ました。家具の色使いも自然で、落ち着いていて、ずっとここで暮らせたら幸せだなあ……なんて、わたしは思わずうっとりしてしまいます。

「どうぞ」

にっこりと微笑んで差し出されたのは、ハーブティーとシフォンケーキでした。

小さな三角形のローテーブルを囲むように三人で座ると、マミさんはまた優しく微笑みます。

「一人暮らしだから、遠慮しないで。ろくにおもてなしの準備もないんだけど……」

「美味しいよね、このケーキは」

嬉しそうにマミさんの横にちょこんと腰掛けるのは、あのキュゥべえと名乗る不思議な生き物です。

「じゃあ、遠慮なく。いただきまーす」

さやかちゃんは早速、フォークを手に取ってケーキを口に入れます。

「うん、めっちゃうまっすよ」

そんなことを言ってるけど、わたしはとにかくさっきわたしたちの身に起きた出来事が頭から離れなくて、ここもまだ夢じゃないのかなって、部屋のあちこちに目をやっていました。

くすりと微笑んだ後、マミさんは言います。

「キュゥべえに選ばれた以上、あなたたちにとっても他人事じゃないものね。ある程度の説明は必要かと思って」
「うんうん、何でも訊いてくれたまえ」
「さやかちゃん、それ逆……」
「うふふ」
マミさんはまた微笑むと、淡く輝く卵形の物体をわたしたちに差し出します。
「これが、ソウルジェム」
「わあ、奇麗……」
わたしが思わず声を上げると、
「キュゥべえに選ばれた女の子が、契約によって生み出す宝石よ。魔力の源であり、魔法少女であることの証でもあるの」
マミさんはそう説明してくれました。
「契約って？」
さやかちゃんがケーキを頬張りながら尋ねると、マミさんの代わりにキュゥべえが答えます。
「僕はキミたちの願い事を、なんでもひとつ叶えてあげる」
「えッ？　本当？」

うん、と頷いてキュゥべえは続けます。
「何だって構わない。どんな奇跡だって起こしてあげられるよ」
「うお……金銀財宝とか、不老不死とか、満漢全席とか!?」
……えっと、さやかちゃん。最後のはちょっと。
「でも――」
キュゥべえは白く長いしっぽを振りかざして言い足します。
「それと引き換えにでき上がるのがソウルジェム。この石を手にした者は、魔女と戦う使命を課されるんだ」
「……魔女？」
わたしは、ついさっきの出来事を思い出しました。
誰かの悪い夢に紛れ込んでしまったような、あの気味の悪い世界。
そこに響いていた、悪意に満ちた嗤い声。自分が限りなくちっぽけな存在であると思い知らされるような、あの出来事。
「そう、願い事をひとつ叶える代わりに、キミたちに魔法少女となってあの魔女と戦ってほしいんだ！」
――魔法、少女？　わたしたちが……？
ていうか、そんな凄いこと……わたしにできるのかな？

このどんくさくて、弱虫なわたしに――？

「――魔女って何なの？　魔法少女とは違うの？」

さやかちゃんがそう尋ねると、キュゥべえは、どこか得意気に説明し始めました。

「願いから生まれるのが魔法少女だとすれば、魔女は呪いから生まれた存在。魔法少女が希望を振りまくように、魔女は絶望を撒き散らす。しかもその姿は普通の人間には見えないからタチが悪い。不安や猜疑心……そういう禍の種を、世界にもたらしているんだ」

ひとつ頷いてから、マミさんは言葉を挟みます。

「理由のはっきりしない自殺や殺人事件は、かなりの確率で魔女の呪いが原因なのよ。形のない悪意となって、人間を内側から蝕んでいくの」

その表情は、夕日に照らされて奇麗だったけど、とても真剣なものでした。

「そんなヤバイ奴らがいるのに、どうして誰も気付かないの？」

さやかちゃんが尋ねると、キュゥべえは困ったようにしっぽを丸めます。

「魔女は常に結界の奥に隠れ潜んで、決して人前には姿を現さないからね。さっき、キミたちが迷い込んだ迷路のような場所がそうだよ」

その言葉に――わたしの背中を冷たいものが伝います。

あの時、自分が居た場所の恐ろしさが今頃理解できて、唾を飲みます。

そんなわたしを優しく見つめて、マミさんは言いました。

「結構、危ないところだったのよ。あれに呑み込まれた人間は、普通は生きて帰れないから」
「マミさんは、そんな怖いものと戦っているんですか？」
わたしが震える声で尋ねると、
「そう、命懸けよ。だからあなたたちも慎重に選んだほうがいい」
マミさんは、真顔で頷きます。
「キュゥべえに選ばれたあなたたちには、どんな願いでも叶えられるチャンスがある。でもそれは死と隣り合わせなの」
「うぅ……」「うわぁ、悩むなぁ……」
身震いするわたしと、髪の毛を指先で掻きむしるさやかちゃんでした。
――わたしには、とても……無理だと思う。
そこまで、その言葉が口から出かけていたけど、
「でも、美味しい話だよね～。どんな望みでも叶えてもらえるんだもんねぇ……」
さやかちゃんは本気で悩んでいるようでした。
そのさやかちゃんの様子を眺めていたマミさんが、じゃあ、と口を開きました。
「そこで提案なんだけど――二人とも、しばらく私の魔女退治に付き合ってみない？」
「……え」「ええッ!?」

「魔女との戦いがどういうものか、その目で見て確かめてみればいいわ。その上で、危険を冒してまで叶えたい願いがあるのかどうか、じっくり考えてみるべきだと思うの」

そう言うと――

マミさんは、すべての不安が溶け去るような、あの優しい微笑みを浮かべてくれたのでした。

○

ジリリリリリリリリリリ！

「……はぅ？」

目覚まし時計の音にびっくりして飛び上がると――

そこは、わたしの部屋でした。

「……また、変な夢？」

枕を抱えて、深く息をついた瞬間――誰かの視線を感じます。

ふと見ると、わたしのお気に入りのぬいぐるみの中に――白く、耳の長い生き物が愛らしい表情で混じっていました。

「おはよう、まどか！」

「……あはは」

——夢では、なかったのです。

キュゥべえと出逢い、そこで魔女に襲われて、マミさんに救われて。

そして、マミさんに家に招待されて、魔女と魔法少女を巡るお話を聞いて——すべてが夢の中の出来事のようにしか思えなくても……全部、本当にあった現実の出来事なのでした。

ひとつ息をつくと、伸びをして、わたしは部屋から出ます。

さりげなく振り向くと、キュゥべえもちょこちょこと歩いてきて、そのまま、ぽん、とわたしの肩に飛び乗ってきました。

「ママたちに見つかると、困るよ……？」

「大丈夫だよ」

「どうして大丈夫なの？」

「僕の姿は、まどかたちにしか見えない。より正確に言えば、僕が姿を見せようと思っている相手にしか見えないんだ」

……そんなことってあるの？

わたしは半信半疑でしたが、廊下を進んで階段に差し掛かるところで——

「……は、はう」

ママとばったり出逢ってしまいました。
「よ、おはよう」
自分の部屋から出てきた、低血圧で朝の苦手なママは、ぼうっとした顔つきで手を挙げてきます。
「……お、おはよう、ママ」
そのままふたりして、洗面所へと向かいます。相変わらずキュゥべえはわたしの肩に腰掛けて機嫌よくしっぽを振っているんだけと、本当にママは気がつかないようでした。
「なあ、まどか。ゆうべは帰りが遅かったんだって？」
洗面台の前に立つと、ママは歯ブラシに歯磨き粉をつけながら、鏡越しに訊いてきます。
「あ、うん、ちょっと……先輩の家にお呼ばれしちゃって」
「まー門限とかうるさいことは言わないけとさ、晩飯の前には一報入れなよ。親を心配させすぎるとロクなことになんねーぞ」
「うん……ごめんね」
そう答えつつ、わたしはもうヒヤヒヤでした。
背後のお風呂場で、キュゥべえは洗面器に勝手に湯を張って、気持ち良さそうにお風呂に入っているのでした。
——本当に見えないんだ……

でもそれが確かめられると、いよいよ自分がまだ夢の世界に紛れ込んだままのようで、不安になります。

「ねえ、ママ？」

わたしは、思い切って尋ねてみることにします。

「もしも――もしも、だよ？　魔法でどんな願い事でも叶えてもらえる、って言われたら、どうする？」

すごくドキドキしながら、そう訊きました。

中学生にもなってそんなこと考えてるなんて、呆れられるかもしれないし、思い切り笑われるかもしれません。それでも、わたしにとって、昨日キュゥべえから言われたあの言葉は、妙な現実感があって、ひとりで胸に抱えるには、とてつもなく重いものだったのです。

だから、そう尋ねたわけなんだけど――

「役員を、二人ばかり余所に飛ばしてもらうわ」

歯を磨き終わったママは、一切の迷い無く、即答しました。

……うわ～。

呆れつつも、わたしも急いで歯を磨き終えると――

ママは、願い事が叶うことを前提に言葉を続けます。

「後はそーねー、社長もさー、もう無理が利く歳じゃねーんだからそろそろ隠居考えてほしいんだけど、代わりがいないってのがねぇ……あのドラ息子は二代目の器じゃねぇしなぁ……」

その楽しげな様子に、わたしもつい続いてしまいます。

「いっそママが社長さんになっちゃったら？」

すると――

メイクの手を止めて、ぱちんと指を鳴らすママです。

「その手があったか」

そのまま腕組みして、眉を寄せ――真剣な表情で、何かよくわからないことを呟き始めるのでした。

「……営業部にさえしっかり根回ししとけば、企画部と総務部は言いなりだし……そうなると問題は経理部のハゲかぁ。ふむ……」

「ママ、目が怖いよ……」

そうちょっと引いてると、

（――ね？　人間というのは、普通そういう風にひとつは願いがあるはずなんだ）

突然、そんな声が頭に響いて、びくっとするわたしです。

慌てて振り向くと――

洗面器の中のキュゥべえが、にこにこと微笑むようにわたしを見つめているのでした。

○

「……やばい、遅刻だ……！」

昨日と同じように、通学路を走るわたしです。

結局一晩経っても、ママに相談しても、何も答えを出せていません。キュゥべえの申し出を受けるべきなのか、ママさんの戦いを見学すべきか、そのすべてに迷ったまま通学路を走っていました。どれだけ早くから準備しても、毎度家を出るのがぎりぎりになるわたしは——やっぱり、どんくさいのでした。

「おっはよー」

そして昨日と同じように——

前方を歩く仁美ちゃんとさやかちゃんの背中を見つけ、声をかけます。

「おはようございます」

にっこり微笑む仁美ちゃんと、

「おはよう、ま……」

多分、まどか、と呼ぼうとしたさやかちゃんは……わたしを見るなり、固まっていまし

た。
それは多分——わたしの肩に乗ったままのキュゥべえが「おはよう、さやか！」と元気よく挨拶したためでした。
「う……あ……」
「どうかしましたか？　さやかさん」
仁美ちゃんが、不思議そうに顔を覗き込んでくるけど、さやかちゃんは小声でわたしに訊きます。
「やっぱソイツ……あたしたちにしか、見えないんだ？」
「……そうみたい」
それから、仁美ちゃんの手前、さっきキュゥべえに習ったことをやってみました。
頭の中で、言いたいことを一語一語しっかり思い浮かべます。
（頭で考えるだけで、会話とかできるみたいだよ）
「……いッ」
さやかちゃんは、一瞬びくっとしたけど——でも、即座に返してきました。
（……あ、あたしたち、もう既にそんなマジカルな力が？）
そこに、キュゥべえの呑気な声が割って入ってきます。
（いやいや、今はまだ僕が間で中継してるだけ。でも内緒話には便利でしょ？）

（な……なんか、変な感じ）

「あの、お二人とも、さっきからどうしたんです？　しきりに目配せしてますけど」

不意に仁美ちゃんがそう問い質してきて――

「えッ？　いや、これはッ、あの、その……」

慌てて言い訳を探すわたしだったけど、仁美ちゃんはなぜか身をよじらせて言いました。

「ま……まさか二人とも、既に目と目でわかり合う間柄ですの？　まぁッ、たった一日でそこまで急接近だなんて！　昨日はあのあと一体何が!?」

時々、突発的に妙な妄想の世界に入り込む癖が、仁美ちゃんにはありました。

どうやら、今はもう向こうの世界に行ってしまったようです。何を思い浮かべているのか、赤面して、顔を押さえ、ひとり足をくねらせています。

「……いや、そりゃねぇわ流石に」

さやかちゃんも呆れますが、仁美ちゃんの花園はいよいよ全開です。

「でも……そんな、いけませんわ、お二方、女の子同士で……それは禁断の恋の形ですのよ！」

わたしとさやかちゃんが、仁美ちゃんの頭の中でどういうことになってるのかわからないんだけど――そのまま、仁美ちゃんは、赤らむ頬を押さえて駆け去って行ってしまいました。

「バッグ、忘れてるよー！」
さやかちゃんが、そう仁美ちゃんの鞄を取り上げて手を振りますが、もう仁美ちゃんの姿は遠く霞んでいました。
「……今日の仁美ちゃん、なんだかさやかちゃんみたいだよ？」
わたしがそう言うと、ぼかりとひとつ頭を叩かれました。
「どーゆー意味だよぅ？　それはッ！」

○

教室は、いつもの賑やかさで満ちていました。
誰もが楽しそうに、昨日見たテレビの話題や、もうすぐやってくる定期テストの情報交換、好きな芸能人の話題をそれぞれ固まって、笑顔で話し込んでいる――そんな、いつものホームルーム前。
すこしほっとして、わたしは自分の席に着きます。
さやかちゃんは、どこかぐったりと席に着くと、早速テレパシーを飛ばしました。
（つーかさ、あんた、のこのこ学校までついて来ちゃって良かったの？）
それはわたしに、というよりキュゥべえに問いかけたようです。

（どうして？）
（言ったでしょ。昨日のあいつ、このクラスの転校生だって）
……そうでした。
わたしは、ほむらちゃんのことを忘れていて、思わず身体を硬くしました。
（あんた、命狙われてるんじゃないの？　呑気にしっぽ振ってる場合じゃないでしょ）
さやかちゃんは、呆れたようにそう心で呟いていたけど、キュゥべえは相変わらずのんびりと返してきます。
（大丈夫だよ。むしろ学校の方が安全だと思うな。マミもいるし）
（でも……マミさんは三年生だから、クラス、ちょっと遠いよ？）
わたしが、そうふたりの会話に加わった時でした。
（――ご心配なく。話はちゃんと聞こえてるわ）
突然、マミさんの声が頭に響きました。
「わっ」
「え……えっと、おはようございます！」
思わず、テレパシーじゃなくて声に出てしまったわたしたちの頭の中に――
マミさんのくすくすという笑い声が柔らかく響きます。
（ちゃんと見守ってるから安心して。それにあの子だって、人前で襲ってくるような真似

はしないはずよ）

その温かい声色は、不思議とわたしの心を鎮めてくれます。

これから大変なことが起きようと、この人がいるならすべて大丈夫だ、と思わせてくれる力がマミさんの声には備わっているようでした。

「ならいいんだけど……」

そう言いかけたさやかちゃんの声が途中で止まります。

「げ……噂をすれば影」

その言葉で、教室の前の方を見ると――

そこには、鞄を持って教室に入ってくる、暁美ほむらちゃんがいました。

昨日と同じように、白い顔に強い意思をたたえ――そして、じっとわたしを――というより、わたしの肩にとまるキュゥべえを睨みつけていました。怯えたように、わたしの膝に転がり込んできたキュゥべえを守るように、わたしはその背に手を重ねます。

「……どうして、なのかな？」

わたしは、そう呟いていました。

「……どうして、みんな仲良くできないのかな……」

その疑問は――

昨日、マミさんに言われた言葉を聞いてから、ずっとわたしの胸に刺さったままでした。

『――じゃあ、あの転校生も魔法少女なの？　マミさんと同じ？』
それは、昨日のマミさんのマンションでのことでした。
さやかちゃんの質問に、マミさんは頷いて言います。
『そうね。間違いないわ。かなり強い魔力を持ってるみたい』
『でも、それなら魔女をやっつける正義の味方なんだよね？　それがなんで、急にまどかを襲ったりしたわけ？』
『彼女が狙ってたのは、僕だよ』
そこにキュゥべえが、のんびりとした口調で割って入ります。
『新しい魔法少女が生まれることを、阻止しようとしてたんだろうね』
『え……』
わたしがびっくりしていると、さやかちゃんが代わりに尋ねてくれました。
『なんで？　同じ敵と戦っているなら、仲間は多い方がいいんじゃないの？』
『それが、そうでもないの』
今度は、マミさんが小さく溜息をついて答えます。
『むしろ、競争になることの方が多いのよね』
『そんな……どうして……』

『魔女を倒せば、それなりの見返りがあるの。だから時と場合によっては、手柄の取り合いになってぶつかることもあるのよね』

『つまり、あいつは――キュゥべえがまどかに声をかけるって最初から目星をつけてて、それで朝からあんなに絡んできたってわけ？』

そのさやかちゃんの怒ったような言葉に――

多分、そういうことでしょうねってマミさんは残念そうに頷いていたけど……

――どうしてだろう？

マミさんの説明を聞いても、わたしにはまるでわかりませんでした。

あんな恐ろしい魔女と戦うなら、みんなで協力し合って戦えればそれに越したことはないのに……

そういう思いが、どうしても拭えないのでした。

（――気にすんな、まどか）

さやかちゃんの声が頭の中に響いて、わたしは我に返りました。

（あいつが何かちょっかい出してきたら、あたしがぶっとばしてやるからさ。マミさんだってついてるんだし）

その言葉に重なるように、マミさんの声も優しく響きます。

（そうよ。美樹さんはともかくとして、私がついてるんだから大丈夫。安心して）
（ちょ……ともかくってゆーなーッ）
そんなふたりのやりとりに、わたしは思わず口元を緩ませます。
きっとわざと、わたしの緊張をほぐす為に、マミさんがおどけてくれたんだとわかりました。
ひとりじゃない、というその思いがわたしの気持ちをなんとか奮い立たせてくれて、やっともう一度顔を上げてほむらちゃんの方を見ると――
もう、ほむらちゃんは何事もなかったように、自分の席に着くところでした。

○

わたしは、のろまだし、自分の考えもうまく言えない、弱虫だけど――
そのくせ、どこかのんびりしているという、さらにどうしようもない性格でもあったりして……
授業が始まってからも、しばらくは緊張してほむらちゃんの様子を窺って怯えたり、さやかちゃんの様子を見て気持ちを鎮めたりしていたんだけど、それにも飽きて、やがてノートにいたずら描きなんて始めていました。しかも、それは魔法少女に変身したマミさん

の姿です。怖いという気持ちや、今後の不安を感じていたのも確かだけど、それ以上に、マミさんの颯爽としたあの姿が目に焼き付いて離れないのも事実なのでした。

——帽子と……胸にリボンもついてたっけ……？

夢中になってそれを描きあげるとひとり微笑んで、その後は、いつしかもうひとり魔法少女を描き出していました。それは、リボンとフリルの衣装に身を包んだ、魔法少女姿のわたしです。

マミさんに倣って、ふわふわスカートをつけて……ううん、これはわたしにはちょっと派手すぎるよなあ、と消して、すこし控えめなデザインに変えて、また、ううんこれだとパンツ見えちゃうし、と消して——

午前中の授業が終わる頃、わたしのノートには、かわいらしい衣装に身を包んで微笑む、完全無欠のわたしがいました。

けど、それは——

あまりにも理想的すぎて、現実のわたしが追いつけないほど輝いていて……

すこしだけ……ほんのすこしだけ、哀しくなるのでした。

「——ねぇ、まどか」

その日の昼休みのことでした。

校舎の屋上で、さやかちゃんが尋ねてきます。
手に持ったお弁当を持ち直して、わたしはさやかちゃんの方を見ました。わたしの肩には相変わらずキュゥべえがちょこんと腰掛けてて、さやかちゃんは転落防止用の金網フェンスに手をかけて、澄んだ青空を見つめています。
「願いごと、何か考えた？」
「……ううん、さやかちゃんは？」
「あたしも全然。何だかなー。いくらでも思いつくと思ったんだけどなー」
溜息をついてフェンスから手を離すと、さやかちゃんはひとつ伸びをします。
「欲しいモノもやりたいことも、いっぱいあるけどさ。命懸け、ってところで、やっぱ引っかかっちゃうよね。そうまでする程のモンじゃねーよなーって」
うん、とわたしが頷くと、「意外だなあ」とキュゥべえが口を挟みました。
「大抵の子は、二つ返事なんだけど」
「……そうなの？」
「そうだよ。キミたちくらいの年頃の女の子なんて、それこそ自分だけの夢で押しつぶされそうなものだと思うけど」
それに対して、さやかちゃんが少しだけ笑います。
「まーきっと、あたしたちがバカなんだよ」

わたしが首をかしげると、さやかちゃんは頷いて繰り返しました。

「そう――幸せバカ」

見ると……その表情は、すでに笑顔ではなくなっています。

「別に珍しくなんかないはずだよ。命と引き換えにしてでも叶えたい望みって。そういうの抱えてる人は、世の中に大勢いるんじゃないのかな。だから……それが見つからないあたしたちって、その程度の不幸しか知らないってことじゃん。恵まれすぎてバカになっちゃってるんだよ」

その言葉で――さやかちゃんが、上条くんのことを言っているのだとようやく気がつきました。

天性の才能を持って生まれてきて、誰からもその将来を期待されていた、さやかちゃんの幼なじみ――だけど、今年の春、無情にもそのすべてを失ってしまった、わたしたちと同い年の男の子。

確かに――わたしたちなんて、上条くんが抱える苦しみや哀しみを考えると、幸せバカなのかもしれません。

「……なんで、あたしたちなのかな？　不公平だと思わない？　こういうチャンス、本当に欲しいと思ってる人は他にいるはずなのにね……」

こういう時――

わたしは、いつも何も言葉が出てきません。
気の利いたことを言ってあげられる頭の良さも、笑顔を取り戻させる機転もきかないのです。それは、ただそこに転がっている小石と同じようなものでした。さっきまで教室で魔法少女になった時の衣装を考えていた自分がたまらなく情けなくなって、手に持ったお弁当箱をぐっと握りしめていると、肩のキュゥべえがわずかに動くのを感じました。
振り返ると、そこには――
いつの間にか、暁美ほむらちゃんが立っていました。
風に長い黒髪を舞わせ、白い顔に浮かぶ大きな瞳には、やっぱり強い光があって――
わたしは、もう条件反射のように足が動かなくなってしまいます。
「まどか、下がって」
さやかちゃんが、さっとわたしの前に立ちはだかった瞬間――
(大丈夫)
わたしの頭の中に、マミさんの言葉が響きました。
見ると、隣の校舎の屋上にはマミさんがいて――
その手の中には、わたしの位置からでもわかるほど光輝くソウルジェムがあります。
近づいてきたほむらちゃんも、それを見ると足を止めました。
「……昨日の続きかよ?」

完全に喧嘩腰のさやかちゃんの言葉に、ほむらちゃんはしばらく黙った後、
「いいえ、そのつもりはないわ」
そう冷たい眼差しで、わたしの肩に座るキュゥべえを睨みつけます。
「そいつが、鹿目まどかと接触する前にケリをつけたかったけれど……今更それも手遅れだし」
それから、わたしに視線を移し、尋ねてきます。
「で、どうするの？　あなたも魔法少女になるつもり？」
「わ、わたしは――」
そう言いかけた時、キュゥべえが代わりに答えました。
「僕は強制はしてないよ。まどかたちも今、迷ってるところだ」
「どっちにしろ、あんたにとやかく言われる筋合いはないわよ」
だけど、そのキュゥべえの言葉もさやかちゃんの言葉も無視して――
ほむらちゃんは、わたしに尋ねてきました。
「昨日の話、憶えてる？」
うん、とわたしはおずおずと答えます。
保健室を案内してもらうという名目で教室から連れ出された時のことです。
あの時、わたしは言われたのでした。

自分の人生が貴いと思うなら。
家族や友達が大切だと思うなら。
けして、今の自分とは違う自分になろうとしないこと。
さもなければ——すべてを失うことになる、と。
そう、あの時、ほむらちゃんはわたしに言ったのでした。
それがどういうことなのか、いまだにわたしにはわからないけど——
でも、今ようやく、ほむらちゃんは本気なのだと実感しました。あの時は、ただ怖くて、どうしてこんなことを言われているのかわからなくて動揺していたけど、ほむらちゃんは悪い人じゃなくて——何か目的があって、願いがあって、それでわたしにあんなことを言ってきたんじゃないかなって——この時、わたしはそう思えたのでした。
「ならいいわ。忠告が無駄にならないよう、祈ってる」
それだけ呟くと、あっさり踵を返した彼女に——
「ほ——ほむらちゃん！」
わたしは、思わず呼びかけていました。
数歩歩いたところで、ほむらちゃんは足を止めてこちらを振り向いてくれました。
「あの……あなたは、どんな願い事をして魔法少女になったの？」
どうしてこの時、そんなことを尋ねてしまったのかわかりません。

けど、それがわかれば、みんなで仲良く魔女と戦っていけるんじゃないかなって——たぶん、この時、わたしは心のどこかで期待してしまったような気がします。けれど——

それは、とてもとても愚(おろ)かな考えでした。

その時、ほむらちゃんの瞳に宿(やど)った冷たい光は——

次の瞬間、白い炎のように歪み、ゆらめき——一瞬でわたしを後悔の念で包みました。

それは、訊かなければよかったとかそういう後悔じゃなくて——

なんというか……知らないうちに人を傷つけてしまった時のような後味の悪さなのでした。

○

「今日も、駅前のお店に寄ります？」

その日の放課後のことでした。

ホームルームが終わって、鞄に教科書を詰め込んでいると、仁美ちゃんが話しかけてきました。

「え……えっと」

わたしが何と言ってよいかもごもごしていると、
「仁美ごめん、今日はあたしら、ちょっと野暮用があって」
さやかちゃんが、そう助け舟を出してくれました。
「あら、内緒ごとですの？」
仁美ちゃんはわずかに眉をしかめて、その後、ほのかに頬を染めます。
「羨ましいですわ。もうお二人の間に割り込む余地なんてないんですのね……」
「いや……だから、違うってそれ」
「別にいいんですの。お邪魔はしませんわ」
とたた、と小走りに教室を出て行く仁美ちゃんを溜息まじりに見送って、さやかちゃんはわたしの方に向き直ります。
「んじゃ、行こうか。まどか」
「……うん」
そう頷き、そっとほむらちゃんの方を窺うと、彼女はクラスの女子数人に囲まれて放課後どこかに遊びに行こう、と誘われてました。その子たちに対して、かすかに微笑んでいるほむらちゃんを見て——わたしは、すこしだけ安心します。それから、わたしは先に教室を出て行くさやかちゃんの後を、慌てて追いかけました。
今日の放課後から——わたしとさやかちゃんは、魔法少女候補見習い（？）として、マ

ミさんの魔女退治について行くことになっているのです。まだ、魔法少女になるか決めてもいないし、なったところで役に立てるかどうかもわからないのに、ぼやぼやと流されて行くわたしでした。

待ち合わせ場所である、駅前のファーストフード店に着くと、もうマミさんは到着していて、わたしたちの姿を見つけると微笑んで手を振ってくれました。

とりあえず、わたしはチーズバーガーセットを頼み、さやかちゃんはがっつりバリューセットを頼みます。それらを受け取り、席に着くと、マミさんはオレンジジュースしか頼んでいなくて、すこし恥ずかしくなりました。

「食欲があるのはいいことよ」

そう笑われるけど、これから危険な魔女退治に行こうというのに、緊張感のなさすぎるわたしたちでした。

「緊張感がないのは、まどかだけだよ」

わたしが沈んでいると、さやかちゃんは机の下から布で包まれた細長いものを取り出します。

「それ、ずっと持っていたけどなに？」

わたしが訊くと、さやかちゃんは口一杯にハンバーガーを頬張りながら無言で包みをほどいて中身を見せてくれました。

「金属、バット……？」
「こっそり体育倉庫からガメてきたよ。何もないよりはマシかと思って」
……えーと。
あの恐ろしい魔女にバットが役に立つのかどうかはともかくとして……さやかちゃんのその心意気はさすがだなって思うわたしでした。
「まあ、そういう覚悟でいてくれるのは助かるわ」
マミさんもどこか呆れたように微笑んでそう言うと、さやかちゃんはわたしに得意気に訊いてきます。
「で、まどかは？　何か持ってきた？」
「え？　えっと、わたしは……」
やっぱり、何か持ってきたほうがよかったのかな……？
でも……今日は見学って聞いていたし、その前にわたしなんかが何か持ってきたところで役に立てるような気がしなかったので、完全に手ぶらでした。けど、さやかちゃんの期待に満ちた視線に追い立てられるように、仕方なくわたしは鞄からノートを取り出します。
「……ノート？」
そこには、今日の授業時間のすべてを使って描き込まれた、魔法少女のイラストが満載でした。わたしなりに懸命に考えた、三面図と、細かい設定と、あと……決めポーズとか

とか。
「と、とりあえず、衣装だけでも考えておこうかと思って……」
そうしどろもどろに説明し始めたわたしだけど――
すべて話し終わる前に、マミさんとさやかちゃんは笑い転げていました。
「……うん、意気込みとしては充分ね」
涙を拭きながらそう言うマミさんと、
「こりゃあ参った……あんたにゃ、負けるわ」
咳き込みながら、お腹を押さえるさやかちゃんに――
わたしは、もう消えてしまいたいほど小さくなっていました。
ひとしきり笑った後――
マミさんは、さて、と真面目な顔になります。
「そろそろ、行きましょうか」

○

「これが、昨日の魔女が残していった魔力の痕跡（こんせき）」
わたしたちは、あのコンクリートが剝き出しになった、昨日のモール改装エリアにいま

した。

そこで、マミさんが取り出したソウルジェムの光に照らされる、何か黒い染みのようなものを見つめています。

「基本的に、魔女捜しは足頼みよ。こうしてソウルジェムが捉える魔女の気配を辿っていくわけ」

「意外と、地味ですね……」

さやかちゃんの声がコンクリートの壁に響き、マミさんは、そうね、と微笑みます。

ソウルジェムは、時々光の強さを変え、導くように明滅していました。マミさんはそれが意味することを理解しているらしく、迷うことなく、どこかに歩みを進めていきます。わたしとさやかちゃんは、とにかくマミさんの背後を、ふたりでおっかなびっくりついていくのでした。

そのまま三人でショッピングモールを出て、商店街を進みます。

だけど——

住宅街に出た辺りで、光の明滅が途絶えてしまいました。

「あれ……？　光が……」

さやかちゃんが言うと、マミさんも辺りを見回しながら、頷きます。

「取り逃がしてから一晩経っちゃったからね。足跡も薄くなってるわ」

「あのとき、すぐに追いかけてたら……」

責任を感じてそう呟いてしまったわたしに——

マミさんは、いつもの優しい微笑みを見せてくれました。

「気にしなくていいの。仕留められたかもしれないけれど、あなたたちを放っておいてまで優先することじゃなかったわ」

その柔らかな微笑みは、わたしの心に優しく染み込んでいきます。

考えたら、マミさんはいつもあんな怖い魔女と、たったひとりで戦っているのです。それなのに、わたしたちみたいな足手まといの世話までしてくれて、その上、優しい気遣いもみせてくれます。

「うん、やっぱりマミさんは正義の味方だ！」

さやかちゃんも感激したらしく、嬉しそうにそう叫んでいて——

そしてこの時、わたしの中で、初めて〝なりたいわたし〟が生まれていくのを感じていました。前を進むマミさんのふわりとしたよい香りのする髪を見つめて、思ったのです。

これからも、道に迷うだろうけど——その時、マミさんならどうするだろう、と考えられたら。

そうしたら、今までみたいにいろいろなことに迷って、悩んで、ぐずぐずになることはないんじゃないのかな、なんて……そう思ったのでした。

「それに引き換え、あの転校生、ホントにむかつくなー」
突然、さやかちゃんがそう怒ったように呟いて――それが、ほむらちゃんのことを言っているのはわかりました。
けど、わたしは思うのです。
彼女も魔法少女であるということは――
何かの願いと引き換えに契約したわけで、それはきっと彼女にとってすべてを引き換えにするほど大事なことで――そんなものを抱えて生きている彼女もまた、ただのひとりの女の子で――
つまり、ホントに悪い子なのかなって……そう思ってしまうのでした。
「まあ、あの子のことはともかく――」
マミさんはソウルジェムを見つめたまま、言います。
「今はとにかく、昨日の魔女を見つけないと。犠牲者が出てからでは取り返しがつかないわ」
「ねぇマミさん、魔女のいそうな場所、せめて目星ぐらいはつけられないの？」
さやかちゃんが訊くと、マミさんは説明してくれました。
「魔女の呪いの影響で、わりと多いのは交通事故や傷害事件よね。だから大きな道路や、喧嘩が起きそうな歓楽街は優先的にチェックしないと。あとは自殺に向いてそうな人気の

ない場所……それから、病院とかに取り憑かれると最悪よ。ただでさえ弱っている人たちから生命力が吸い上げられるから、目も当てられないことになる」

いつしか周りは、だいぶ薄暗くなっていました。

そして、この辺りは見滝原町が再開発を始めた時、放棄された工場跡地だとたしか前にママに聞いたことがあります。あのへんは悪ガキも多いから行くんじゃないよ、と言われたことも思い出します。

「それだけわかってたら、けっこう限られてくるんじゃないの？」

さやかちゃんが、警戒するようにバットを肩にかけてそう訊くと、

「同じ場所で繰り返し犠牲が出たら、不吉な場所として注目されちゃうでしょう？　だから魔女は私たちの裏をかこうとして、何度も場所を移動するの」

そこまで話したところで、マミさんは不意に言葉を止めました。

わたしたちも立ち止まり、マミさんの手の中のソウルジェムに見入ります。

それは、明らかに先ほどとは光の強さが異なっていました。光の明滅が強く、頻繁に変わっています。

「かなり強い魔力の波動だわ。近いかも」

マミさんの声もどこか厳しいものに変わり、わたしたちも身を寄せ合うようにして、改めて周囲に気を配ります。

辺りを窺いつつ、マミさんは四方にソウルジェムをかざし、そして光の反応する方向へと足早に進みます。わたしたちはただ離れないようについていきました。

そして、とある廃ビルの前にたどり着くと、

「間違いない、ここよ……」

マミさんが頭上を見上げるのに合わせて、わたしが顔を上げた瞬間――

その人が目に入りました。

ビルの屋上に、ＯＬ風の格好をした女性が佇み――風に髪を舞わせていました。

「ま……マミさん、あれ！」

さやかちゃんが叫ぶと同時に――

女性は、ふわりと空へ足を踏み出してしまっていて……

「き……きゃあああッ！」

わたしが目を背けて叫んだ瞬間、マミさんの身体から光が溢れ出していました。

制服が光に包まれ、信じられないほど高く飛び立ちます。

気がついた時には、マミさんは昨日の艶やかな魔法少女の衣装に身を包み、魔法のリボンで、落ちてくる女性を受け止めていました。

そのまま、マミさんはすでに気を失っている女性を抱き抱え、ゆっくりと地表に降り立ちます。

駆け寄ったわたしたちの前でそっとその女性を寝かせると、マミさんは女性の首もとを指し示します。そして、そこには——不思議な痣が刻み込まれていました。

「魔女の口づけ——やっぱりね」

「そ、その人は……」

わたしが震えた声で尋ねると、

「大丈夫。気を失ってるだけ。——行くわよ！」

マミさんは、そのまま駆け出しました。わたしたちが慌ててついていくと、マミさんはビルの入り口で、たちまち昨日の気味の悪い空間へと続く入り口を暴き出します。

「今日こそ逃がさないわよ……」

その強い覚悟を秘めたつぶやきに、さやかちゃんも覚悟を決めたのか、あの包みからバットを取り出します。それにマミさんが手を伸ばすと、光の輪がマミさんの腕からバットへと乗り移り、バットが白いステッキに形を変えてしまいました。

「気休めだけど、これで身を守る程度の役には立つわ。絶対に私の側を離れないでね」

そう力強く微笑むマミさんの顔に、みるみるわたしたちの胸に熱いものが漲ります。

「は、はい！」

ふたりしてそう返事すると同時に——わたしたちは、マミさんを先頭に魔女の結界へと足を進めて行きました。

そこは、昨日と同じ――

悪意と憎しみに満ちた、壊れた世界でした。

黒い蝶が踊り、赤い蝶が舞い、奇妙な草花が咲き乱れていました。

けたけたという嗤い声も、辺り一面に響いています。古いビルの骨格が歪んで、どこが上か下かわからなくなるくらいねじ曲がって――それでも、その通路を、マミさんは迷うことなく突き進んで行きます。

そわりと、どこかで何かが動き――

次の瞬間、闇の向こうから、たくさんの黒い塊（かたまり）が押し寄せてきました。それでも、マミさんは落ち着き払って手を交差させ、昨日見た銀色の鉄砲を出現させます。それがみるみる増えて、空中で訓練された兵隊さんみたいにマミさんを中心に陣形を築き、即座に一斉射撃を開始しました。

その無数の弾丸に、黒い塊たちは次々と撃ち抜かれていきます。

「わわッ、く、来んな。来んな！」

わたしたちをからかうように頭の上をばたつく奇妙な生き物たちを、さやかちゃんは必死にステッキで追い払っていて――情けないんだけど、わたしはひたすらさやかちゃんの後ろに隠れて、ふるえているだけでした。

「――どう？　怖い？　二人とも」

マミさんは奇怪な生き物を次々に撃ち飛ばしつつ、こちらを振り返ってくれます。
「なっなっなっ何てことねーッて！」
とこか自棄になって叫ぶさやかちゃんだったけと——
わたしの瞳は、ただ……一心にマミさんの背中に注がれていました。
ふわりとした髪と、かわいらしいスカートを翻して、踊るように、ステップを踏むように、銀色の鉄砲を操るマミさんは、ただ素敵で——
「怖いけと、でも……」
でも、それは——
ただ、ただ、素敵で。
目映いほど、鮮やかで。
とくん、とくん、と、わたしの打たれ弱い心臓は、感じたことの無い高鳴りを見せていたのでした。
「頑張って！　もうすぐ結界の最深部だ！」
キュゥべえのその叫びに頷き返し、わたしたちは懸命にマミさんに置いていかれないように、ついていきます。
そして——
「見て——あれが、魔女」

わたしたちの眼の前に広がるドーム状の空間に、昨日見た、奇怪で奇妙な何かが、より大きくなって佇んでいました。

「〝薔薇園〟の魔女、だね」

「……薔薇園？」

突然、足下のキュゥべえが囁き、わたしは訊き返します。

「〝造園〟の使い魔と、〝警戒〟の使い魔を従え、誰も住まぬ廃墟を好み、その性質は〝不信〟を司るんだ」

「うわっ、グロい……」

さやかちゃんが顔を歪めて呟き、

「あんなのと……戦うんですか？」

さっきまでマミさんに見とれていたわたしが思わず声を震わせると、マミさんは微笑んで頷きました。

「大丈夫。負けるもんですか」

そのまま、下がってて、とわたしたちの前にリボンの壁を作ると、ひとりその巨大な怪物に歩み寄ります。

一度立ち止まり、スカートや帽子の中からたくさんの銀色の鉄砲を出現させると、それを次々と手に取って撃ち放ちました。

しかし、魔女と呼ばれるその怪物はすばやく動き、マミさんの弾丸から身を避け続け——ついには、黒い蔦でマミさんを捕まえてしまいます。マミさんも負けじと応戦するのですが、弾丸は地面へとめり込むばかりです。

「な、なにやってんのさ、マミさぁん！」

さやかちゃんが心配のあまりそう叫ぶと、

「まぁ、見てなさい」

マミさんは落ち着き払った声色で言い放ちました。

「大丈夫。未来の後輩に、あんまり格好悪いとこ見せられないものね！」

すると、いま撃ち放った弾丸跡から一斉に金色に輝く糸が伸びて、魔女の身体全体を包み込みます。

動きを封じられた魔女は、そのことに気がついて、辺りの壁が崩れそうなほど暴れまわったけど、一向にほどける様子はありません。一方マミさんはその時にはすでに胸のリボンを操って黒い蔦から脱出していました。

「惜しかったわね」

マミさんがほどいた胸のリボンを翻すと——それは、光となってマミさんの手の中に集り、ひとつの大きな——とても大きな鉄砲へと姿を変え——

「ティロ・フィナ——レ!!」

目を開けていられないほどの目映い閃光とともに、撃ち放たれていました。
耳をつんざくような叫び声が、辺りに満ち――
身体のあちこちに絡み付くような、どろどろとした何かが消え去って行くのを感じます。
わたしが、恐る恐る目を開けた時には……
歪んだ景色が、みるみる元の廃ビルへと戻っていくところでした。
「か、勝った……の？」
「凄い……」
さやかちゃんとわたしが呆然としている中――
明るい髪を翻して、マミさんは降り立ちました。
そして、わたしたちの方にゆっくりと近づいてくると、手の中で光る何かを差し出してくれます。
それは――黒い宝石のようなものでした。
「これが、グリーフシード。魔女の卵よ」
「た、卵……」
「運が良ければ、ときどき魔女が持ち歩いてることがあるの」
「大丈夫。その状態では安全だよ。むしろ役に立つ貴重なモノだ」
肩にいたキュゥべえが明るく説明してくれたので、わたしとさやかちゃんは、指先で、

ちょんちょんとそれを突っついてみたんだけど——確かに、ただの固く奇麗な石にしか思えません。

「私のソウルジェム、ゆうべよりちょっと色が濁ってるでしょ？」

マミさんが、ソウルジェムを差し出してくれたので、見ると確かにどこかくすんだ色に変わっています。

「でもグリーフシードを使えば、ほら——」

そう言って、マミさんが、ソウルジェムとグリーフシードと呼ばれる黒い石を近づけると——

ふたつの石は共鳴するような音を立て、光り輝き、ソウルジェムから何かが迸って、グリーフシードへと移るのがわかりました。

「わあ……」

「ね？」

マミさんがにっこりと笑ってかざすソウルジェムは、元の透き通った輝きを取り戻しています。

「これで消耗した私の魔力も元通り。前に話した魔女退治の見返りっていうのが、これ」

そして——

その説明が、終わるか終わらないかのタイミングでした。

不意に、マミさんはグリーフシードをどこか部屋の隅へと投げます。
だけど、それは壁に当たるか床に転がる音を立てることもなく――
暗がりから現れた、誰かによって受け止められました。
「……あ、あいつッ!?」
さやかちゃんの声でわたしもはっとしました。
それは――
見滝原中学校の制服を着た、暁美ほむらちゃんでした。
「あと一度ぐらいは使えるはずよ。あなたにあげるわ。暁美ほむらさん」
マミさんのその言葉に、ほむらちゃんは無言でグリーフシードを見つめます。
その視線は、冴え冴えとしていて――
「――それとも、人と分け合うんじゃ不服かしら？　丸ごと自分のものにしたかった？」
そのマミさんの言葉にも、眉ひとつ動かすことはありません。
そのまま、再びグリーフシードをマミさんに投げ返して言います。
「あなたの獲物よ。あなただけのものにすればいい」
「そう……それがあなたの答えね」
マミさんは、小さく溜息をつくと改めて足を僅かに開き、身構えます。
それは――

マミさんが、明確にほむらちゃんを敵――ううん、少なくとも味方とはなりえない、と見定めたってことで……わたしの胸は、きゅううと痛みます。

ほむらちゃんは、そんなマミさんの様子にも動じることなく――辺りを凍てつかせるような視線をこちらに投げつけます。

もう、今にも魔法少女同士の戦いが始まってしまうんじゃないかっていう重い沈黙が続いて――

わたしの心臓が、口から飛び出てしまうんじゃないかってくらい、ドキドキと高鳴り始めて。

それから、どれほどの時が過ぎたのか……

突然、ほむらちゃんは、黙って踵を返します。

そして、そのまま――闇に溶けるように、去っていったのでした。

「はぁぁぁ……」

思わず、気が抜けて息をついてしまうわたしと、

「く～っ、やっぱ感じ悪いやつ！」

思い切り憎まれ口を叩くさやかちゃんでした。

そっと横で構えを解くマミさんの横顔を見つめると――

マミさんもどこかほっとしたように、小さく息をついていました。

その表情を眺めていると、やっぱり、わたしは思ってしまいます。
――すべての魔法少女が、みんな仲良くできればいいのに……と。
だけど、そんなわたしの表情を読むように――
「お互いにそう思えれば、ね……」
マミさんはどこか悲しげに呟くのでした。

その日の夜――
自分の部屋でのことでした。
パジャマに着替えてベッドに入ったのはいいんだけど、いつまでも身体が熱を持ったように興奮していたわたしは、寝るのを諦めて机に向かっていました。
鞄からノートを取り出して、あの授業中に描いた魔法少女のページを開きます。
それから、色鉛筆を取り出して――そのイラストに、色をつけ始めていたのでした。
それは、魔女を倒した後のこと。
意識を失っていたあの女性を、マミさんが介抱した時のことでした。
『ここは……あれ？　私は……』
魔女に憑かれていたとはいえ、いきなり廃ビルの外で、わたしたちみたいな中学生に囲まれていた女性はびっくりしていました。そのうち、自殺をしようとしていたことを思い

出したのか、突然パニックになって、マミさんの腕に爪を立てるように叫び出します。
『や、やだっ、私、なんで……そんな！　どうしてあんなこと……ッ!?』
『大丈夫』
マミさんは、そんな女性を抱きしめるように優しく諭しました。
『もう大丈夫です。ちょっと悪い夢を見てただけですよ』
その微笑みは、やっぱり優しくて力強くて――
怯えていた女性は、やがてマミさんの胸に顔を埋めるようにして泣き始め……そしてマミさんはまるでお母さんのように、優しく、その女性の髪を撫でさすってあげるのでした。
その時の光景を思い出しながら――
今、わたしの中に芽生え始める何かを、丁寧に色に変えていました。
少しずつ色を加えられていく、ノートの中で微笑む、魔法少女姿のわたし。
それは、いつかなりたい、理想の自分でした。
どんなことにも怯えず、誰に対しても優しく――きっとあの恐ろしい魔女にすら、にっこりと微笑むことのできる、完全無欠の魔法少女。
そんな理想の魔法少女に変身したわたしには――きっと、マミさんにもらった大切な何かがたくさんちりばめられていて。
叶えたい願い事とか、わたしには難しすぎて、すぐには決められないけれど……

それでも、人助けのために頑張るマミさんの姿は、とても素敵で、温かくって、かっこよくて。

こんなわたしでも、あんな風に誰かの役に立てるとしたら、それはとっても嬉しいなって——そう思ってしまうのでした。

第二章　わたしなんかで、良かったら

そこには、あのけたけたという嗤い声が満ちていて。
刺のついた頭を持つ、大きな黒猫のような怪物がいて。
結界の中に来るのは、もう三回目だというのに、わたしの足はやっぱり竦んでいて——
そこに、マミさんの声が天高くこだまします。
「ティロ・フィナ————レ!!」
同時に、目映い光が暗闇を裂き——
闇の奥で蠢いていた怪物が、ばらばらと破れ散っていくところでした。
「や……やった!」
「すげえ、マミさん!」
わたしとさやかちゃんが声を上げると同時に、結界は解かれ、元の公園へと景色は戻って行きます。
「やっぱマミさんってかっこいいね!」
さやかちゃんがそう飛び跳ねると、
「もう、見せ物じゃないのよ。危ないことしてる、って意識は忘れないでおいてほしいわ」

すこし困ったようにマミさんはそう諫めるけど——それでも、さやかちゃんは興奮したように、いえーすと楽しげに返事をしてます。でも、それは仕方ないことだとわたしは思いました。だって、今のマミさんのきらきらとした活躍を見たわたしだって、まだ心臓がどきどきして、身体がほてっているくらいなのです。

でも……

ひとつ、気になることがありました。

「グリーフシード、落とさなかったね」

わたしがそう呟くと、

「まあ、今のは使い魔でしかないからね」

足下をちょこちょことついてくるキュゥべえが代わりに答えてくれました。

「魔女から分裂した、〝夢〟の使い魔。グリーフシードは持ってないよ」

「魔女じゃなかったんだ……？」

「なんか、ここんとこずっとハズレだよねぇ」

持ってきたバットを肩にかつぐような姿勢で、さやかちゃんが溜息をつくと、

「使い魔だって放っておけないのよ。成長すれば分裂元と同じ魔女になるから」

マミさんは、凛とした表情で髪を整えながら、そう言います。

「——さあ、行きましょう」

三人と一匹で静かな夜の公園を後に家路につくと、やがてマミさんは尋ねてきました。
「二人とも、何か願い事は見つかった？」
その質問に、わたしたちはしばし顔を見合わせて黙り込んでしまいます。そんな様子を見たマミさんは、やがてくすくすと笑い出しました。
「まぁ、そういうものよね。いざ考えろって言われたら」
「……マミさんはどんな願い事をしたんですか？」
思わずそう訊いてしまったわたしは——
また、すぐに後悔していました。前に、ほむらちゃんに尋ねた時同様、ふと、マミさんの顔がどこか暗く沈んだように感じたからです。
「……いや、あの……どうしても聞きたいってわけじゃなくて……」
「ううん、いいの。別に隠すほどのことでもないし」
マミさんは、すぐにまた微笑んで話してくれました。
「家族でドライブに出かけた帰りだったわ。反対車線の車が横転してこちらに向かってくるところまでは覚えているんだけど——気がついたら、私はぐしゃぐしゃに大破した車の中にいたの」
「……え」
「逆さまにひっくり返った車の中では、血を流したパパとママがもう動かなくなっていて

――どこかからガソリンの匂いと、たくさんの人たちが叫ぶ声が聞こえたわ。わたしは潰れたシートに身体を挟まれて、割れた窓ガラスから手を外に差し出していて――そして、そこに……キュゥべえがいたの」

わたしは、マミさんの足下を呑気な顔をして歩くキュゥべえを見つめます。

「考えている余裕さえ、なかったわ」

「……」

「……」

――なんてことを訊いてしまったのだろう。

そんな後ろめたい気持ちと、家族を失ったあげく、みんなを守る魔法少女になる――そんなマミさんの歩んできた道の重さに、目の前が真っ暗になっていました。

「後悔してるわけじゃないのよ。今の生き方も、あそこで死んじゃうよりは余程良かったと思ってる」

マミさんは、何かを振り切るように微笑みます。

「でもね、ちゃんと選択の余地がある子には、きちんと考えた上で決めてほしいの。私にできなかったことだからこそ、ね」

すると、さやかちゃんが突然口を開きました。

「ねぇ、マミさん。願い事って……」

「――うん？」
「願い事って――自分のための事柄でなきゃ……駄目なのかな？」
わたしはびっくりして、さやかちゃんの顔を見つめます。
その表情には……いつも冗談ばかり言っている、あの明るさはありませんでした。
この上なく真剣に、そしてまっすぐにマミさんを見て、尋ねていました。
「たとえば――たとえばの話なんだけどさ。あたしなんかより、よほど困ってる人がいて、その人のために願い事をするのは――」
「それって、上条くんのこと？」
わたしが尋ねると、さやかちゃんは途端に我に返って、顔の前で慌てて手を振ります。
「た、例え話だって言ってるじゃんか！」
「問題はないよ」
すると、キュゥべえが口を挟みます。
「べつに契約者自身が願い事の対象になる必然性はないんだ。前例もないわけじゃないし」
「でも、あまり感心できた話じゃないわ」
すぐに、マミさんが言い添えます。
「他人の願いを叶えるのなら、なおのこと自分の望みをはっきりさせておかないと。――美樹さん、あなたは彼に夢を叶えてほしいの？　それとも彼の夢を叶えた恩人になりたい

の？」

その言葉に、さやかちゃんは黙り込んでしまいます。

「同じようでも全然違うことよ。これ」

「……その言い方は、ちょっと酷いと思う」

悔しそうに俯くさやかちゃんだったけど——その肩に優しく手を置いて、マミさんは言います。

「ごめんね。でも今のうちに言っておかないと。そこを履き違えたまま先に進んだら、あなた、きっと後悔するから」

「……」

やっぱりこういう時、わたしには、まるで気の利いた言葉が出てきません。

ただ黙って、気まずくふたりの横を歩き続けます。

「……そうだね。あたしの考えが甘かった。ごめん」

やがてそう呟いたさやかちゃんに、マミさんはにっこりと微笑みました。

「やっぱり、難しい事柄よね。焦って決めるべきではないわ」

「——僕としては、早ければ早いほどいいんだけど」

そんな軽口を叩くキュゥべえの頭をこつんと叩いて、

「駄目よ。女の子を急かす男子は嫌われるぞ」

そう茶化したマミさんの言葉に、わたしも思わず笑顔になってしまったけど——
さやかちゃんの瞳には、まだ何か苦いものが浮かんでいて——
その表情から滲む哀しみを受け止めるように、わたしは胸に手を当てて考えました。
さやかちゃんの願いは、ただ上条くんの幸せで……
それじゃあ、いったい——
わたしの願いって何なんだろう……？

○

「やっぱり、簡単なことじゃないんだよね……」
その日の夜、自分の部屋でパジャマに着替えて、ベッドの上に転がりながらそう呟くと、
「僕の立場で急かすわけにはいかないしね。助言するのもルール違反だし」
机の上で、ふわりとしたしっぽをはためかせて、キュゥべえも困ったように言いました。
「ただなりたいってだけじゃ、駄目なのかな……？」
傍らに置いたままの、わたしの魔法少女ノートを取り上げてそう溜息をつきます。
自分が正義の魔法少女なんかになれるのかな、と思う一方——
目を閉じると、あのきらきらとしたマミさんの変身した姿がどうしても浮かんでしまい

ます。
颯爽としていて、力強くて、それでいてかわいらしくて――
誰からも好かれて、憧れられて、感謝される、そんな存在。
このノートには、今やっと見つけた、なりたいわたしのすべてが描き込まれていました。
「まどかは、力そのものに憧れているのかい？」
不意にキュゥべえに訊かれて、わたしは狼狽えます。
「や、そんなんじゃなくて……う～ん、そうなのかな？　わたしってどんくさいし、何の取り柄もないし、だからマミさんみたいに格好良くて素敵な人になれたら、それだけで充分に幸せなんだけど……」
そうしどろもどろに答えていると――
キュゥべえは、わたしを見つめて言いました。
「まどかが魔法少女になれば、マミよりずっと強くなれるよ」
「……へ？」
「もちろん、どんな願い事で契約をするかにもよるけれど……まどかが生み出すかもしれないソウルジェムの大きさは、僕にも測定しきれない。これだけの素質を持つ子と出会ったのは初めてだ」
「はは……何言ってるのよ、もう。嘘でしょ」

キュッぺえの赤いくりくりした瞳は、まっすぐにわたしに注がれ続けていて——わたしは、思わず笑ってごまかします。

そこに——

コンコン、と部屋の扉がノックされて、

「まどか、起きてるか？」

向こうから、パパの声が聞こえてきました。

「うん、どうしたの？」

「ママが帰ってきたんだが……ちょっと手伝ってくれないかな」

カーディガンを羽織って部屋から飛び出し、階段を降りたところで——

すぐに、何が起きたのかわかりました。

「み、水ぅ……」

「あー、またか……まったくもう」

そう、それはたまにあることなんだけど……

お酒に酔ったママが、へべれけになって玄関で倒れているのでした。

パパがキッチンから用意してきた水を飲ませると、ママは美味しそうに一息に飲んでしまいます。

「ともかくベッドまで運んで、着替えさせないと。ほら、そっち持ってくれ」
「う、うん！」
わたしが左、パパが右に回って、ママをかつぐように立ち上がらせると、
「……ぐえぇぇ……あのスダレハゲ……呑みたきゃ手酌でやってろっつうの……」
なんかお酒臭い息で、そうひたすら誰かの悪口を垂れ流すママでした。
パパとふたりでなんとか着替えさせて、ベッドに寝かせた後、
「ありがとう。ココアでも淹れようか」
そう微笑むパパにくっついて、わたしはキッチンに向かいます。
「なんでママは、あんなに仕事が好きなのかな。昔からあの会社で働くのが夢だった——なんて、ないよね？」
先に席についてそう尋ねると、
「ママは仕事が好きなんじゃなくて、頑張るのが好きなのさ」
沸かしたミルクに、ココアパウダーを溶かしながらパパはそう答えました。
「嫌なことも辛いこともいっぱいあるだろうけど、それを乗り越えたときの満足感が、ママにとっては最高の宝物なのさ。そういう意味で、今の難しくて大変な仕事は、とてもやり甲斐があるんだろうね」
差し出されたココアの香りを鼻先に当てながら、わたしは訊きます。

「ママは……満足なのかな、それで」
「そりゃ、会社勤めが夢だったわけじゃないだろうけどさ」
パパも、自分のココアを手に席について笑いました。
「それでもママは、理想の生き方を通してる。そんな風にして叶える夢もあるんだよ」
「……生き方そのものを、夢にするの？」
なんかそれって、難しくて……
いろいろと頭の中で考えてみたんだけど、やっぱりわたしにはよくわかりません。
しばらくして、わたしはパパに向き直りました。
「ねえ、パパ――ひとつ訊いてもいい？」
「なんだい？」
「パパは――ママが外で働きたいって言ったから、我慢して家にいてくれるの？　わたしたちの世話をしてくれているの？」
そう尋ねると――びっくりしたように、パパは目を見開きます。
「つまり、パパがママの為に我慢してるのかってことかい？」
わたしが頷くと、パパはにっこり微笑んで、わたしの頭に温かくて大きな手を置いてくれます。
「パパはね、ママのそういうところが大好きだ。尊敬できるし、自慢できる。そのおかげ

でこうしてまどかやタツヤとゆっくりお話する時間もできたんだよ」
その言葉に、じんわりと瞳の奥が熱くなって——
わたしは、火傷しそうになりながらココアを飲んでごまかしました。

○

タツヤが生まれてからその思いはずいぶん少なくなったんだけど——
パパは、わたしたちがいるから……そして、ママがあんなに外で働く才能に恵まれているから——仕事を辞めてまで家に居てくれるのかなって、わたしはずっと気になっていたのでした。
わたしやタツヤやママの為に、自分を犠牲にしてくれているような気がして——そんなの悪いなって、そう心のどこかで気になっていて。もしそうなら、わたしがタツヤの面倒もちゃんと見るから、パパも外で働いていいんだよって言おうと思ってて。
けれど、パパは言ってくれました。
『ママは、パパよりも外で働く才能があるんだ』
『それに、パパはママよりもまどかたちと遊んだりする才能があったみたいだね』
だから、役割交換したんだよ——

そう、パパは笑っていました。
その笑顔は、マミさんの笑顔とはまた別の温かみがあって――
わたしの胸の奥を、優しくほてらせるのでした。
『内緒だけどね――』
そして――パパが、最後に声を潜めて付け足してくれたその言葉。
『ママよりも長く、大好きなまどかやタツヤと一緒にいられて、パパは嬉しいんだ』
その言葉は――
ずっと、わたしを勇気づけてくれる宝物となったのでした。

「――嬉しそうだね、まどか」
突然、キュゥべえに声をかけられて――はっと顔をあげるわたしです。
「そ……そうかな」
「とても嬉しそうだ。いいことでもあったのかい？」
不思議そうな顔をして、長い耳をひょこひょこと動かすキュゥべえに、わたしはここが見滝原市立病院で、今が放課後で、わたしが話しているキュゥべえが人には見えない存在であることを思い出して……慌てて、顔の表情を戻します。
と、そこに――

「よ、おまたせ」
さやかちゃんが、ずいぶん早く戻ってきて、わたしは思わず腕時計を見つめてしまいました。さやかちゃんが上条くんの病室に向かってから、まだ五分ほどしか経っていません。
「……あれ？　上条くん、会えなかったの？」
「せっかくつき合ってもらって悪かったんだけどさ……今日は都合悪いみたい。わざわざ来てやったのに、失礼しちゃうわよね」
納得いかなそうに呟くと、さやかちゃんは先に立って歩き出します。
わたしは慌てて鞄を持つと、キュゥべえと一緒にその背中を追いかけました。
「ああ……ほら、こないださ、まどかにつき合ってもらって買ったCD。あれ、昨日、恭介にあげたんだけど——恭介のやつ、すごい喜んでた」
病院を出たところで、さやかちゃんは語り出します。
「なんか知らないけど、ネットでも手に入らないやつ？　それだったみたいで、もの凄い興奮しててさ。一緒に聞いたんだ。えーと、ほら、病院で音立てられないから、ふたりしてイヤホン半分こして」
照れたように、嬉しそうに、さやかちゃんは語ります。わたしはただ後ろに組んだ手で鞄を持ったまま、そんなさやかちゃんの言葉をどこか目映い思いで聞いていました。
「あたしにはバイオリンの演奏の違いなんてまるでわからないんだけどさ、でもとにかく

恭介がすぐ間近で興奮して演奏について教えてくれるのが嬉しくて。ただ目を瞑って、すこしでも、バイオリンをわかろうと必死でさ」

好きな男の子と顔を寄せ、ふたりで音楽を聞くなんて――

うらやましいなあって、わたしが想像していた時でした。

いつまで経っても、そこからさやかちゃんの声が聞こえてこなくって……

ふと顔を上げると、さやかちゃんは立ち止まり、その顔は悲しく沈んでいました。

「……さやかちゃん」

「そしたら――気がついたら、恭介が泣いてたんだ。歯を食いしばって、声を押し殺して――目を瞑っているあたしに泣いているのを気がつかれないように、顔背けて泣いてたよ」

それから、さやかちゃんは空を見上げて、誰かに訴えるように言いました。

「何の才能もない、夢もない、あたしじゃなくて、なんで恭介なんだろう……あたしが代わりに事故に遭えばよかったのにって――」

「そ、そんなことないよ！」

その言葉に――思わず、わたしは小さく叫んでいました。

「えと、それは、上条くんが事故に遭ったことが正しかったという意味じゃなくて、さやかちゃんが代わりに事故に遭うなんてことが正しいわけないよ！」

「わかってるけどさ――でも、恭介をどうにも助けてあげられないのがなんか悔しくてさ

――」

そう俯いたさやかちゃんに、それ以上何か言ってあげることができなくって……

わたしが、さやかちゃんからそっと目をそらした時でした。

――え？

遠くで、何かが、暗く歪んだような気がしました。

「……どうしたの？」

わたしの視線に気がついたさやかちゃんが尋ねてくるけど、わたしはそのまま病院の建物の横にある、自転車置き場の方向に向かいます。そして、そちらに向かうほど、何かいものが喉元にこみ上げてきて――そして、その嫌な感覚には覚えがありました。

「あそこ……何か」

わたしが震える声とともに、自転車置き場の横――物置きの陰にこびりつくその物体を指差すと、

「グリーフシードだ……孵化しかかってる！」

足下のキュゥべえが、驚いたように叫びました。

「嘘、なんでこんな所に……」

怯えた声をあげるさやかちゃんの手を握り、わたしも言います。

「……まずいよ！　早く逃げないと」

するとキュゥべえは、わたしの足を引っ張りました。
「この辺りはもうこいつの魔力に侵食されはじめてる。もうすぐ結界ができ上がる」
「また、あの迷路が……」
けたけたとどこかから響く、甲高い嗤い声。
誰かの悪い夢に迷い込んでしまったような、壊れた世界。
間違いなく、このグリーフシードから発せられる空気は、あの魔女の結界に立ちこめるものでした。
「まどか、先に行って」
その声に驚いてわたしが顔を上げると、
「マミさんを呼んできて。あたしはこいつを見張ってる」
さやかちゃんは、真剣な表情でわたしの肩を掴んでいました。
「無茶だよ、さやか」
すぐに、キュゥべえが叫びます。
「中の魔女が出てくるまでにはまだ時間があるけど、結界が閉じたらキミは外に出られなくなる。マミの助けが間に合うかどうか――」
わたしも涙目で頷くけど、さやかちゃんは首を振りました。
「あの迷路ができ上がったら、こいつの居所もわからなくなっちゃうんでしょ？　それに

まどかも聞いたよね？　病院とかは一番まずいってマミさんの言葉」

「……あ」

――病院とかに取り憑かれると最悪よ。

――ただでさえ弱っている人たちから生命力が吸い上げられるから、目も当てられないことになる。

そんな、かつてマミさんが言っていた言葉を思い出します。

「放っておけないよ。ここには恭介がいるんだ」

その言葉で――キュゥべえは、さやかちゃんの肩にぴょんと飛び乗ります。

「まどか、先に行ってくれ。さやかには僕がついてる」

「キュゥべえ……」

「マミならテレパシーで僕の位置がわかる。ここでさやかと一緒にグリーフシードを見張っていれば、最短距離で結界を抜けられるよう、マミを誘導できるから」

いつも呑気な顔をしているキュゥべえがとても頼もしく見えて、わたしは強く頷きます。

「……わたし、すぐにマミさんを連れてくるから！」

そう叫んで、わたしは駆け出しました。

鞄を胸に抱え、そのまま転がるように走り出します。

でも、病院の門を越えた辺りで――

背中の方向に、ぞっとするような何かが立ちこめた気がして。
振り向くと、グリーフシードから立ちこめた黒い霧が、さやかちゃんとキュゥべえを呑み込むところで——わたしは涙目で前に向き直り、再び、駆け出したのでした。

○

——泣くな。
泣かないで、まどか。
必死にこみ上げてくる涙をこらえてもこらえても、わたしの弱虫涙は溢れ出してしまいます。
——さやかちゃんだって、怖くないわけがない。
あのいつも強気のさやかちゃんの足だって、震えていました。
それでも、さやかちゃんはあそこに残って。
そしてそれは、大好きな——上条くんのいる病院だから。
今、わたしにできるのは、一分一秒でも早く、マミさんを呼んでくること。そして、マミさんに魔女をやっつけてもらうこと。
それだけをひたすら念じて、マミさんのマンションへと走ります。

ようやくたどり着いたマンションのエントランスで転びそうになって、出てきた住人さんにぶつかりそうになって謝って、わたしは、エレベーターが降りてくるのももどかしくて階段を駆け上がります。

そして、ようやく着いた五階の部屋のチャイムを鳴らして、叫びます。

「マミさん！　マミさぁん！　助けて！　さやかちゃんが！」

すぐに扉が開き――わたしの様子から事情を察知してくれたのかマミさんはひとつ頷きます。

「急ぎましょう」

そう言って廊下に出てくるなり、マミさんは光に包まれました。

ソウルジェムから溢れる光とともに、いつもの魔法少女姿に変身すると――わたしの脇に手をかけます。

「……え？」

気がつけば、わたしは――

マミさんに抱えられ、マンションの手すりの外へと飛び出していました。

手すりに足をかけて、ジャンプしたマミさんは――わたしの身体ごと、マンションの外、五階から飛び降りていたのです。

「……ま、マミさんっ！」

風が吹き込んでスカートがはためき、わたしの身体を地上へと引っ張る重力が一瞬で消え去っていました。マミさんの身体から伝わる温かな光が、わたしの身体ごと空へと持ち上げているのでした。

必死にマミさんの身体にしがみつく中――

わたしの足下では、ものすごいスピードで見滝原の景色が流れていきます。

やがて、病院の建物が見えてきたところで、マミさんはわたしの首筋に手を伸ばしてきました。

その瞬間――

（……怖いかい？　さやか）

（……そりゃあまあ……当然でしょ）

キュゥべえとさやかちゃんの囁きが聞こえてきます。

「大丈夫、ふたりは無事よ」

その言葉に、へなへなとわたしの身体から力が抜けていきます。

（願い事さえ決めてくれれば、今この場でキミを魔法少女にしてあげることもできるんだけど）

そんなキュゥべえの言葉に、

（……うん、いざとなったら頼むかも）

さやかちゃんは震え声で返していました。ふたりが味わっている不安が、そのやりとりから伝わってきて——思わず、ぎゅっとマミさんにしがみつくと、

「大丈夫」

マミさんは、優しく微笑んでくれました。

そのマミさんの微笑みひとつで……なぜか、心が静まります。風に舞うマミさんの明るい色の髪と、その下で凛々しく引き締まった顔に、わたしのお腹にも力がふつふつと漲っていくのを感じます。

この人は——

この人は、こんなにわたしに勇気をくれる——

(キュゥべえ、状況は?)

マミさんがわたしを抱え、空を滑空しながらテレパシーでキュゥべえに話しかけると、

(……マミかい? よかった! まだ大丈夫。すぐに孵化する様子はないよ!)

キュゥべえの声が、わたしの頭の中にも響きました。

(さやかちゃん、大丈夫っ!?)

(へーきへーき。退屈で居眠りしちゃいそう)

わたしの声に、そんないつものさやかちゃんの強気な言葉が返ってきて——また、わたしは涙が溢れてきてしまいました。

（今のところは大丈夫。急がなくていいから、なるべく静かに来てくれるかい？）

キュゥべえのその言葉に、マミさんはひとつ頷き、

（無茶しすぎ、って怒りたいところだけれど……今回に限っては冴えた手だったわ。これなら魔女を取り逃がす心配もないものね）

そうマミさんが褒めてくれた瞬間、さやかちゃんの嬉しそうな気持ちが言葉なしにも伝わってきました。そして、そのマミさんに対する想いはわたしも同じで……

だから、わたしは――

今こそ、それを口にしようと思いました。

「あの、マミさん」

「……ん？」

「あの、わたし……」

けれど――その時です。

マミさんの身体にどこか緊張が走り、病院手前の建物の屋上に降り立ちました。

たぶん手を離しても大丈夫なんだろうけど、マミさんの腕に必死にしがみつきながら、わたしはマミさんが見つめる前方に目をやって、あ、と口を開きます。

「ほ……ほむらちゃん？」

それは――

すでに、黒と白の魔法少女の衣装に身を包んだ暁美ほむらちゃんで――
隣の建物の屋上で腕組みをしたまま、氷のような表情でこちらを見つめていました。
「……言ったはずよね。二度と会いたくないって」
マミさんがそう言うと、
「今回の獲物は私が狩る。あなたたちは手を退いて」
ほむらちゃんは冷たくそう言い放ちます。
「そうもいかないわ。美樹さんとキュゥべえを迎えに行かないと」
「その二人の安全は保障するわ」
「信用すると思って？」
マミさんが微笑むと、ほむらちゃんの白い顔が強ばるのがわかりました。
それから、マミさんを責めるように指差してきます。
「わかっているの？　あなたは無関係な一般人を危険に巻き込んでいる」
「この子たちはキュゥべえに選ばれたのよ。もう無関係じゃないわ」
「あなたは二人を魔法少女に誘導している」
「それが面白くないわけ？」
「ええ、迷惑よ……特に」
そう言うと、ほむらちゃんはわたしを見据えます。

その強く冷ややかな視線にわたしの心臓は、また、とくん、と高鳴ります。
「鹿目まどか」
「ふうん……そう、あなたも気付いてたのね、この子の素質に」
……え？
……素質？　わたしに？
呆然とするわたしから視線を外すと、ほむらちゃんの視線がさらに険しくなりました。
「彼女だけは、契約させるわけにはいかない」
マミさんは小さく溜息をつくと、
「自分より強い相手は邪魔者ってわけ？　いじめられっ子の発想ね」
珍しく、そんないじわるなことを言いました。
ほむらちゃんはその言葉を合図にわずかに身体を動かします。
何かしようとしたのだろうけど、マミさんの動きの方が一瞬早くて――
「あなたとは戦いたくないのだけれど」
そう言うと同時に、マミさんの手から何かが迸ります。
その瞬間、ほむらちゃんの身体に無数の光のリボンが絡み付き――ほむらちゃんは、苦しそうな表情とともにもがき始めました。
「馬鹿ッ……こんなことやってる場合じゃ！」

「もちろん怪我をさせるつもりはないけど、あんまり暴れたら保障しかねるわ」
冷たくそう言い捨てるマミさんに、ほむらちゃんはもがきながら叫びます。
「今度の魔女は、これまでの奴らとはワケが違う！」
「大人しくしていれば、帰りにちゃんと解放してあげる。――行きましょう、鹿目さん」
けれどマミさんはそう言い捨てると――
動けなくなったほむらちゃんをそのままに、再びわたしを持ち上げて飛び立ちました。
「待て……ぐッ！」
そんなほむらちゃんの苦しげな声を背に――わたしたちは、再び病院へと滑空しました。
――ほむらちゃん、大丈夫かな……
そうは思うけど、今はとにかくさやかちゃんたちを助けにいかないといけません。
だから仕方の無いことだと思うんだけど――さっきマミさんがほむらちゃんに見せた厳しい表情が、どこか忘れられなくって……
しばらくわたしたちは互いに無言でした。
「ごめんね」
すると――
ぽつり、とマミさんは言います。
「時々、余裕がなくなるの」

「……」

「私は、あなたたちが思うほど完璧じゃないわ。とくにあからさまに敵意を向けられると、ああいうことも言ってしまう」

そう言うマミさんの表情は——これまで見てきたものとはまるで違っていました。

「無理してカッコつけてるだけで、怖くても、辛くても、誰にも相談できないし、ひとりぼっちで泣いてばっかり……」

それは——いつも優しくて、頼りになって、颯爽としていたマミさんのものとは全然違って——怒ることもあるだろうし、やつあたりもしてしまう、普通の中学三年生で——選択の余地なく魔法少女になることになって、それでもその責務を懸命に、忠実にこなすひとりの女の子のものでした。

「いいものじゃないわよ……魔法少女なんて——」

そう呟くと、小さく「ごめんなさい」と謝るマミさんに——わたしは、ぶんぶんと顔を振っていました。

「マミさん、わたし……願い事を、わたしなりにいろいろと考えてみたんです」

「……え？」

「でも、あの、もしかしたらマミさんには、考え方が甘いって、怒られるかもしれないけど……」

わたしは、わたしの中でゆっくりと形になっていったそれを——懸命にそのまま取り出そうと頭の中でまとめます。

「……わたしって、昔から、得意な学科とか、人に自慢できる才能とか、何にもなくて……きっとこれから先ずっと、誰の役にも立てないまま、迷惑ばかりかけていくのかなって……それが嫌でしょうがなかったんです。でも、マミさんと会って——誰かを助けるために戦ってるの、見せてもらって……同じことが、わたしにもできるかもしれないって言われて……何よりも嬉しかったのは、そのことで——」

それから、一度息を吸い込んで、それを口にしました。

「だからわたし、魔法少女になれたなら、それで願い事は叶っちゃうんです。こんな自分でも、誰かの役に立てるんだって、胸を張って生きていけたら……それが一番の夢だから……」

わたしのその言葉に——風の中、マミさんは目を見開きました。

「……大変だよ？　怪我もするし、恋したり遊んだりしてる暇もなくなっちゃうよ？」

「でも、それでも頑張ってるマミさんに……わたし、憧れてるんです」

「憧れるほどのものじゃないわよ、私——」

そう表情を曇らせるマミさんに——

ううん、とひとつ頭を振って、わたしは言いました。

「マミさんは、もうひとりぼっちなんかじゃないです」
「……」
不意に顔を背けたマミさんは——やがて、震えた声で言いました。
「まいったなぁ……まだまだちゃんと先輩ぶってなきゃいけないのになぁ……やっぱり私、駄目な子だ……」
「マミさん……」
「本当に、これから……私と一緒に、戦ってくれるの？　側にいてくれるの？」
振り向いたマミさんの大きな瞳には、涙がいっぱい溜まっていました。
それを見たわたしの弱虫涙も、また溢れ出しそうになるけど——
ぐっとこらえて、わたしは頷きます。
「はい。わたしなんかで、良かったら」
マミさんは顔をくしゃくしゃにして指先で涙を拭うと、照れたように微笑みます。
「でも……でもさ、折角なんだし、願い事は何か考えておきなさい」
「折角——ですかね、やっぱり」
「契約は契約なんだから、ものはついでと思っておこうよ。億万長者とか、素敵な彼氏とか、何だっていいじゃない」
その冗談めかした言葉に、わたしもつい微笑んでしまいます。

「じゃあ、こうしましょう。この魔女をやっつけるまでに願い事が決まらなかったら、その時はキュゥべえに、ごちそうとケーキを頼みましょ？」
「け、ケーキ？」
「そう、最高におっきくて贅沢な、お祝いのケーキ。それでみんなでパーティーするの。私と鹿目さんの、魔法少女コンビ結成記念よ」
「わ、わたし、ケーキで魔法少女に？」
「嫌なら、ちゃんと自分で考える！」
ぱん、とおしりを叩かれて——わたしが、ふええ、とまた悩み始めた時でした。
（マミ！　グリーフシードが動き始めた！　孵化が始まる——急いで！）
キュゥべえの声が頭の中に響きました。
マミさんはひとつ頷き、
「行くわよ、鹿目さん！」
と叫ぶその声は——
もういつもの、凛々しく、かっこよく、頼りになるマミさんのものとなっていたのでした。

○

「今日という今日は速攻で片付けるわよ！」

病院の前にたどり着くと、マミさんはソウルジェムをかざし、またたく間に結界の入り口を暴き出します。

そして、ぐにゃりと歪むように現れたそこは――

複雑に形を変えた、病院の通路のような場所でした。

周囲には、色とりどりの薬瓶が無数に浮かび上がっていて……

ゆらりと足を組んだ女の人の影が横切り、お菓子の箱がふわふわと流れていきます。水玉模様の床は、本来かわいらしいものであるはずなのに、とても不吉な何かを感じさせました。

やがて、わたしは――

この結界が、大きな、とても大きなケーキの中であることに気がつきました。

チョコレート、レーズン、クッキー、生クリーム、メイプルシロップドーナッツ。

細いしっぽの生えた使い魔たちが、まるでデコレーションをするように辺りを動き回っていて――その姿が怖くて、わたしは身体の震えを抑えるのに必死でした。

そんなわたしをリボンの壁で覆うと、マミさんは身体から溢れるほどの光とともに両手から銀色の鉄砲を出現させます。そして、片端から魔女の使い魔たちを撃ち滅ぼしながら、前方に駆け出しました。

「……ま、マミさん、待って！」
（――身体が）
「……え？」
（――身体が、軽い）
それは、マミさんの心の声でした。
（――こんな幸せな気持ちで戦うなんて初めて）
溢れたその感情が、テレパシーとなってわたしの心に響いていました。
そしてその声は、わたしの胸もときどきしてしまうような嬉しさで満ちていました。
今日のマミさんの鉄砲さばきは、いつにもまして鮮やかで――いつもより数段上のスピードで、数段上の威力で、次々にわたしたちを取り囲む無数の使い魔たちを倒していきます。
（――もう、何も怖くない）
「……」
（――私、ひとりぼっちじゃないもの）
「……マミさん」
マミさんの行動には、一切の迷いがなく、その動きは怖くなるほど正確でした。
マミさんの身体を守るように並ぶ、たくさんの銀の魔銃を次々に撃ち放ち――撃ち終え

られた銃たちは消え、また新たな銃が再びマミさんを守るように取り囲みます。
結界内に入った時にいつも思う、ここから生きて出られるのかなっていう心配を、今日は少しも感じない——それくらいマミさんの魔法は圧倒的で、わたしはただ安心して、マミさんの背中を追っていました。
「お待たせ！」
やがて、結界の一番奥——
お菓子だらけの大きな空間へとたどり着いたわたしたちは、そこに、孵化寸前のグリーフシードと、そのそばに佇むさやかちゃんとキュゥべえの姿を見つけました。
「さやかちゃん！」
わたしの叫び声に、さやかちゃんも笑顔を見せてくれました。
「ふぅ、間に合った！」
手を合わせて再会を喜び合うわたしたちに、キュゥべえの声が届きます。
「気をつけて——出てくるよ！」
その言葉と同時に——
お菓子の空間の中心に脚の長い椅子とテーブルがあって、そして、その上にかわいらしいぬいぐるみが、ちょこんと座っていることに気がつきました。
「性質は〝執着〟——生前大好きだったお菓子を司る強力な魔女だ。気をつけて！」

だけど――キュゥべえのその言葉にも、マミさんは怯みません。
「せっかくのとこ悪いけど、一気に決めさせてもらうわよ！」
銀の魔銃を逆さに持ったマミさんは、椅子の脚を持ち手の部分で叩き壊し――
椅子から落ちてきたぬいぐるみを野球のバッターみたいに打ち飛ばしました。
ぐるりとマミさんを取り囲む銃が一斉に火を噴き、次から次へと、宙を逃げ惑うぬいぐるみに撃ち放たれていきます。
その銃たちの連射スピードは凄まじくって――ついにぬいぐるみは逃げ切れず、マミさんの足下へとぼとりと落ちて、ぐったりと倒れ伏しました。
「これで、終わり」
マミさんは、鮮やかに手の中に光を集めると――
そのまま銀の鉄砲を、とても大きな銀の大砲に変化させます。
「ティロ・フィナ――――レッ！」
その声とともに、耳をつんざくような大きな音が結界中に響き渡り――
ぬいぐるみは、マミさんの魔銃から放たれた無数のリボンに絡めとられ、やがて強く締め上げられて首をかくりと落としました。
「やった――」
さやかちゃんとわたしは手に手を取り合って、飛び上がります。

――すごい。すごい、マミさん……
その圧倒的な強さに、改めて自分の憧れる人の眩しさを噛み締めていたわたしは――
ふと、そのぬいぐるみの口から何かが、ぐにゃりと抜け出るのに気がつきました。
「……え」
ぬいぐるみの口から勢い良く飛び出たそのもうひとつの何かは。
奇妙に形を変えて、伸びて、大きくなって。
一瞬で、巨大な口に姿を変えて。

「――え？」

マミさんがそれに気がついた時には、とても大きな口だけの怪物へと姿を変えていて。
上あごと下あごが、強烈な音とともに閉じて。
何が起きたのかよくわからないまま、わたしとさやかちゃんが見つめるその前で――
黄色い衣装に身を包んだ身体が、地に落ちて。
マミさんの首から上が。
首から、上が。
……消えていました。

『いいものじゃないわよ……魔法少女なんて――』
『本当に、これから……私と一緒に、戦ってくれるの？　側にいてくれるの？』
さっき聞いたばかりのマミさんの無数の言葉がわたしの頭の中で反響していて――
『こんな幸せな気持ちで戦うなんて初めて――もう、何も怖くない』
『――私、ひとりぼっちじゃないもの』
「きゃあああああああああああああああっ」
そう叫んだはずなのに、声なんてまるで出ていなくって――
わたしは、たださやかちゃんと抱き合ったまま、身体も意識も時間が止まったように立ちすくんでいました。
「二人とも――今すぐ僕と契約を！」
いつも呑気なキュゥべえの声がとても慌てていて――
「願い事を決めるんだ！　早く！」
そんなことを言ってたけど、それがどういう意味なのかすらわからなくって。

ただ、がきゅごきゅと目の前の大きな口が、黄色い衣装に包まれた身体を噛み下している光景を見つめていて。わたしたちの足下にまで、赤黒い液体が流れてくるその景色を、現実のものだと受け止めることさえできないでいました。

やがて、その大きな口が何かを滴らせながらこちらを向き――

「まどか！　さやか！」

キュゥべえの声が、辺りに轟いたその時――

「その必要はないわ」

どこかから、聞き覚えのあるその声が響き――

わたしたちの前には、黒と白の衣装が舞い降りていました。

「こいつを仕留めるのは、私――」

それは……

さっきマミさんに魔法のリボンで縛られたはずの、暁美ほむらちゃんでした。

ほむらちゃんが左腕につけている盾に手をかざすのと、あのマミさんを襲った大きな口の怪物がほむらちゃんに覆いかぶさるのは、同時でした。

わたしは、思わず目を背けかけたけど――

でも、なぜか気がついたら、ほむらちゃんは大口の魔女の後ろに回っていて――右手を掲げると同時に、魔女の身体の中で何かが爆発しました。何が起きているのか、まるでわ

たしには理解できないうちに――それは次々と繰り返されます。大口の魔女がほむらちゃんを食べようと身体をもたげると、そこにはすでにほむらちゃんの姿はなく、また魔女の身体のどこかが爆発するのです。なんとかほむらちゃんを捕まえようとする大口の魔女だけど、それでもほむらちゃんは姿を消しては予想もつかない場所に現れ、同じようにその身体を破壊していきます。

ついに敵わないと思ったのか――大口の魔女が、身体の向きを変えた瞬間、

「逃がさないわ」

魔女の頭の先に姿を現したほむらちゃんは、指をぱちん、と鳴らします。

と同時に、魔女の身体のあちこちで連続して爆発が起こり――

とんでもない轟音(ごうおん)とともに、魔女の身体は散り散りになっていました。

やがて――霧が晴れるように、結界が消え去っていきます。

それでも、わたしもさやかちゃんもその場から動くことができなくって――

「命拾いしたわね、あなたたち」

その言葉で、ようやく何かが終わったことを悟りました。

それが何であるのかは――

目の前にぱつんと落ちる、黄色い衣装の切れ端が物語っていました。

さっきまで颯爽と舞っていた黄色い艶やかな衣装は――今、さらさらと砂が風に散らさ

れていくように、わたしたちの前から消え去っていくところでした。
「目に焼きつけておきなさい。魔法少女になるって、こういうことよ」
辺りは、元の病院横の駐輪場へと戻っていて――
車のクラクションが遠くから聞こえ、人々のざわめきが戻っていました。
それでも、わたしはまだ自分が元の世界に戻ってきたという気持ちがしなくって……
ただ、黄色い衣装があった場所を――いつまでも見つめ続けているのでした。
「……返してよ」
そこに落ちていたグリーフシードを拾い上げたほむらちゃんに――
さやかちゃんの涙声が重なります。
「返せよッ！　それは――それはマミさんのものだ！」
飛びかかったさやかちゃんを軽いステップで躱すと、
「そうよ。これは魔法少女のためのもの」
ほむらちゃんは、わたしたちを冷たく見据えて言いました。
「あなたたちには、触る資格なんてない」
氷のような、冷めた瞳でわたしたちを見つめた後――
ほむらちゃんは踵を返し、そのまま静かに歩き去っていきました。
後には、わたしとさやかちゃんとキュゥべえと――

そして、かつて優しく、力強くわたしたちを包んでくれた温かみだけが残っていて――
あの優しい微笑みだけが、漂っていて……

そう、後から思えば――
その時のわたしたちは、まだ何もわかっていなかったのです。
奇跡を望む意味も、その代償も……

第四章　そんなの、聞いてない

「……とか」
誰かの声が、聞こえていました。
「――まとか」
「……え」
顔を上げると、ママがわたしのことを怪訝な顔つきで見つめています。
「さっさと食べないと遅刻だぞ？」
「あ……う、うん」
そこは、うちの食卓でした。
朝起きて、顔を洗って、歯を磨いて――
いつも通りにそれらをこなしてここに座ったはずなのに、そのどれにも覚えがありません。
昨日の夜からずっと、マミさんの千切れた衣装や、ほむらちゃんの言葉が頭にこびりついていて――
結局、一睡もすることなく、わたしはここに座っていました。

辺りを見渡すと、ママもパパもタツヤまで、みんな不思議そうな顔をしてわたしを見つめていました。それで慌てて食べかけの目玉焼きを口に運ぶけど――

そのふんわりとした味が口の中いっぱいに広がった瞬間、わたしの瞳から、涙がこぼれ落ちてしまいました。

「ねっちゃ、どったの？」

「ま、不味かったかな……」

タツヤが顔を覗き込んできて、パパも心配そうにそう声をかけてきて――

「……ううん、おいしいの。すごく、おいしい……」

それは、申し訳ないほどおいしくって――わたしは、生きているんだって改めて思います。自分がおいしいと感じられる、そんな今まで当たり前だと思ってたことは、実はとても幸せなことなんだって……そして、もうこういう思いをマミさんが味わえないんだってことが――

どうしようもなく申し訳なくて、悲しいのでした。

「……でもって、ユウカったらさあ、それだけ言ってもまだ気付かないのよ」

横を歩くさやかちゃんの明るい声が耳に届きます。

『え？　何？　ワタシまた変なこと言った？』とか半ベソになっちゃって、こっちはもう

笑い堪えるのに必死でさー」

それは、いつもの通学路でした。

わたしとさやかちゃんと仁美ちゃんは、いつものように並んで見滝原中学校への道を歩いていました。

空は抜けるように晴れていて、とても気持ちのよい朝で——

さやかちゃんのいつもと変わらない笑顔を見つめていたら、ひょっとしてやっぱり夢だったのかな、と思い始めてしまったわたしは、後ろのキュゥべえを一度見てから、そっと心で話しかけてみました。

(……さやかちゃん、昨日のこと……)

上条くんのいる病院に、魔女が現れたこと。

さやかちゃんが見張ってくれて、わたしがマミさんを呼びに行ったこと。

そして——その魔女に、マミさんが食べられてしまったこと。

……それらはすべて、本当にあったことなの?

そう尋ねようとしたわたしに、さやかちゃんの言葉が響きました。

(……ごめん。今はやめよ。また後で)

明るい顔つきとは正反対に、さやかちゃんの言葉は、暗く、沈んでいました。

それで、やっぱり本当だったんだ……とわたしの心も重くなります。そして、同じ光景

を見たさやかちゃんが、表面だけでもこうして明るく振る舞っていられるのに、わたしときたら、心をうまく隠すこともできなくって……また悲しくなりました。

その日のホームルームも、授業も、すべてがぼんやりと通り過ぎていきました。

「えー、確かに出産適齢期というのは医学的根拠に基づくものですが、そこからの逆算で婚期を見積もることは大きな間違いなんですねー。つまり30歳を越えた女性にも恋愛結婚のチャンスがあるのは当然のことですから、したがってここは過去完了形でなく現在進行形を使うのが正解で――」

いつもはちゃんと耳に入る和子先生の授業も、ただ流れていきます。

時折、救いを求めるようにさやかちゃんに目をやるけど、さやかちゃんは黒板の文字をちゃんとノートに書き取っていて――情けなくなって、わたしもシャープペンを改めて手に取るけど、そしたら今度は黒板の文字がまるで頭に入ってこないことに気がつきました。

――心が、まるで動いていない。

壊れた人形になってしまったように、ただぼうっとしていました。

いつしか、午前中の授業は終わり――

「まどか」

お昼休みのチャイムと同時に、さやかちゃんがわたしを呼びました。

ふらふらと立ち上がってついていくと、さやかちゃんはわたしを屋上へと連れていきま

す。

そして、ふたりして空いているベンチに腰掛け、ただ何も話すことなくしばらく奇麗に澄み渡った空を見つめます。キュゥべえもついてきたけど、それでもどこか遠慮しているのか、すこし離れたところで丸まりました。

「なんか、違う国に来ちゃったみたいだね……」

長い沈黙に耐えられなくなったわたしはそう呟いたけど、さやかちゃんは黙っていました。

「……学校も、仁美ちゃんも、昨日までとぜんぜん変わってないはずなのに……なんだかまるで、知らない人たちの中にいるみたい」

「――知らないんだよ。誰も」

さやかちゃんのその冷めた声色に、はっとして隣を見ます。

「魔女のこと、マミさんのこと。あたしたちは知ってて、他のみんなは何も知らない。それってもう、違う世界で、違うものを見て暮らしてるようなもんじゃない」

「……さやかちゃん」

「とっくの昔に、変わっちゃってたんだ。もっと早くに気付くべきだったんだよ。あたしたちも」

そう呟くさやかちゃんの前髪を、風が揺らして――

わたしは何を言ってよいのかもわからず、ただ自分の上履きの先を見つめるばかりでした。

「まどかはさ、今でもまだ……魔法少女になりたいって思ってる？」

「……」

――いやだよ、もうなりたくない。

――わたしには……とても無理だよ。

心の中で、すぐにそう叫び返していたけど――

でも、マミさんとの約束を思い出して、わたしが一緒に戦うと言った時のマミさんの嬉しそうな顔を思い出して……わたしは何も言えず俯いていました。

けど、その思いはさやかちゃんには伝わってしまったようで――

「……そうだよね。うん、仕方ないよ」

どこか優しい口調で、さやかちゃんは言ってくれました。

それでずっと我慢していたわたしの弱虫涙は、ついにこぼれてしまいます。

「……ずるいって、わかってるの。今さら虫が良すぎるよね……でも……無理……わたし、あんな死に方……今思い出しただけで、息ができなくなっちゃうの……」

そんなわたしの頭を抱えるように、さやかちゃんは抱き寄せてくれて――

そして、わたしはさやかちゃんの胸に頭を押し付けるように泣いていました。

「――もう、怖いよ……嫌だよぉ……」

「マミさん、本当に優しい人だったんだ。戦うためにどういう覚悟がいるのか、あたしたちに思い知らせるために、あの人は……」

さやかちゃんの小さな呟きとともに、マミさんの優しい笑顔が蘇ります。

どんな時にも落ち着いていて、優しくて。

微笑んでくれるだけで、こんなわたしにも何かできるんじゃないかって勇気をくれて。

あのかわいい衣装に変身する時は、胸がドキドキするほどかっこ良くて、颯爽としていて、銀色に光る鉄砲を舞うように使いこなす姿は、とても頼もしくって――

でも、そのマミさんはもういないんだ……

わたしは、ようやくそれを実感していました。

叫び出したくなるような思いで、心に空いた大きな穴を見つめていました。

そんなわたしの髪を撫でながら――

「……ねぇ、キュゥべえ」

さやかちゃんは尋ねていました。

「この街、どうなっちゃうのかな？　マミさんの代わりに、これから誰がみんなを魔女から守ってくれるんだろう？」

「長らくここはマミのテリトリーだったけど、空席になれば他の魔法少女が黙ってないよ。

すくにも他の子が魔女狩りのためにやって来る」
「でも、それってグリーフシードだけが目当ての奴なんでしょ？　あの転校生みたいに」
「確かに、マミみたいなタイプは珍しかった。普通はちゃんと損得を考えるよ。だれだって報酬は欲しいさ」
その言葉に、またわたしの涙がじわりとこみ上げてきて――
自分たちが、絶対なくしちゃいけないものをなくしたことを思い知らされていました。
「でも……でもね」
キュゥべえが静かに言い足します。
「それを批難できるとしたら――それは、同じ魔法少女としての運命を背負った子だけじゃないかな」
……そうなのでした。
わたしたちは、まだ契約すらしてなくて――契約する覚悟すらなくて。
魔法少女としての力を与えられた子は、何かの願いと引き換えに、命がけの戦いをする運命を背負うことになっていて――
そんな運命に立ち向かっている子を責める資格なんて、わたしたちには無いのでした。
「うん、キミたちの気持ちはわかった」
静かなその声に、顔を上げると――

いつしかキュゥべえは、わたしたちの正面に座っていました。
「残念だけど、僕だって無理強いはできない」
「……キュゥべえ」
「お別れだね。僕はまた、僕との契約を必要としてる子を探しに行かないと」
「ごめんね、キュゥべえ」
わたしが涙声でそう謝ると、キュゥべえは長い耳を元気に揺らして、首を振ります。
「ううん、こっちこそ巻き込んで済まなかった。短い間だったけど、ありがとう。一緒にいて楽しかったよ、まどか」
いつも呑気そうな顔をしていたキュゥべえは――
この時、とても年月を経た森の古木のような雰囲気でわたしを見つめて言いました。
わたしはただ、ごめんね、と繰り返すことしかできません。
「いいんだよ」
そんなわたしに、キュゥべえは優しく答えると――
一度、ぴょんと飛び跳ね、そのまま静かに消え去っていきました。

○

その日の放課後——

さやかちゃんと別れたわたしは、いつしかマミさんのマンションに向かっていました。

この間みたいに階段を使って、五階のマミさんの部屋の前まで行って、チャイムを押していました。

鉄の扉の前でじっと待っていると、今にもマミさんが扉を開けて、

「あら、鹿目さん」

そう微笑んでくれる気がしていました。

でも、いつまで待っても扉が開くことはなくて——

わたしは、そっと扉のノブに触れます。鍵はかかっていませんでした。そっと扉を開けて、わたしは中に身体を滑り込ませます。

夕日が差し込む、マミさんの部屋はいつも通りに片付いていて、ただすこし出かけているかのように、そこかしこにマミさんの存在が息づいていました。机の上の教科書やノートには几帳面な文字で、巴マミと書き込まれ、ペン立てや、筆入れや、小さな花瓶や、動物の置物は、マミさんの好みが溢れ出していました。飲みかけの紅茶や、読みかけの本は、昨日、わたしが呼びにきた時のままなのだ、とわかりました。

それらを見つめながら——

わたしは、鞄からノートを取り出します。

そこには、わたしがなりたかった自分――魔法少女に変身して、マミさんと一緒に世界を守るわたしが描き込まれていました。ノートの中でわたしは力強く微笑んでいて……そしてそれは、結局、なれなかった自分でした。

マミさんに憧れて、その優しい微笑みに後押しされるように夢見た、魔法少女。

でもそれは、とてもわたしにこなせるとは思えない世界でした。

弱虫で、のろまで、自分の願いすら曖昧で――そんなわたしが、一瞬でもマミさんに希望を抱かせるようなことを言ってしまったことを、心から後悔していました。

「……ごめんなさい……わたし、弱い子で……ごめんなさい……」

溢れ出す涙とともに――

そのノートをマミさんの机の上に置いて、わたしは顔を覆いました。

本当に、これから……私と一緒に戦ってくれるの？　側にいてくれるの？

マミさんのその嬉しそうな声が――

わたしの心を責めるように、いつまでも静かな部屋に響いてました。

誰にも知られることなく、その苦しみを相談できる友達もなく。

ひとり孤独な戦いの中にいたマミさんを喜ばせたいと願ったのは本当で――

一緒に戦いたい、あなたのようになりたいと願ったのも本当で――
それでも、わたしは……
「……マミ、さん……ごめんなさい……」

○

泣き腫らした目で、マミさんの部屋を出て――
一階のエントランスまで降りると、そこに誰かが立っていることに気がつきました。
夕日に照らされる、その女の子は――
制服をきちんと着こなした、暁美ほむらちゃんでした。
いつものように唇を引き結び、靴音を響かせて歩み寄ってきます。
「ほむら……ちゃん」
――こんなところで、どうしたの？
そう尋ねようとした瞬間――
「あなたは自分を責めすぎてるわ。鹿目まどか」
わたしの正面に立ちはだかると、ほむらちゃんはそう言いました。
「あなたを批難できる者なんて誰もいない。いたら――私が許さない」

その瞳は氷のように冷たくて、その口調は相変わらず厳しいものだったけど……
どうしてか、今日は、その言葉にすこしだけ優しい響きがあるような気がしました。
「忠告、聞き入れてくれたのね」
そう訊いてきたほむらちゃんに——小さく頷きます。
それから、わたしたちは——
オレンジ色に染まる街を、一緒に歩きました。
駅に向かって歩いているつもりで、そこからわたしは家に帰るはずだったけど……
ひとりになるのが嫌で、隣を黙って歩くほむらちゃんに寄り添うように、歩き続けていました。
「わたしが、もっと早くにほむらちゃんの言うことを聞いてたら……」
——マミさんは死なずに済んだのかもしれない。
そう言うつもりだったんだけど、ほむらちゃんは緩く首を振りました。
「それで、巴マミの運命が変わったわけじゃないわ」
「……」
「でも、あなたの運命は変えられた。ひとりが救われただけでも——私は、嬉しい」
その言葉にびっくりしてほむらちゃんの横顔を見上げると、ほむらちゃんは、これまで張り詰めていた気持ちをすこしだけ緩ませるように、俯きました。そのままもう何も言わ

なかったけど、いつもの氷のような印象がすこしだけ崩れたような気がして……
「ほむらちゃんは、さ……」
わたしは、恐る恐る言います。
「……なんだか、マミさんとは別の意味で、ベテラン、って感じだよね」
「そうかもね。否定はしない」
わたしたちの横を車が通り抜けていって、その風でわたしの髪とほむらちゃんの長い髪が同時に揺れます。すこしだけ距離が縮まった気がして、わたしはひとつ深呼吸して尋ねました。
「ほむらちゃんは……昨日みたいに、誰かが死ぬとこ、何度も見てきたの？」
「……そうよ」
「何人、ぐらい？」
すると、ほむらちゃんはすこし遠くを見つめるように目を細めて、言い捨てました。
「数えるのを、諦めるほど」
「……」
わたしは、その答えを聞いてやっぱり後悔していました。
魔法少女として契約もしていないわたしが——契約する勇気すらないわたしが、訊いていいことじゃなかったという思いでした。

それでも、これだけは訊かずにいられない、ということ——今見てきた、マミさんの抜け殻のような部屋を思い浮かべて、それを口にします。

「あの部屋、ずっと、あのままなのかな……」

「巴マミには遠い親戚しか身寄りがいないわ。失踪届が出るのは、まだ当分先でしょうね」

「誰も……マミさんが死んだこと、気付かないの？」

「仕方ないわ。向こう側で死ねば、死体だって残らない。こちらの世界では、彼女は永遠に行方不明者のまま——魔法少女の最期なんて、そういうものよ」

「そんな……ひどいよ……」

お腹がきゅうっと痛くなって、また涙が溢れてきて、わたしは言ってました。

「みんなのために、ずっとひとりぼっちで戦ってきた人なのに……誰にも気付いてもらえないなんて、そんなの……寂しすぎるよ……」

「そういう契約で、私たちはこの力を手に入れたの」

そんなわたしに、ほむらちゃんは囁くように呟きます。

「誰のためでもない、自分自身の祈りのために戦い続けるのよ。誰にも気付かれなくても、忘れ去られても、それは仕方のないことだわ」

「わたしは……覚えてる」

そう——自然に、わたしは言ってました。

「マミさんのこと、忘れない……絶対に」
すると、ほむらちゃんは、「そう」と頷き——
「そう言ってもらえるだけ、巴マミは幸せよ。羨ましいほどだわ」
「ほ……ほむらちゃんだって！」
その乾いた言葉に、わたしは慌てて言い直します。
「ほむらちゃんのことだって、わたしは、忘れないもん！　昨日、助けてくれたこと……ぜったい忘れたりしないもん！」
「……」
「……あ」
……なぜだろう。
また、この時、気がつかずに人を傷つけたような苦い気持ちが溢れてきて——
そして、それはほむらちゃんの見たこともないような悲しげな瞳から伝わってきていて——
また、気持ちだけが先走って、言わなくてもいいことを言ってしまったんだ、ということがわたしの心を切り刻んでいました。
「あなたは、優しすぎる」
そう言うほむらちゃんの声は——震えていました。

「忘れないで。その優しさが、もっと大きな悲しみを呼び寄せることもあるのよ」
その言葉は――
マミさんに、一緒に戦うと約束したのに――
その約束が果たされることなく、わたしの心が折れてしまって――
やっぱり自分はどうしようもない駄目な子なんだって、思い知らされるようで――
どうして、わたしなんか生まれたんだろう。
どうして、みんなが当たり前にできることができないんだろう。
そんな、空っぽの心の中に風だけが吹き渡るような――
涙すら出ない、真っ白な世界がわたしを包んでいました。

○

ほむらちゃんと別れても――わたしは、自分の言葉に落ち込んでいました。
辺りはすっかり暗くなってて、このまま消えてしまいたかったけど、そんなこともできないわたしに自己嫌悪しながら、ひとりとぼとぼと家路に就いてました。
ひとつだけ――ホントにひとつだけ、小さないいことを見つけるとしたら、ほむらちゃんとは思っていたよりも仲良くなれるかもしれないっていうことくらいでした。

『ひとりが救われただけでも――私は、嬉しい』

あの言葉は、鉄のカーテンの隙間からすこしだけ覗くことができた、ほむらちゃんの本音であるような気がしていました。そして、ああいうことが言えるほむらちゃんは、見た目よりも、言葉から受ける印象よりも、ずっといい子な気がするのです。

「ほむらちゃん……ちゃんと話せば、お友達になれそうなのに……どうしてマミさんとはケンカになっちゃったのかな……」

そんなことを考えながら――駅前の人ごみの中を歩いている時でした。

「……あれ？」

人の流れのその先に、見覚えのある人影がありました。

「仁美ちゃん？」

整った、気品のあるその顔。

長くて、緩くウェーブのかかった奇麗な髪。

うん、それはやっぱり――志筑仁美ちゃんでした。

わたしは、人ごみを掻き分けるように走ってなんとか追いつき、声をかけます。

「仁美ちゃん、今日はお稽古事は――」

そう話しかけたんだけど、仁美ちゃんはわたしの言葉なんてまるで耳に入っていないように歩き去っていきました。

「ひ……仁美ちゃん？」

わたしは、さらに追いかけます。

けど、その瞳はどこかを見ているようで、見ていません。

そして、その時、仁美ちゃんの首筋に不思議な痣があることに気がつきました。

「――あら、鹿目さん、ごきげんよう」

突然、わたしの方に顔を向けた仁美ちゃんは、いつものようにそう挨拶してくれて――

でも、わたしはずっと首筋の痣に目を奪われていました。

だって、それは――

前にマミさんが助けた、あの廃ビルから飛び降りた女性の首筋についていたものと同じだったのです。

「ど、どこに行こうとしてたの？」

そうわたしが尋ねると、

「どこって、それは――」

何かに魅入られたような視線で、どこか遠くを見つめ――仁美ちゃんは微笑みます。

「ここよりも、ずっと良い場所、ですわ」

その声色は、まるで機械が話しているようで――

そのぎこちない動きは、あの時の女性とまったく同じでした。

○

仁美ちゃんは、どこかかくかくとした動きで駅前を通り過ぎ、町外れへと歩みを進めていきます。

わたしがついてきて、何度も話しかけているのにも気がつかないようなそぶりで、迷い無くどこかへと向かっていました。

「……ここよりずっと良い場所って――」

わたしはどうしたらよいのかわからず、ポケットからケータイを取り出します。

そして、無意識にマミさんに知らせようとしている自分を発見して、また悲しくなりました。

「……けど、他にこういう時相談できる人って」

その時、ふと、ほむらちゃんの顔が思い浮かびます。

「そうだ――」

急いで、携帯のアドレス帳を呼び出すけど、すぐに絶望感に変わります。

「ああ……駄目だぁ、携帯の番号、わかんない……」

そんなことをしている間に、辺りからはすっかり人気が消え――

うらぶれた古い町工場跡へと変わっています。

そして、幾つものプレハブの建物が並び建つそこには、幾人かの人影が見えました。暗い中、みな、仁美ちゃんと同じようにかくかくとした動きでひとつの建物に入っていきます。わたしも仕方なく、仁美ちゃんの後について中に入り、すぐに入り口近くのロッカーの影に隠れます。

そっと辺りを窺うと、建物の中には古い機械が放置されていて、そこには仁美ちゃんの他に、見知らぬおじさん、おばさん——若い人も何人かいて、総勢十五人くらいの人たちがのろのろと何かをしていました。みな、生気がなく、淡々と何かをこなしていて……でも、不思議なのは、足下ですらおぼつかないその薄闇の中で、誰もが電気をつけないことでした。

「そうだよ……俺ァ駄目なんだ……」

ふと、そんな声が聞こえました。

「こんな小さな工場ひとつ、満足に切り盛りできなかった……今みたいな時代にさぁ……俺の居場所なんて、あるわけねえんだよなぁ……」

その声を合図に、窓の近くにいたおばさんが、バケツの中に何かを入れていることに気がつきます。そして、月明かりに照らされたそれは——トイレ用の洗剤でした。そこに、ぶつぶつ言っていたおじさんが近寄り、漂白剤の袋を掲げます。

「……あ」

そういえば……前に、ママが言ってました。

塩素系の洗剤と他の洗剤だけは絶対混ぜちゃいけないって――

そんなことしたら家族全員、猛毒のガスであの世行きだから、絶対間違えるなって――

「だ、駄目……」

思わず、わたしは飛び出していました。

「それは、駄目ッ！」

けれど、わたしの手がおじさんの持つ漂白剤を奪うその瞬間、わたしの手は仁美ちゃんによって押さえられてました。

「邪魔してはいけません。これは神聖な儀式ですのよ」

「だって！　あ、あれ危ないんだよッ。ここにいる人たちみんな死んじゃうよ！」

「そう、私たちはこれからみんなで素晴らしい世界へ旅に出ますの。それがどんなに素敵なことかわかりませんか？　生きてる身体なんて邪魔なだけですわ。鹿目さん、あなたもすぐにわかりますから」

その言葉とともに、まばらな拍手が起きました。

虚ろな目をした人たちが、わたしをぐるりと囲んでいたことに気がつきます。

「は――な、してッ！」

力づくで仁美ちゃんの手をほどくと、わたしはおばさんの持っていたバケツを取りあげ、そのまま一度振りかぶって、中の洗剤ごと窓ガラスに投げつけました。

ガラスが割れ、工場の外にバケツが転がる音を聞きながら、わたしは肩で大きく息をします。

すると、背後でぼとり、という音が聞こえて――

振り返ると、おじさんが持っていた漂白剤を落とすところでした。

そして――

おじさんも、おばさんも、仁美ちゃんも……

誰も彼もが、冷たく、暗く、恨みそのものを向けてくるような視線でわたしを見つめていました。

「う……ッ」

咄嗟に辺りを見渡したわたしは、すぐそばに扉があるのに気がついて、そこに駆け込むのと、仁美ちゃんたちがわたしに摑みかかろうとするのは同時でした。急いで鍵をかけた瞬間、外から扉を殴りつける音が無数に聞こえてきました。

「や……やめて！」

耳を押さえ、その場にへたり込んで叫びます。

けれど、扉を叩く音は増すばかりで、その都度、木製の扉は大きく揺れていました。扉

をとりつけてある金属部分が徐々に大きく波打ち、このままだと扉が持たないことがわかります。

「と、どうしよう……どうしよう」

また涙が出そうになって、それをこらえつつその狭い部屋の中を見渡しました。

けれど、そこはただの物置きで——

窓ひとつない小さな空間だと知ったわたしの心は、真っ暗になります。

その時——

部屋の片隅が、奇妙に歪むのがわかりました。

どこかから、けたけたというあの嗤い声が響いて——

「うそ……や、やだ……そんなッ」

それは——

魔女の結界が現れる時の兆しでした。

何かをカウントするように、嬉しそうな、気味の悪い声が大きくなっていきます。

気がつけば——

辺りは、砂嵐が映し出されたたくさんのテレビで覆われていて。

片羽の奇怪な小人たちが、わたしの身体中にしがみついていて。

「き……きゃあああああっ」

ついこの間味わった絶望的な気持ちが、再び、わたしの心を満たしていき——
いつしかわたしは、何かに掴まれるように——螺旋状の空間へと落ちていくところでした。
「——いやだ……助けて……誰か……」
必死に、心の中でマミさんの笑顔を思い浮かべます。
あの、いつも、わたしの心に勇気と安心を与えてくれた、優しい微笑み。
だけど、思い浮かんだのは、無惨に食い散らかされた黄色い衣装だけで——
首から上が消えた、マミさんの身体だけで——
その光景は——わたしの周囲をぐるぐると回る、メリーゴーランドに乗せられた、たくさんのテレビモニターの中の光景であることに気がつきました。そして、同じくメリーゴーランドに乗った片羽の使い魔たちが——わたしに見せ付けているのでした。
「や……やめて……」
けれど、モニターはマミさんの姿だけを映し続けます。
揺れながら、揺らめきながら——
マミさんの温かい笑顔、颯爽とした物腰、すこし照れたように話す仕草……
そして……そして……わたしが魔法少女になる、と告げた時の、嬉しそうに涙を拭う顔

それらを、映し続けます。
「わたし……」
――本当に、これから……私と一緒に、戦ってくれるの？　側にいてくれるの？
「わたし……本当に、そう思って……思ったんです……」
――でも、いてくれなかったのね。
「……わたし、わたし、ごめんなさい……」
――側にいてくれるって言ったのに。
――私はひとりじゃないって思ったのに。
「……ごめんなさい、ごめんなさい……」

――とても、嬉しかったのに。

……罰なのかな……これって。
どこが上か下かもわからない世界を落ちながら、わたしは思いました。
……きっと、わたしが弱虫で、嘘つきだったから……バチが当たっちゃったんだ……
そう思った瞬間――
体中から、抵抗する力も消えてしまって――

わたしの身体は、四方八方から無数の使い魔たちに引っ張られ。
ぎりぎりと骨が歪み、肉が裂かれて――
ばらばらになるんだ、と目を瞑りかけた、その時――
無数の青い光が辺りを満たしていました。
気がつくと、テレビモニターからマミさんの姿が消え――髪を結った少女の慌てふためく影が映ったかと思うと、テレビモニターは次々と破壊されていました。砂嵐を映しながら粉々になっていくテレビのその向こうには――目にも鮮やかな藍色の衣装と、白のマントが翻っていました。そして……見覚えのある、短めの髪が風に舞っていました。
「……ま、まさか……」
その藍色の少女は――
無言で長剣を閃かせ、わたしの周りの使い魔たちを問答無用で斬り捨てていきます。ステップを踏むように、舞い踊るように――流れるような足さばきで、次々とテレビモニターを破壊していくのでした。
やがて少女は、勢い良く振りかぶり、叫びます。
「これで、トドメだぁッ――！」
その剣は、風を巻くように円を描き――
片羽の小人が抱えるテレビごと、わたしを取り囲んでいた結界ごと、そして、周囲に満

ち満ちていたまとわりつく、悪意ごと――吹き飛ばしてくれたのでした。
「……まさか……」
そう、それは――
わたしを守るために現れてくれた、藍色の魔法少女は――
いつもの勝ち気な微笑みを浮かべる、美樹さやかちゃんでした。

○

「……やー、ごめんごめん。危機一髪ってとこだったね」
そのさやかちゃんの笑顔は、いつもの明るい笑顔で――
ただ、衣装だけが、見覚えの無い藍色のものへと変わっていて――
「……さやか、ちゃん……」
わたしはただ、バカみたいに――そう呟いていました。
「そ……その格好……」
「ん？　あー、アハハ、まぁ、何？　心境の変化、っていうのかな」
さやかちゃんは、照れたように頭の後ろで手を組んで、そう笑います。
わたしは、なんと言ってよいのかわからず、ただ言葉を無くして目の前で笑うさやかち

ゃんを見つめていました。
「――大丈夫だって。初めてにしちゃ、上手くやったでしょ？　あたし」
「でも……」
でも……それは。
さやかちゃんが、そんな衣装に変わっていて、魔法でわたしを助けてくれたっていうことは。
それは、魔法少女になったっていうことで……
――そんなこと、聞いてないよ。
わたしがそう言いかけた時――
「あなたは……」
背後から、声がしました。
「ふん、遅かったじゃない。転校生」
さやかちゃんが、そんな挑発的な言葉を投げかけるその先には――
とこか呆然と佇む、暁美ほむらちゃんがいました。
「この町は、これからあたしが守る。マミさんの代わりはあたし。つまり――あんたは不要ってわけ」
そのさやかちゃんの言葉に、悔しげに唇を噛むほむらちゃんだったけど――

そんなことより何より、わたしの心は、どうしようもない寂しさに満たされていました。
――わたしは、聞いてない。
――魔法少女になるなんて、聞いてない。
さやかちゃんは、今日のお昼、あの屋上で、もう決意していたの？
それとも、まだ迷っていたの？　どうして相談してくれなかったの？　一緒に悩んでいたはずだったのに――
そうか……
わたしは、さやかちゃんの相談を受け止めてあげられるような状態じゃなくって……
マミさんのことで頭がいっぱいで――自分のことで頭がいっぱいで――だから、ひとりで考えて、ひとりで悩んで、さやかちゃんは、魔法少女として生きることを選んでしまったんだ……
「さ……さやかちゃん……」
「……あ？　あれ、なんでまどか……また泣いて……うわー、まいったな。違う。これは違うって」
「……わ、わたしのせいだ……全部、わたしが弱虫だから、さやかちゃんがひとりで……」
「だーかーらーっ！　違うって！」
それから、ちっとひとつ舌打ちして、さやかちゃんはほむらちゃんに向き直り、

「あんたとの話は、また後だ」

そう言うと「まどか、いこう」と、ほむらちゃんを置き去りに、わたしを工場の外に連れ出します。そして、いつかマミさんがそうしてくれたように——そのままわたしは空高く持ち上げられていました。風がわたしの前髪を吹き飛ばし、ひんやりとした夜の空をふたりで飛び続けます。満天の星空とネオンの間を、わたしはさやかちゃんにしがみつきながら見つめていました。

それはまるで宇宙旅行をしているように素敵な光景なはずで——だけど、その時のわたしは、さやかちゃんがひとりで魔法少女になってしまったことがショックでよくわかっていないのでした。

「連れていきたいとこがあるんだ」

そんなわたしに、さやかちゃんは耳元で優しく囁くように言います。

幾つものビルを飛び越え、やがて、さやかちゃんがわたしを下ろしたのは——

とある大きなビルの屋上でした。

誰もいない屋上のベンチにふたりして腰を下ろし、さやかちゃんはどこかを指差します。

「ほら、あそこ——」

さやかちゃんが指差す隣の建物は——

上条恭介くんが入院している、見滝原市立病院でした。

わたしの肩を抱くようにしてくれているさやかちゃんのおかげなのか――

わたしにも、遠く離れた、八階にある上条くんの病室の様子がはっきりと見てとれます。

消灯時間を迎えた暗い病室の中で、ひとり月明かりに照らされる上条くんの様子が、ありありとわかりました。

上条くんは――

月明かりの下、左手を掲げていました。

信じられない、といった表情で、自分の左手を何度も開いたり、閉じたりしています。

「奇跡も、魔法も、あるんだよ」

そう囁くように言う、さやかちゃんの横顔は――

月明かりに照らされて、とても奇麗で、澄んでいました。

「さやかちゃん……上条くんの為に……？」

「まあ、ね」

さやかちゃんは照れたように微笑んで、顔をあげて空を見上げました。

「まどかさ、『月の光』って聞いたことある？」

「……ううん、わからない」

「ドビュッシーの有名な曲でね、『月の光』っていうのがあるんだ。ベルガマスク組曲の中のひとつで、今日のお月様みたいに、奇麗で、完璧で、聞いていると涙が出てくるような

素敵な曲なんだ……なんてさ、あたしも恭介に教えてもらったんだけど」

えへへ、とさやかちゃんは、頭を掻きながら笑います。

「恭介が好きな作曲家でさ、だからよくあたしはCD屋で探して持って行ったんだけど——こないだ、言われたんだ。さやかは、僕をいじめてるのかい？　って。ショックだったなあ……よかれと思ってやってることが、知らずに人を傷つけることってあるんだよね。恭介は、音楽が好きだから音楽をあげれば喜ぶなんて、さ。優れた音楽を聞かせれば聞かせるほど、恭介が、そこにはもうたどり着けないって思ってしまうなんて——少しも気がつかなかった」

そう淡々と話すさやかちゃんは、もう何かを乗り越えて、すごく遠くに行ってしまった人のようで——わたしは、何も言えずその言葉をただ心に刻んでいくだけでした。

「あたしと看護師さんで止める中、恭介は自分でCDプレーヤーを左手にぶつけて、泣きながら言うんだ。これでも感覚がないんだって。こんなことをしても痛くもないんだって——そう泣き叫んだんだ。病院からの帰り道、あたしも泣いてた。なんで……なんで、恭介なのよって……あたしの指なんて動かなくなってもいいから、恭介にあげてよって神様にずっと泣きながらお願いしてた。マミさんに止められたけどさ——どれだけ考えても、あたしの望みなんてそれだけなの。あたしが魔法少女になって、恭介の腕を元通りにしてって願いを言えば、恭介はまた幸せになれる。聞く人がみんな幸せになれる、あのバイオ

リンの音を響かせられる――」

そこでさやかちゃんは――

自分の髪をくしゃりと摑んで、でもね、と膝を抱えます。

「でも、あたしはそれで、恭介に感謝されたいの？　ありがとうって言われて、それで終わり？　そこから何を望むの……？　そう考えたらさ、自分がどうしようもなく薄汚れた、嫌な女の子に思えてきてさ――決断できなかった」

その言葉に――

いつしか、わたしはさやかちゃんの手をぎゅっと握りしめていました。

わたしが、自分のことしか考えていないその間に、さやかちゃんは上条くんの幸せと自分の幸せの間で悩んで、苦しんで――それが、すごくて、えらくて、やっぱりわたしは言葉を無くしていました。わたしは、絶対さやかちゃんの味方だよってそう言ってあげるべきなのに、それすら言えず――これ以上離れないように、離されないように――ただ涙をこらえながら、さやかちゃんの柔らかい手を握りしめているだけでした。

そして――そんなわたしの手を、さやかちゃんは強く握り返してくれて。

その温かなぬくもりとともに、震える声で言葉を続けます。

「で、さ――ある日、恭介に言われたんだ。もう見舞いにこないでって。もう治らないからって。さやかが来ると辛いからって。でも、あたしは言い返した。諦めなければ、きっ

となんとかなるよって——そんなバカなことを言っちゃって……そしたら、恭介が笑って……久しぶりに笑ったのに——あんなに乾いた笑い顔をさせちゃって……笑いながら、恭介は言った。もう諦めろって医者に言われたよって。今の医学じゃこの腕は治らない——奇跡か、魔法がないかぎり治らないって——」

さやかちゃんは、一度こぼれ落ちた涙を拭うと、微笑みました。

「だから、あたしは言ってやったよ。奇跡も、魔法も、あるんだよって」

気がつくと——

ビルの手すりの上には、キュゥべえがいて——

赤い瞳を輝かせ、長いしっぽを柔らかく振っていました。

「やあ、まどか」

「……キュゥべえ」

「ホントにいいんだねって、確かめたんだけど——さやかの決意は固かったよ」

その言葉に——

ずっと我慢し続けてきたわたしの涙は、ついに、ぼろぼろと転がり落ちました。

それは、さやかちゃんの決心に心が震えたのか、さっきの魔女が今頃怖くなったのか、それともただ悲しかったのか——わかりません。

けど、多分、それは全部本当で、すべてがいっしょに押し寄せてきたんであって——

そして、何より、さやかちゃんがわたしと違う世界に行ってしまったということが……
どうしようもなく、寂しかったのです。

第五章　わたしが、心を決める時

キュゥべえと出逢ってから――一週間が過ぎていました。
たった一週間とは思えないほど、いろいろなことがあった一週間でした。
この世に禍の種をまき散らす、魔女が存在するということ。
そして、その魔女と対決する魔法少女という存在があること。
その魔法少女が願いと引き換えに――わたしの知らないところで、ずっとこの世界を守ってくれていたということ。
あまりにもたくさんの事柄が押し寄せていて、わたしの頭はパンクしそうでした。
そして、今……小学生の頃からずっと一緒だった、美樹さやかちゃんが魔法少女として契約してしまって――わたしはひとりどうしようもなく……取り残されているのでした。

「……ふわああ」
朝のホームルームが始まる前の、教室でのことでした。
志筑仁美ちゃんが、大きな口を開けてあくびをして――すぐに顔を赤らめました。
「ああ、はしたない……ごめんあそばせ」

「どうしたのよ、仁美？　寝不足？」
そんな仁美ちゃんに、さやかちゃんが明るく話しかけます。
昨日の藍色の魔法少女に変身したさやかちゃんが目に焼き付いていて、わたしはそんなふたりをぼうっと見つめていました。
「ええ。ゆうべは病院やら警察やらで夜遅くまで……」
「え～？　何かあったの？」
「なんだか私、夢遊病っていうのか……それも同じような症状の方が大勢いて、気がついたらみんなで同じ場所に倒れていたんですの」
「はぁ？　何ソレ？」
さやかちゃんは、まるで初めて聞くとでもいった様子でそう話を促します。
「お医者様は集団幻覚だとか何とか……今日も放課後に精密検査に行かなくてはなりませんの。ああ、面倒臭いわ……」
仁美ちゃんは、あの廃工場で、たくさんの人たちと集団自殺をしようとしていたことをまったく覚えていないようでした。そっと横から窺うと、もう仁美ちゃんの首筋から『魔女の口づけ』と呼ばれるあの痣は消えていました。
「そんなことなら、学校休んじゃえばいいのに」
さやかちゃんがからかうように言うと、仁美ちゃんは即座に姿勢を正して反論します。

「駄目ですわ。それではまるで本当に病気みたいで、家の者がますます心配してしまいますもの」
「さっすが優等生。偉いわぁ」
けらけらと笑うさやかちゃんだけど――
わたしは、そんなふたりを見ているのも辛くて……そっと目をそらしました。
するとそこで、わたしたちを見つめる暁美ほむらちゃんと目が合います。はっとするわたしだけど、すぐにほむらちゃんは視線を外して、またひとり静かに前に向き直ります。
――ほむらちゃんは、どう思っているのかな……？
ふと、わたしは思いました。
この町にもうひとり魔法少女が増えて、心強く思っているのかな？　それとも、マミさんの時みたいに、やっぱり邪魔だって思うのかな……？
ふたりが協力してやっていけたなら――
マミさんの時のようなことは、もう起きないかもしれない……
ひとり取り残されないように――わたしは、ずっと、そんなことばかり考えていました。

「んーッ、久々に気分いいわぁ。爽快爽快ッ！」
その日の午後――
わたしはさやかちゃんに連れられるままに、姫名川の土手に来ていました。
青々とした芝生に寝転んで、さやかちゃんは思い切り腕を伸ばしています。
「土曜日の午後っていいよねえ……毎日、半ドンならいいのになあ」
そんなことを言って、目を細めるさやかちゃんにわたしは尋ねます。
「……さやかちゃんはさ、怖くは、ないの？」
「ん？」
「……その、魔法少女になる契約をしたこと」
すると、さやかちゃんは寝転んだまま頭の下に腕を組み、笑いました。
「そりゃ、ちょっとは怖いけど。まぁ昨日のヤツにはあっさり勝てたし」
それからふと真面目な顔になって、
「もしかしたらまどかと仁美と――友達ふたりも同時に亡くしてたかもしれないって、そっちの方がよっぽど怖いよね」
そう真剣な顔つきで、言い足します。
わたしはそれを聞いて、いよいよ気が重くなりました。
それって、わたしを守るためにさやかちゃんが契約したっていうことで――

けど、さやかちゃんは勢い良く身体を起こすと、ソウルジェムを取り出して、にかりと笑います。

「だ・か・らッ——何つうかな。自信？　安心感？　ちょっと自分を褒めちゃいたい気分つうかね。まー舞い上がっちゃってますねーあたし。これからも見滝原市の平和は、この魔法少女さやかちゃんがガンガン護りまくっちゃいますからねー」

そう笑って、わたしの肩をばんばんと叩きます。

「後悔とか、ぜんぜんないの？」

そう尋ねると、そうねえ、とさやかちゃんは少しだけ考え込みました。

「うーん……後悔っていえば——迷ってたことが後悔かな。どうせだったら、もうちょっと早く、心を決めるべきだったな、って。あの時の魔女、あたしとふたりがかりで戦ってたら、マミさんも死なないで済んだかもしれない」

その言葉に——

また、あの時の光景を思い浮かべてしまいました。

わたしが先にマミさんに約束したのに——

一緒に戦うって……ずっと側にいるって……約束したのに……マミさんはあんなに嬉しそうに笑っていたのに。わたしは、ぎりぎりのところで怖くなって、逃げ出して……

責められるべきは、さやかちゃんじゃない。わたしなんだ——

そんな心いっぱいに広がった真っ黒な後悔に俯いていると、
「さては、またなんか変なこと考えてるな？」
さやかちゃんに肩を、こつん、とこづかれます。
「……わたし……わたしだって……」
「なっちゃった後だから言えるの。こーゆーことは」
そう言って、さやかちゃんはわたしの肩を抱くように腕を回してくれました。
「『どうせなら』っていうのがミソなのよ。あたしはさ、なるべくして魔法少女になったわけ」
「さやかちゃん……」
「願い事、見つけたんだもの。命懸けで戦う羽目になったって構わないって、そう思えるだけの理由があったの。そう気付くのが遅すぎた、っていうのが、ちょっと悔しいだけでさ……だから、引け目なんて感じなくていいんだよ。まどかは魔法少女にならずにすんだっていう、ただそれだけのことなんだから」
そう言って、わたしの瞳の中を覗き込むように微笑んでくれます。
何か言わなきゃ、とわたしが言葉を探している間に、さやかちゃんは「さて、と」と立ち上がります。
「じゃあそろそろ、あたしは行かないと」

「……何か用事があるの？」
「ま……ちょっと、ね」
また、にかりと笑って、さやかちゃんはわたしに手を振ると、鞄を肩に掲げるように去って行ってしまいました。

○

「……ああ」
ひとり河原に取り残されたわたしだけど——
その時になって、やっとさやかちゃんに言いたかった言葉を思いつきました。
わたしは、こう訊きたかったのでした。
——わたしは、ちゃんとさやかちゃんの友達になれてるの？
それは、魔法少女として契約するという重い決断をひとりでさせてしまったという後悔と——そして、もし、わたしがさやかちゃんにとって友達と言えるなら、何かわたしにも手伝わせてほしい、と伝えることでした。
いつもいつだって、自分の言いたいことすらすぐに思い浮かばないわたしです。それで、慌てて立ち上がってスカートについた草を払うと、急いでさやかちゃんの立ち去った方角

に駆け出します。

川沿いの遊歩道を降りて、駅の方向に曲がったところでさやかちゃんの姿を見つけたんだけど——そこで足を止めます。それは、さやかちゃんが向かっているのが、上条くんの入院している病院の方角だと気がついたからでした。

「……どうしよう」

でも、結局、そのまま迷って後をつけているうちに、一緒に病院までついていってしまうわたしでした。

病院のエントランスを越えて、広い待合室を通り過ぎ、さやかちゃんはまっすぐにエレベーターに乗り込みます。わたしも次のエレベーターで、上条くんの病室のある階へと向かいました。

八階に着いて、廊下に出て、そっと部屋の入り口に向かうと——

そこに、ふたりの会話が聞こえてきました。

「——そっか、退院はまだなんだ」

そう尋ねるさやかちゃんに、

「足のリハビリがまだ済んでないしね。ちゃんと歩けるようになってからでないと」

そう答える、上条くんの声が聞こえてきます。

どうやら、今、部屋にはふたりしかいないみたいでした。

「手の方も、いったいどうして急に治ったのか、まったく理由がわからないんだってさ。だからもうしばらく、精密検査がいるんだって」
「恭介自身は、どうなの？　どっか身体におかしなとこ、ある？」
「いや、なさすぎて怖いっていうか……事故に遭ったのさえ悪い夢だったみたいに思えてくる。なんで僕、こんなベッドに寝てるのかな、って。さやかが言った通り――奇跡だよね、これ」
久しぶりに聞く上条くんの声は、まだどこか半信半疑のようだったけど、弾んでいました。
嬉しさが言葉の端々に滲んでいて、わたしは壁に頭をつけるようにその声に聞き入ります。
「さやかには……酷いこと、言っちゃったよね。いくら気が滅入ってたとはいえ……」
「あはは。変なこと思い出さなくていーの。今の恭介は大喜びして当然なんだから。そんな顔しちゃ駄目だよ」
「うん……なんだか、実感なくてさ」
それから、すこし沈黙があって、さやかちゃんが不意に言いました。
「そろそろ……かな？」
「……え？」

「恭介、ちょっと外の空気、吸いに行こ」
その言葉に、慌ててすこし先にあった給湯室へと身を隠すわたしです。
やがて、上条くんを乗せた車椅子を押しながら、さやかちゃんが出てきます。
ふたりはそのまま、エレベーターの方に向かい、中に入って扉は締まりました。
追いかけて上のランプを確認すると、ふたりは屋上に向かったようでした。
そこで、もう帰ろうかな、と一度迷います。さやかちゃんにさっきのことを告げるのは、また明日でもいいんじゃないかな、と考え直したりします。けど、一度階段に向かいかけたところで、
「早く、屋上で始まるよ」「ああ、待って待って！」
嬉しそうに、ふたりの看護師さんがエレベーターに乗り込むところに出くわしました。
……屋上？　始まる？
その言葉が気になって、ついわたしもそのエレベーターに乗せてもらいます。
扉が閉まって、どきどきしながら身を縮ませていると、ふたりの看護師さんはわたしに構わず話し出しました。
「ホントに、よかったね」
「うん。上条くんも頑張っていたし、あの女の子もずっと毎日お見舞いに来てたものね」
「こういうのを見ると、病院はやっぱり治すところなんだって、誇りに思うよ」

そんな会話を聞きながら、やがてエレベーターは屋上にたどり着きます。
そして、扉が開くなりふたりの看護師さんは飛び出していって——
わたしも、そっとエレベーターから降ります。
エレベーターの外は階段の踊り場になっていて、そこからすぐに、屋上へと出る鉄の扉が開け放たれていて——そして、屋上には、たくさんの人々が立ち並んでいました。
その中心には、車椅子に座る上条くんがいて、その傍らにはさやかちゃんが立っています。
人々はみな笑顔で、上条くんに向けて拍手をしていました。白衣を着たお医者さんに、たくさんの看護師さん……そして、たぶん上条くんのご家族がみな満面の笑顔で、呆然とする上条くんに温かい拍手を送っていました。
「みんな……」
「本当のお祝いは、退院してからなんだけど……足より先に手が治っちゃったしね」
さやかちゃんが、そう笑顔で上条くんに話しかけていました。
そこに、ひとりの男の人が進み出て——
狼狽える上条くんに、バイオリンを手渡します。
「お前からは処分してくれと言われていたが……どうしても捨てられなかった」
その言葉で——その人が、上条くんのお父さんであることがわかりました。

「さあ、試してごらん。怖がらなくていい」

そう勧められ、躊躇いがちにバイオリンを見つめていた上条くんは、ゆっくりとバイオリンを首もとに挟みます。そのまま感触を味わうような、長い、長い、沈黙があって――

やがて、その旋律は屋上に流れ出しました。

わたしには、誰の何という曲かまるでわからなかったけど――

それが、とても難しくて、そして美しい曲であることは感じていました。

ところどころ音が乱れたけど、その歪みすらもともとそうであると感じるほど、その透き通った音色は、まっすぐにわたしの心に染みていきます。知らずに胸を押さえて、鼓動が高鳴るのを抑え――

『恭介のバイオリンを聞いた人の顔を、まどかにも見せてやりたいよ』

前に、さやかちゃんが言っていた言葉を思い出します。

『誰も彼も子供みたいな顔になっちゃうんだよ』

ホントに……その通りでした。

屋上にいるすべての人が、言葉を無くしてただその音に聞き入っていました。

お医者さんも、看護師さんも、ご家族の方たちも、もちろんさやかちゃんも――

誰もが、感極まった様子で、その音の波の中にいました。涙を浮かべている人もいます。

もちろん、わたしの瞳にも涙が溜まっていて――

そしてその時……いつの間にか、足下にキュゥべえがちょこんと座っていることに気がつきました。
「……き、キュゥべえ？」
「……しーっ」
口の前で前足をかざして、キュゥべえはそのままわたしにそっと触れます。
そして、その声が頭の中に響きました。
（――マミさん……あたしの願い、叶ったよ）
それは――
さやかちゃんの心の声でした。
（――後悔なんて、あるわけない……あたし、今、最高に幸せだよ……）
ソウルジェムを握りしめてそう囁く、さやかちゃんの言葉で――
わたしの瞳から、ぽろり、と涙がこぼれ落ちます。
そして、この時――
わたしはひとり決意していました。
どうしようもないほど、弱虫だけど――
怖いと身体が動かなくなっちゃうし、言いたいこともすぐに言えないし、なりたい自分を目指す勇気すらないけれど――

こんな、さやかちゃんが大好きだから……人のために頑張っちゃうさやかちゃんが大好きだから。

わたしもわたしにできることをやろう。

魔法少女になれなくっても、何かできることがあるはず——それが何だか、やっぱりわたしにはわからないんだけど……

ただ、そうせいいっぱいの気持ちで、澄み渡る青空に誓っていたのでした。

○

——とにかく、まず、ほむらちゃんに逢わなきゃ。

急き立てられる思いに駆け出したわたしは、エレベーターを降りて、病院の一階エントランスに降ります。たくさんの人々がソファで順番を待つ待合室では歩くようにして、エントランスをくぐるとそのまま駆け出しました。

けれど、そこで——

どんっと誰かにぶつかって転んでしまいます。

「……いてえ」

「ご、ごめんなさいっ」

慌てて起き上がり、転がった鞄を取ると、わたしはそう謝ります。
「おい、気をつけろよ？」
そうわたしを睨むのは——
水色のスポーツパーカーを着て、明るい色の髪を頭の上で結った、わたしと同い年くらいの女の子でした。
ホットドッグを食べながら、じろり、と睨みつけてきます。
「ホントに、ごめんなさい！　急いでいたものだから」
もう一度そう謝った時、わたしの制服にホットドッグのケチャップがついていることに気がつきます。
「あ……」
でも、その子は、じろじろとわたしの頭の先からつま先まで見つめたあげく、
「チョロチョロしてんな、バカ」
そう皮肉混じりの笑顔で言い捨てると、踵を返して病院の中に消えて行きました。
小さくなっていくその背中を、呆然と見つめながら——
これ、落ちるかな……と凹むわたしでした。
とにかくハンカチで、胸のケチャップの染みを拭きながら、また駆け出します。
もう時間は二時過ぎで、学校にほむらちゃんが残っている可能性は低いけど——でも、

誰かほむらちゃんの連絡先を知っている子がいるかもしれない……

そんな思いだけを胸に、学校に戻ります。

昇降口で上履きに靴を変えて、階段を上って、教室に駆け入ります。

でも、そこには、やっぱり誰もいません。

けど、ここで諦めちゃうと、明日は日曜日で、月曜日までほむらちゃんと会うことができなくて——その間にまた危ないことがさやかちゃんに起きたらと思うと、放っておくことなんてできない……

職員室に向かって、ノックして扉を開くと、ちょうど和子先生がいました。

「あれ、鹿目さん？　どうしたの？　忘れもの？」

「あ、あの、先生……暁美さんの住所を教えてください」

「暁美さんの？　いいけど……ちょっと待ってね」

がさごそと机の上のファイルを取り出しながら、和子先生は言います。

「でも、ちょうどいいわ。暁美さんのこと気になってたの。クラスにはもう溶け込んでる？」

「……え」

「ほら転校生だし、おとなしいからすこし心配してるの。鹿目さんも話しかけるようにしてあげてね」

その言葉で——

やっと、ほむらちゃんをどうしても悪い子だと思えない理由がわかりました。

わたしも小学五年生の時にこの町に越してきた転校生で——そして、やっぱりすぐに馴染めなくて、不安でひとりぼっちが悲しくて、毎日泣いていたことを思い出したのでした。

「ああ、あったあった。いま住所書き写してあげるわ」

そんな、和子先生の言葉を聞きながら——

わたしはほむらちゃんのことをどれだけ知っているんだろう、と考えていました。

家も知らない。連絡先も知らない。なぜかキュゥべえを憎んでいて、黒と白とグレーの衣装に身を包む魔法少女で、それは魔女を前にしても怯むことのない、とても強い魔法少女で——

……ううん、そうじゃない。強いところばかりじゃない。この間、わたしが魔法少女になるのを辞めたと言った時——ほむらちゃんだけは、嬉しい、と言ってくれた。そのわずかに見せた感情は、すぐに仕舞い込まれてしまったけれど……それでも、ほむらちゃんにもちゃんと感情があるんだとわかって、わたしは嬉しかったのでした。仲良くなれるかもしれないって、心が温かくなったのでした。

こう考えてみると——ほむらちゃんが何を目的として、キュゥべえを嫌い、何を考えてわたしが魔法少女になることに反対しているのか、未だにわたしは知らないのです。

そのことも、ほむらちゃんに訊いてみよう、と思っていると、
「はい」
和子先生はにっこりと微笑んで、メモの切れ端を差し出してくれていました。
「そこに住所と電話番号が書いてあるから。友達になってあげてね？」
そう何気なく言われた和子先生の言葉に、またわたしの心はすこし重くなっていました。
それは、ほむらちゃんと友達になるのが嫌だとかそんなつもりは無くて――
わたしが誰かの友達になれるのかな、という思いです。
弱虫で、自分の意思もはっきりとしないわたしは、自分から見てもとても頼りになりません。
こんなわたしが誰かの本当の友達になれるのかな……という悲しい思いでした。

○

「――話って何？」
あいかわらず奇麗な顔に冷めた瞳をしたほむらちゃんは、コーヒーを一口飲むと、そう訊いてきました。
「え……えっと……」

そこは、あまりクラスメイトが立ち寄らない駅前の喫茶店でした。
和子先生に聞いた電話番号に電話して、ほむらちゃんにここに来てもらって――
なんかいつもの勢いでサンドウィッチのセットを頼んでしまった自分がバカみたいです。
頼んでしまったからには、食べないといけないし、食べていると話がなかなか進みません。
「あのね、さやかちゃんのことなんだけど……」
サンドウィッチは持ち帰らせてもらうことにして、わたしはそう切り出しました。
けど、さやか、という単語を聞いた瞬間に、氷のようなほむらちゃんの瞳はいよいよ冷たく光ります。
わたしだけでなく、さやかちゃんが魔法少女として契約するのに反対していたほむらちゃんは、やっぱりものすごく怒っているようでした。
けど――
さっき見た病院の屋上での光景を思い浮かべ、わたしはありったけの勇気を振り絞ります。
「あ、あの子はね、思い込みが激しくて意地っ張りで、けっこうすぐに人とケンカしちゃったり……でもね、すっごくいい子なの。優しくて勇気があって、誰かのためと思ったら頑張りすぎちゃって……」

わたしの中のさやかちゃんをめいっぱい思い浮かべて、すこしでもほむらちゃんとさやかちゃんの距離を縮めたくて、そう説明したんだけど――

「魔法少女としては、致命的ね」

ほむらちゃんは、そう冷たく言い捨てました。

「度を超した優しさは甘さに繋がるし、蛮勇は油断になる。そしてどんな献身にも見返りなんてない……それを弁えていなければ、魔法少女は務まらないわ。だから――」

そこでふと視線を外して、ほむらちゃんは言います。

「だから、巴マミも命を落とした」

「そ……そんな言い方やめてよ！」

思わず、わたしは叫んでいました。

その瞬間、店中の人がこちらを見つめたのを感じて、身を縮めます。

そうだ――わたしはケンカをしにきたんじゃないのに……

そう思い直して、もう一度言いました。

「さやかちゃん、自分では平気だって言ってるけど……でも、もしマミさんのときと同じようなことになったらって思うと……わたし、どうすればいいのか……」

「美樹さやかのことが、心配なのね」

そう訊かれて、わたしは小さく頷きました。

「わたしじゃもう、さやかちゃんの力になってあげられないから……だから、ほむらちゃんにお願いしたいの」

それから、ほむらちゃんの瞳をまっすぐに見つめた後、お願いをします。

「さやかちゃんと仲良くしてあげて。マミさんの時みたいに、ケンカしないで。魔女をやっつけるときも、みんなで協力して戦えば、ずっと安全なはずだよね？」

「……」

けど、ほむらちゃんは何も言わず、静かにまたコーヒーを口に運ぶだけでした。

でも、でも、ひたすら——

わたしは、お願い、お願い、と目に力を込めてほむらちゃんを見つめ続けます。

ついに根負けしたように、ほむらちゃんは口を開きました。

「私は嘘はつきたくないし、できもしない約束もしたくない」

その言葉は、ひときわ冷静で——その瞳は、悲しいほど冷たくて。

「だから、美樹さやかのことは諦めて」

そう告げるほむらちゃんの瞳は、マミさんとは正反対で、希望なんてまるで感じさせなくて——

それだけに、その言葉はわたしの胸に突き刺さります。

「……どうして、なの？」

震えた声で尋ねると、
「あの子は、契約すべきじゃなかった」
そう言うほむらちゃんは、悔しそうに顔を歪めていました。
「たしかに私のミスよ。あなただけでなく彼女もきちんと監視しておくべきだった。でも、責任を認めた上で言わせてもらうわ。今となっては、どうやっても償いきれないミスなの。死んでしまった人が帰ってこないのと同じこと」
「でも――でも……」
「一度魔法少女になってしまったら、もう救われる望みなんてない……あの契約は、たったひとつの希望と引き換えに、すべてを諦めるってことだから」
――すべてを諦める……？
「……だから？」
思わず、また声を大きくして訊き返してしまいました。
「だから、ほむらちゃんも諦めちゃってるの？　自分のことも、他の子のことも、全部？」
「――ええ」
ほむらちゃんは、さも当たり前のことのように、頷きます。
「罪滅ぼし、なんて言い訳はしないわ。私はどんな罪を背負おうと、私の戦いを続けなきゃならない」

「……」

言葉もないわたしから視線を外すと、ほむらちゃんは立ち上がりました。

「時間を無駄にさせたわね。ごめんなさい」

そう告げると、そのままわたしをひとり置いて——

お店から立ち去ってしまったのでした。

○

もう、日が落ちます。

そして——

ほむらちゃんと別れた後、わたしの足は自然とさやかちゃんの家へと向かっていました。

駅から歩いて五分ほどのところにある、大きなマンションです。

そのエントランスまでたどり着いて——

そこで、わたしの足は止まってしまいました。

——ここに来て、どうなるっていうんだろう？

——さやかちゃんになんて言って、わたしはどうしたいんだろう？

それを考えると、オートロックの横にあるチャイムに手を伸ばすこともできません。

そのまま、街灯の下で鞄を抱えていると、突然、エントランスの扉が開いて――
「……あれ？　まどか」
出てきたのは、さやかちゃんでした。
「何してんの？　わたしに用？」
「……あ、うん。さやかちゃんは、これから……その」
皆まで言わせず、さやかちゃんは力強く微笑みます。
「そ。悪い魔女を探してパトロール。これも正義の味方の務めだからねー」
そんな風にどこか茶化して言うけど――
わたしは、訊きました。
「一人で……平気なの？」
「へーきへーき。マミさんだってそうしてたんだし。後輩としてそのぐらいはねー」
けど――マミさんは。
『無理してカッコつけてるだけで――』
『怖くても、辛くても、誰にも相談できないし、ひとりぼっちで泣いてばっかり……』
あの時、そう呟いていて。
『いいものじゃないわよ……魔法少女なんて――』
その泣きそうに、か細い声が、頭の中いっぱいに思い出されてきて――

わたしは、さやかちゃんの腕を掴んで、言ってました。
「あ、あのねっ、わたし、何にもできないし、足手まといにしかならないってわかってるんだけど、でも……邪魔にならない所までいいの。行けるところまで、一緒に……連れてってもらえたら、って……」
「……まどか」
さやかちゃんは、すこし腰を屈めて、わたしの瞳を覗き込んできます。
「頑張りすぎじゃない？」
「ご、ごめん……駄目だよね。迷惑だってのはわかってるの……」
「……ううん、すっごく嬉しい」
そう言うと、さやかちゃんは微笑み、わたしの手を握ります。
その冷たい感触に、わたしは、はっとしました。
「ね……わかる？　手が震えちゃってさ。さっきから、止まらないの。情けないよね。もう魔法少女だってのに、一人だと心細いなんてさ……」
「さやかちゃん……」
「邪魔なんかじゃない。凄く嬉しい。誰かが一緒にいてくれるだけで、あたし、すっごく心強いよ。それこそ百人力って感じ」
「わたし……」

百人力なんて、とんでもない——確実に足手まといで、邪魔なのはわかってて——でも、こうしないとさやかちゃんの友達ですらいられないかもしれないって、それが怖くて……そういう気持ちだけで突っ走っちゃって——

「必ず、守るよ」

すると、さやかちゃんは、優しく囁くように言いました。

「だから安心して、あたしの後についてきて。今までみたいに一緒に魔女をやっつけよ」

そのさやかちゃんの微笑みは——

まるでマミさんがくれた、あのお腹の底から湧き上がる不思議な勇気に満ちていて。

「……うん」

わたしは、泣き笑いみたいな表情で頷きました。

「——危険は、承知の上なんだね？」

そののんびりとした声で、今頃、さやかちゃんの後ろにキュゥべえがいたことに気がつくわたしです。

「ああ、まかせて！」

さやかちゃんは力強く頷き、胸を叩きます。

「あたしバカだから、一人だと無茶な出鱈目やらかしかねないし。まどかもいるんだって肝に銘じてれば、それだけ慎重になれると思う」

「そうか……うん。考えがあっての事なら、いいんだ」
そう言うと、キュゥべえは、ぴょんとさやかちゃんの肩に飛び乗ります。
それから、わたしの方に顔を向け――
（キミにもキミの考えがあるんだろう？　まどか）
不意に、テレパシーで話しかけてきました。
わたしは驚いて、キュゥべえを見つめます。
どうやら、その声はわたしだけに向けられているようでした。
（さやかを守りたいキミの気持ちはわかる。実際、キミが隣にいてくれるだけで、最悪の事態に備えた切り札を、ひとつだけ用意できるしね）
そのとこか機械のように冷静な言葉に、わたしの心臓は、とくんと鳴りました。
（……わたしは）
（今は何も言わなくていい。さやかもきっと反対するだろうし）
わたしは、そっとさやかちゃんの横顔を見つめます。
さやかちゃんは、わたしたちの会話に気づきもせず、嬉しそうに歩き出していました。
その横を追いかけながら、わたしは思い出します。
あの、マミさんの部屋に置いてきた――わたしの魔法少女ノート。
そこに描かれた、いつかなりたいわたし。いつか、こうなれたら、と切ないほど望んだ

わたし。怖いものなんてなくって、素敵な笑顔で、どんな魔女だってやっつけてしまう、絶対無敵の魔法少女。

そんなわたしを、優しげに見つめて——キュゥべえは言います。

（ただ……もし、キミが心を決めるときが来たら、僕の準備はいつでも整ってるからね）

○

青色に輝くソウルジェムを手に、さやかちゃんは、薄暗い町を進みます。

ソウルジェムは明滅を繰り返し、やがてその回数は増していって——

「ここだ」

キュゥべえの声とともに、さやかちゃんの足も止まります。

そこは古いビルとビルの間——地下にある、もう閉店してしまったお店の前でした。

さやかちゃんがソウルジェムを振りかざすと、その階段の入り口はぐにゃりと歪み——辺りには、あの、けたたましい喧う声が響き始めます。

「この結界は、たぶん魔女じゃなくて使い魔のものだね」

キュゥべえは明るい声で言うけど——

何度来ても、結界が出現するとわたしの足は竦みます。

けど、さやかちゃんは張り切った声で、変化していく辺りの景色を眺んでいました。
「楽に越したことないよ。こちとらまだ初心者なんだし」
そして——その時でした。
数字をカウントするような、意味のわからないいつもの声が聞こえて——
無数のクレヨンが、舞い落ちてきます。
それと同時に、子供が遊ぶような声が辺りに響き——
何かが、結界の奥へと逃げ去って行くのが見えました。
「あッ、あそこ！」
わたしがそれを指差すと、
「任せて！」
さやかちゃんはソウルジェムをかざし、たちまち青色の光に包まれていきました。
着ていた制服が、青い光に包まれ、一度ばらばらになって、再びさやかちゃんの身体を包んだ時には——この間の藍色の衣装へと変化しています。どこかふわふわとしたマミさんの衣装とは違い、スレンダーなさやかちゃんの身体にぴったりとしたその衣装。短めのスカートと相まって、とても動きやすそうで、運動が得意なさやかちゃんをより頼もしく感じさせます。
肩にとりつけられたマントを翻すと、さやかちゃんを守るように長い剣が円状に立ち並

び――

「いっけ――ッ」

さやかちゃんはその声とともに、剣を次々と逃げる使い魔に放ちました。

使い魔の行く先、行く先に、突き刺さる剣たち。

そして、あとすこしで仕留められる、というその瞬間――

突然、剣は何かに弾かれてしまいます。

「……え？」

わたしたちが目を見張る、その先には――

さやかちゃんの長剣より遥かに長い、一本の槍を携えた少女が立っていました。

「な……逃がしちゃう！」

慌てて結界の奥へと駆け去る使い魔を追いかけようとしたさやかちゃんの前に、その少女は立ちはだかります。

「――ちょっとちょっと、何やってんのさ、アンタ達」

そんな気安い口調で近づいてくるその少女は――

明るく長い髪を頭上で結び、右肩に槍をかついで、左手には……鯛焼きを持っていました。

その鯛焼きを、ぱくりと一口で半分ほど食べて、少女は、にんまりと笑います。

「……あ」
そのどこか皮肉混じりの笑顔には――見覚えがありました。
たしか、上条くんの病院の前でぶつかって――
そして、わたしの制服にケチャップをつけたあの少女です。
「見てわかんないの？　あれ魔女じゃなくて使い魔だよ。グリーフシードを持ってるわけないじゃん」
「だって――」
さやかちゃんが叫びます。
「あれ放っといたら、誰かが殺されるのよ？」
すると、少女は面倒くさそうに頭をがりがりと掻きながら、
「だぁからさ、四、五人ばかり喰って魔女になるまで待てっての。そうすりゃちゃんとグリーフシードも孕むんだからさ。アンタ、タマゴ産む前のニワトリ絞めてどーすんのさ」
淡々と、冷たい口調で、そう言いました。
「佐倉杏子――キミは、わざわざそれを言いにきたのかい？」
キュゥべえが尋ね、少女は、ふんと鼻を鳴らします。
「マミがおっ死んだって聞いたからね。じゃあこの町はアタシが頂くかってね」
「それは一応、止めたはずだけど」

「ああ、この町にはイレギュラーがいるって話か？　そんなの気にするアタシだと思ったか？」

その言葉で――わたしは、理解します。

このいつも何か食べている少女も――

佐倉杏子と呼ばれたこの少女も、キュゥべえと契約した魔法少女で――

そしてこの子は、マミさんや、ほむらちゃんや、そしてさやかちゃんとは全然違う何かを感じさせて――まるで、魔女を前にした時のような恐ろしさを感じさせるのでした。

「魔女に襲われる人たちを……あんた、見殺しにするっていうの!?」

さやかちゃんが剣を構えてそう訊き返すと、その少女の瞳が冷たく光りました。

「アンタさ、なんか大元から勘違いしてんじゃない？　食物連鎖って知ってる？　ガッコーで習ったよねぇ？　弱い人間を魔女が喰う。その魔女をアタシたちが喰う。これが当たり前のルールでしょ。そういう強さの順番なんだから」

「そんな……」

それじゃあ、まるで――本当に、魔女です。

魔法少女は、それぞれ個性があるということは、わたしにもわかってきたけど……でも、それでも、少なくともわたしにとって、魔法少女は希望の存在であるはずでした。

「まさかとは思うけど。やれ人助けだの正義だの……その手のおちゃらけた冗談かますた

めに、ソイツと契約したわけじゃないよね？　アンタ」
槍先で指したのは、キュゥべえで――
そして、いつの間にか、キュゥべえはわたしの肩に寄り添うように、座っていました。
「だったら――」
次の瞬間、さやかちゃんは地を蹴っていました。
「何だっていうのよ！」
そのまま剣を振りかぶり、杏子ちゃんに向けて下ろします。
「……さ、さやかちゃん！」
けど――わたしの心配をよそに。
その剣は、軽々と杏子ちゃんの槍によって受け止められていました。
「……ちょっとさぁ、やめてくれない？」
杏子ちゃんは、ぱくりと鯛焼きをひと齧りしてから、べろりと舌を出します。
片腕だけで差し出す槍は、両腕で懸命に押すさやかちゃんの長剣を軽々と受け止めていて……
それは――圧倒的な、力の差を感じさせるのでした。
「ぐ……うう……」
渾身の力を振り絞るさやかちゃんの頬に、汗が浮かび――

「遊び半分で首突っ込まれるのってさぁ……ほんとムカツクんだわ」
そう言うと、杏子ちゃんは僅かに身体を捻らせます。その瞬間、さやかちゃんの剣は払われ、同時にくるりと一回転した杏子ちゃんの槍が、バラバラになって――
そのまま、鎖で繋ったバラバラの槍が鞭のようにさやかちゃんを打ち据えます。
「あぐ……ッ」
「……さやかちゃん！」
一瞬で、遥か後ろまで突き飛ばされたさやかちゃんに、わたしは駆け寄ろうとするけど――
……え!?
杏子ちゃんの力なのか、見えない壁に阻まれてそこから先に進むことができません。
「だ……大丈夫!? さやかちゃん！」
「フン、トーシロが。ちったぁ頭冷やせっての」
杏子ちゃんがそう言って、踵を返した時でした。
「誰が……あんたなんかに……」
わたしの目の前で――
さやかちゃんは、苦痛に顔を歪ませて、立ち上がっていました。
その様子に、振り返った杏子ちゃんは、意外そうな顔をします。

「れ？……おっかしいなぁ。全治三ヶ月、ってぐらいにはかましてやった筈なんだけど」
「……さやかちゃん……平気、なの？」
おろおろするわたしに、肩のキュゥべえが囁きます。
「彼女は癒しの祈りを契約にして魔法少女になったからね。ダメージからの回復力は人一倍だ」
「誰が……あんたなんかに……」
さやかちゃんは、ぎりぎりと歯を食いしばりながら、一歩、一歩と杏子ちゃんに近づきます。
「あんたみたいなヤツがいるから、マミさんは……」
すると、杏子ちゃんは残りの鯛焼きすべてを口に放り込んで、槍を両手に構え直しました。
「……うぜー、チョーうぜー。つーか何？　そもそも口の利き方がなってないよねぇ。先輩に向かってさぁ」
「黙れぇッ！」
そう叫んで、再び斬りかかったさやかちゃんの剣は、また杏子ちゃんの槍先で弾かれます。
「このやろう、チャラチャラ踊ってんじゃねーよ、ウスノロ！」

同時に、さっきの倍のスピードで繰り出される杏子ちゃんの槍に、さやかちゃんは防戦一方で追い詰められていきました。

「さやかちゃん……ッ！」

「まどか、近づいたら危険だ！」

思わず駆け寄ろうとしたわたしを、キュゥべえが必死に止めます。

けど……けど、もう何度も槍の先が、さやかちゃんの身体の至るところに容赦なく突き刺さって、そこから血が滲んでいるのがわかります。

「ぐッ……うッ……！」

「言って聞かせてわからねー、殴ってもわからねーバカとなりゃ……あとは殺しちゃうしかないよねぇ！」

「や、やめてぇ！」

けど、その杏子ちゃんの大きな攻撃は、危ないところで、さやかちゃんの剣で受け止められていました。そして——さやかちゃんの身体の傷が青く発光していることに気がつきます。キュゥべえが言っていたように、どんどんと治っていくのかもしれないけど——でも、このまま攻撃を受け続けたら、本当にさやかちゃんが死んでしまう……魔女じゃなくて、魔法少女に殺されてしまう——

「ふん、おもしれー。じゃ、これはどーだい？」

杏子ちゃんの繰り出す槍先は、次々にさやかちゃんの防御の隙を突いて、容赦なくさやかちゃんの身体に傷をつけていきます。頬を裂き、胸を、お腹を抉っていきます。

「どうして……ねぇ、どうして？　魔女じゃないのに……どうして味方同士で戦わなきゃならないの!?」

わたしの叫びに、肩のキュゥべえが冷静に答えました。

「どうしようもない……お互い、譲る気なんてまるでないよ」

「お願い、キュゥべえ、止めさせて……こんなのってないよ！」

「僕にはどうしようもない。でも――」

「……でも……？」

涙目のわたしを、キュゥべえの赤い瞳が見つめ返してきました。

「どうしても、力ずくでも止めたいのなら、方法がないわけじゃないよ？」

「……あ」

『キミが隣にいてくれるだけで、最悪の事態に備えた切り札を、ひとつだけ用意できるしね』

『もし、キミが心を決めるときが来たら、僕の準備はいつでも整ってるからね』

それは――

その方法とは――わたしが、契約すること。

わたしが、何かの願い事と交換で、魔法少女となること。

キュゥべえは、ひとつ頷いて言います。

「あの戦いに割り込むには、同じ魔法少女でなきゃ駄目だ。でもキミにならその資格がある。本当にそれを望むなら、ね」

――そうだ……わたしが、契約すれば……そうすれば、このふたりを止められるかもしれない。

けど――

『一度魔法少女になってしまったら、もう救われる望みなんてない』

同時に、ほむらちゃんの言葉も思い出されます。

『あの契約は、たったひとつの希望と引き換えに、すべてを諦めるってことだから』

あの悲しげな、すべてを諦めたような瞳が、頭の中いっぱいに広がっていました。

「でも……でも……」

「ぐあ……ッ」

わたしが迷っているその間にも、さやかちゃんは倒れ伏していました。

両足を砕かれて、その場に這いつくばっていて――

その足がたちまち青い癒しの光で包まれていたけど、杏子ちゃんの攻撃の方が早くって

「これで――終わりだよ！」

――もう、なんでもいい。

さやかちゃんを救えるなら。

わたしがさやかちゃんの友達でいられるなら。

「わたし……わたしの願いは――」

咄嗟にキュゥべえを振り返り、その赤い瞳を見返して、その願いを口にしかけたその時

「――それには及ばないわ」

頭上から、その声が響きました。

顔を上げると――

わたしの目の前には、黒と白の衣装に身を包んだ、暁美ほむらちゃんがいて――

だけど、その姿を認めると同時に、ほむらちゃんの姿は掻き消えていて。

「……え？」

振り向くと、なぜか――

杏子ちゃんとさやかちゃんは、それぞれ別の方向に移動していて――

そして、杏子ちゃんから繰り出された槍も、まるで関係のない場所を抉っていました。
同時に振り向いたふたりの中間に、無表情に佇むほむらちゃんがいて――
「な……」
「え……？」
杏子ちゃんも、さやかちゃんも信じられないといった風に、目を見開いているのでした。

第六章　こんなの絶対おかしいよ

「ほむらちゃん……」
わたしが呟き――
「おまえ……」
さやかちゃんも、呆然と口を開いていました。
「何しやがった、テメェ！」
杏子ちゃんは、今の出来事が、新手の魔法少女の仕業と気がついたのか――
そのまま、ほむらちゃんに向けて槍を繰り出します。
だけど――
そこにはすでに、ほむらちゃんの姿はありませんでした。
いつの間にか、杏子ちゃんの背後に立っていて、杏子ちゃんは、咄嗟にほむらちゃんから距離をとって叫びます。
「そうか、アンタが噂のイレギュラーってやつか……妙な技を使いやがる……」
――イレギュラー。
それって、さっきも言ってたけど……たしか――

野球部の男の子が、球が妙な方向に跳ねたときにそんな言葉を使っていたような。
つまり、ほむらちゃんは、普通の魔法少女とは違うって……そういうことなの？
「邪魔するなッ！」
その間に、怪我の治ったさやかちゃんが叫び――
再び、杏子ちゃんに斬りかかるけど、それも一瞬でさやかちゃんの背後に回ったほむらちゃんの腕によって止められます。そのまま、絶句しているさやかちゃんの首筋に、ほむらちゃんは鋭く手を振り下ろしました。
「ぐ……」
「さやかちゃん！」
ぐったりとその場に倒れたさやかちゃんにわたしが駆け寄ると、肩のキュゥべえが静かに囁きます。
「大丈夫、気絶しているだけだ」
「……何なんだアンタ？　いったい誰の味方だ？」
その言葉は、杏子ちゃんのものでした。
初めてその大きな瞳に警戒の色を浮かべ、ほむらちゃんにそう問い質します。
「私は冷静な人の味方で、無駄な争いをする馬鹿の敵」
それに対し、ほむらちゃんはあくまで冷静に返します。

「あなたは、どっちなの？　佐倉杏子」
「どうして、アタシの名を……？」
「……」
「どこかで逢ったか？」
「さあ、どうかしら」
冷たく響くほむらちゃんの声に、また一歩、杏子ちゃんは後ずさりました。
やがて――
ひとつ舌打ちをすると、槍を収めます。
「手札がまるで見えないとあっちゃね……今日のところは降りさせてもらうよ」
「賢明ね」
ほむらちゃんのその言葉が終わらないうちに――
杏子ちゃんは、背後に大きく跳躍して、そのまま路地裏に消え去りました。
現れた時同様、それは、一瞬のことでした。
ようやく震えていた膝を折り、その場にへたり込むわたしです。そのまま、ほむらちゃんを見上げて、尋ねます。
「助けて……くれたの？」
けれど、そんなわたしを冷たく見据えると、

「いったい、何度忠告させるの？　どこまであなたは愚かなの？」
そうほむらちゃんは、厳しい口調で問いつめてきます。
「あなたは関わり合いを持つべきじゃないと、もうさんざん言って聞かせたわよね」
「でも、わたしは……」
「愚か者が相手なら、私は手段を選ばない」
「……」
また、わたしの膝はがくがくと震え始めてしまいます。
今、本当に——ほむらちゃんは、怒っていました。
いつも氷のように冷たく強い視線は、いまゆらゆらと怒りの炎をたたえていました。
でも——でも、それがどうしてなのかなんて、やっぱりわたしにはいくら考えてもわからなくて……どうしようもない怖さだけが、わたしの身体を震わせていました。
そんなわたしを、冷ややかに見下ろしてから——
ほむらちゃんはくるりと背を向け、見放すかのように、そのまま立ち去ってしまいます。
わたしは、ほむらちゃんが去ってもいつまでもその場から動くことができませんでした。
どれほどほむらちゃんに注意されても、わたしはどうしてか、ほむらちゃんの意に添わぬことをしでかしてしまいます。悩んで、みんながいい方に向かうように頑張ってみるんだけど、どうしてかそうなってしまうのです。

そして、自分を情けなく思うと同時に――

ひとつの事実が、わたしの中に暗く沈み込んでいました。

それは、わたしがどう問を取り持とうと、さやかちゃんとほむらちゃんは、けして協力し合えないということ。ふたりで魔女に立ち向かうということが、不可能だと知った今――もう、わたしにはどうしてよいのかわからなくって、いつまでも膝の震えが止まらないのでした。

「まどか、とにかく今はさやかを見てあげないと」

「……あ」

そのキュゥべえの言葉で、慌ててわたしはさやかちゃんに駆け寄ります。

抱き上げ、頭をわたしの膝の上に乗せると、やがてさやかちゃんは呻きながら気がつきました。

「あ……てて……くそ」

「大丈夫？　さやかちゃん!?」

「くそー、あいつまで出てくるなんて、反則だろ……」

「さやか」

キュゥべえが、後頭部を押さえて座り込むさやかちゃんに声をかけます。

「この間倒した魔女のグリーフシードを、持っているかい？」

「……え？」
「いまの戦いで、キミのソウルジェムはずいぶんと濁っている」
「あ……ホントだ」
「近づけてみてごらん」
言われて、さやかちゃんがポケットから取り出したのは——この間、わたしを助けてくれた時手に入れたグリーフシードでした。その、奇妙な装飾に覆われた黒い宝石は、さやかちゃんのソウルジェムに触れた瞬間、まばゆく輝き出します。共鳴するように、さやかちゃんのソウルジェムも輝いて——そこから何か霧のようなものがグリーフシードに移るのがわかりました。
やがて、光が収まると——
グリーフシードの黒さはいよいよ増し、そして、さやかちゃんのソウルジェムは、再び透明な輝きを取り戻していました。
「うん。これでまたしばらくは大丈夫だ」
そう言って、キュゥべえが取り上げたグリーフシードを見つめて、さやかちゃんは顔をしかめます。
「うわぁ、真っ黒……」
「もう危険だね。これ以上の穢れを吸ったら、魔女が孵化するかもしれない」

「……ええっ？」
「けど、大丈夫」
キュゥべえはそう言うと、しっぽで器用に、二、三回、グリーフシードを跳ねさせ——そのまま、背中にあったポケットみたいなところに放り込みました。
すると、そのままキュゥべえの身体の中に取り込まれて……
「これでもう、安全さ」
嬉しそうにげっぷをするキュゥべえでした。
「た……食べちゃったの？」
「これもまた、僕の役目の一つだからね」
驚くわたしに、なぜか、得意気に胸を張るキュゥべえです。
「でも、また次にソウルジェムを浄化するためには、早く新しいグリーフシードを手に入れないといけないんだ」
「だから——魔法少女同士が戦うことになるの？」
「まあ、そうだね」
キュゥべえは、呑気な顔でそう言うけど——わたしには、いろいろと納得がいきません。
「これを綺麗にしておくのって、そんなにも大切なことなの？」
さやかちゃんが尋ねると、キュゥべえは真面目な顔をして言いました。

「佐倉杏子は、強かっただろう？」
その言葉に、さやかちゃんは顔を歪めました。
「彼女は、常にソウルジェムを最良のコンディションに保ってる。余分なグリーフシードがあれば、魔法を出し惜しみせずに無駄遣いすることだってできる。それが杏子の強みなんだ」
「だからって、グリーフシードのために他の人を犠牲にするなんて……」
「魔力を使えば使うほど、ソウルジェムには穢れが溜まるんだ。さやか、キミがグリーフシードを集められない限り――杏子と戦っても勝ち目はないと思っていい」
……そんな。
魔法少女と戦うために、魔女を倒してグリーフシードを集めるなんて――
なんか、そんなの……ええと、本末転倒っていうやつです。
「うーん、なんだかなぁ……」
さやかちゃんも納得いかなそうに、髪を掻きむしりました。
「マミさんだって、充分なグリーフシードを持ってたわけじゃないんでしょ？　でもちゃんと戦えてたよね……やっぱアレ？　才能の違いとかあるの？」
「確かに、それは事実だね」
キュゥべえに明るく即答されて、

「ずーるーいーっ、不公平だーっ」
さやかちゃんはその場に倒れ込んで、足をじたばたさせました。
「こればかりは仕方ないよ。杏子は、素質がある上に数々の魔女との戦いを経たベテランだもの」
何でも無いようにそう呟いた後——
けどね、と意味ありげに、キュゥべえはわたしを見ます。
「逆にまったく経験がなくても、才能だけで杏子以上の魔法少女になれる天才だっている」
「誰よ、それ」
さやかちゃんが、寝転がったまま顔だけ起こして尋ねると、キュゥべえは答えました。
「鹿目まどか」
……え。
「……え？」
さやかちゃんも、驚いてわたしを見ます。
「……まどかが？　それ本当？」
「ああ。だから、もしどうしても杏子に対抗する戦力が欲しいなら、いっそまどかに頼んでみるのも手だよ」
そう楽しげに言うキュゥべえだけど——

それって、この間も言ってたし、マミさんもそんなことを言っていたような気がするけど――

ホントなの……？

わたしが契約すれば、すべてうまくいくの？

わたしがそう訊き返そうとした、その時――

「駄目だよ、まどか」

さやかちゃんは、首を振りました。

「これは、あたしの戦いなんだ。あんたは巻き込めない」

そう、どこかを睨むように言うさやかちゃんだったけど――

それって、結局、いつものように、わたしだけが迷惑をかけているってことで。

さやかちゃんの身体のあちこちに刻まれた傷は――

まるで、わたしがつけてしまったように思えて……悲しく、唇を噛み締めてしまうのでした。

○

その次の日の夜でした。

そっと家を出て、さやかちゃんとキュゥべえと待ち合わせしたわたしは、また昨日の結界のあったビルまで来ていました。でも、そこではもう、さやかちゃんのソウルジェムが反応することはなく――

「駄目だ。時間が経ちすぎてる。ゆうべの使い魔を追う手がかりはなさそうだ」

キュゥべえのその言葉に、ほっとするのが半分と、また一から探さなきゃいけないんだ、という不安感が半分のわたしです。

裏路地のそこかしこには、昨夜の戦いの跡が残っていました。それは、使い魔に放ったさやかちゃんの剣の跡なのか、さやかちゃんが避けた杏子ちゃんの槍の跡なのか、わたしにはわからなかったけど――

その生々しい傷跡は、わたしの心を重くします。

「……ねえ、さやかちゃん」

わたしは、懸命にあちこちにソウルジェムをかざすさやかちゃんに尋ねました。

「このまま魔女退治を続けてたら、また昨日の子と会うんじゃないの？」

「まぁ当然、そうなるだろうね」

その表情は、すでに覚悟を固めていて――

わたしはそれがとてつもなく危ないものに思えて、さらに言いました。

「だったらさ、先にあの子ともう一度会って、ちゃんと話をしておくべきじゃないかな……

でないとまた、いきなりケンカの続きになっちゃうよ」
「ケンカね……」
そこで、さやかちゃんは僅かに微笑んで言いました。
「ゆうべのアレが、まどかには、ただのケンカに見えたの？」
「……え？」
「あれはね、正真正銘（しょうしんしょうめい）、殺し合いだったよ。お互い、ナメてかかってたのは最初だけ。途中からは、あいつも、あたしも、本気で相手を終わらせようとしてた」
「そんなの……なおさら駄目だよ……」
「だから話し合えって？　馬鹿言わないで。相手は、グリーフシードのために人間を餌（えさ）にしようって奴なんだよ。どうやって折り合いつけろっていうの？」
でも……でも。
わたしは、なおも食い下がります。
「さやかちゃんは、魔女をやっつけるために魔法少女になったんでしょ？　あの子は魔女じゃない……同じ、魔法少女なんだよ？」
「……」
「探せばきっと、仲良くする方法だってあると思うの。やり方は違っても、魔女を退治したいと思う気持ちは同じでしょ？　昨日の子も……あと、ほむらちゃんも」

それは、わたしの本心でした。

昨日のあの戦いを見ても——ううん、昨日のあの戦いを見て一晩ずっと考えたからこそ、やっぱりそれしか方法はないと思ったのでした。さやかちゃんと、ほむらちゃんと、そして昨日の杏子ちゃんが力を合わせれば、きっともう怖い魔女も恐れることなく戦えるはずだって——そう思ったのでした。

「マミさんだって、ほむらちゃんとケンカしてなかったら……あんな風に死なずに済んだはずだよ」

わたしが、懸命にそう訴えた瞬間——

「そんなわけない！」

さやかちゃんは、珍しく正面からわたしを見据えて怒鳴りました。

「まどかだって、見てたでしょ？　あのときアイツは、マミさんがやられるのを待ってから魔女を倒しにきた。アイツはグリーフシードほしさにマミさんを見殺しにしたんだ！」

「あ……」

それは——違う。

あの時、ほむらちゃんは、マミさんの魔法で縛られていて——

だから、助けたかったとしても動けなかったはずで——

「あの転校生も、昨日の杏子ってヤツと同類なんだ。自分の都合しか考えてない。今なら

わかるよ。マミさんだけが特別だったんだ。他の魔法少女なんて、あんなヤツらばっかりなんだよ！」

「それ……違うよ……さやかちゃん」

なんとか説明しようとするけど、こんな時、わたしはうまく言葉が出てきません。

「いい、まどか？　ゆうべ逃がした使い魔は小物だったけど、それでも人を殺すんだよ。次にあいつが狙うのはまどかのパパやママかもしれない。タッくんかもしれないんだよ？　それでもまどかは平気なの？　放っとこうとするヤツを許せるの？」

「……」

「あたしはね、ただ魔女と戦うだけじゃなくて、大切な人を護るために、この力を望んだの。だから、もし、魔女より悪い人間がいれば――あたしは戦うよ。たとえそれが魔法少女でも」

「さ、さやかちゃん……！」

そのまま、裏路地から出て行こうとするさやかちゃんに追いすがるわたしだけど、

「嫌なら、一緒に来なくてもいいよ。見てて気持ちがいいものじゃないだろうしね」

そう言い捨てると、さやかちゃんはひとりで駆け去っていってしまいました。

後に残されたわたしは、もう涙目で――

足下でしっぽを丸めているキュゥべえを、恨めしげに睨みます。

「キュゥべえも、何とか言ってよ……」
「ううん……」
キュゥべえは、難しいなあという風に頭を捻りました。
「僕から言わせてもらえるのは、無謀すぎるってことだけだよ。今のさやかじゃあ、暁美ほむらにも、佐倉杏子にも勝ち目はない。でもね……さやかは、聞き届けてくれないよ」
わたしも……そう思いました。
今のわたしの言葉は、けしてさやかちゃんには届かないのだ、という予感だけが強くありました。
それは、契約して魔法少女になった少女と、いまだ決断できないわたしの立場が違うこと以上に——
やっぱり、わたしは——
さやかちゃんの友達にはなれていないのかな、という悲しい予感なのでした。

○

それは、わたしが小学五年生の時のことで——
わたしは、その春からこの見滝原小学校に転入してきた、転校生でした。

まだ仲の良い友達もいなくて、町のことも詳しくなくて……

真新しい、広い家は嬉しかったけど、タツヤが生まれたばかりで、なんだかママもパパもタツヤに取られたような気になっていたわたしは、いつも心のどこかに風が吹いていたような気がします。急に、この世界にひとりきりにされたような心細さに、毎日ひとり部屋で泣いているような日々を送っていました。

そんな、ある日のことでした。

わたしは、登校中に道路のでこぼこに躓いて転んでしまって——しかも、運悪くランドセルの蓋がちゃんとしまってなくて。転ぶと同時に、その日の教科書も、ノートも、ペンケースも何もかも、その場にひっくり返してしまったのでした。

周りには、同じ小学校に通う生徒たちがたくさん歩いていたけど、誰もみなこちらを見つめるだけで助け起こしてくれるわけではなく——

わたしは、膝に滲む血をただ見つめていました。

膝は切れて、じんじんと痛みます。そして、それ以上に、散らばった教科書類が、前日の雨でできた水たまりに放り出されていたことにショックを受けていました。新しい教科書が……ノートが。そして、パパが作ってくれたお弁当が、泥水に濡れていました。

じんわりと視界が滲んで、それでも必死に泣かないように我慢していたその時——

「大丈夫？」

手を差し出してくれた子がいました。
「……あ」
その子が男の子か女の子か、咄嗟にわかりませんでした。
短い髪に、半袖、半ズボン。手をポケットに入れて、つんとした顔でこちらを見下ろしています。
呆然とするわたしをよそに、その子はしゃがみ込んで、躊躇することなくポケットからハンカチを取り出し、ひとつひとつ教科書を取り上げて拭いてくれていました。その子のランドセルの色が赤いことに気がついて、ようやく女の子だ、と気がつきます。
「あ……ありがとう」
「教科書とか、拭けば大丈夫だよ。ノートは染みが残るかもしれないけど、端っこだし。お弁当も大丈夫。包んでる布巾は汚れちゃったけど、洗えば落ちるし、ちゃんと食べられるよ」
そう、にかっと笑われて——ずっと我慢していたわたしの涙は、ぼろりと落ちました。
「あーあー、泣くなって！　全部、大丈夫だから！」
「……ご、ごめんなさい」
「あ、謝らなくてもいいって！」
すべてその子がハンカチで奇麗に拭いてくれて、無事ランドセルに納めてから、

「わたし、鹿目まどか……です」
そう挨拶すると、その子はまた笑いました。
「知ってるよ。つか、同じクラスなんだけど」
「……え」
「美樹さやか。よろしく」
そう差し出された手を握り返したのが——
わたしと、さやかちゃんの出逢いでした。

それから、さやかちゃんの友達を分けてもらうように、わたしの友達は増えていきました。
クラスでも、さやかちゃんにくっついていれば、ひとりぼっちにならずにすみました。わたしはさやかちゃんと違って運動神経がよい方ではなかったので、放課後、男の子にまじってドッジボールをするさやかちゃんを見ているだけだったけど——それでも、とても楽しかったのを覚えています。
バレンタインデーには、ふたりでチョコレートを買いに行ったり、六年生になった時には、ふたりでパパに習いながら家で作ったりもしました。わたしがさやかちゃんの家に泊まりに行くこともあったし、さやかちゃんが家に泊まりにくることもありました。そうい

う時は、ふたりでベッドに入って、いつまでもいろいろな話をしました。いつも、さやかちゃんが五つ話す間に、わたしがひとつ話すくらいだけど、それでも心があったかくなるくらい楽しくて——さやかちゃんが、幼なじみの上条くんのことが好きであることを知ったのもその頃でした。

やがて、パパやママやタツヤと同じくらいの距離に、さやかちゃんがいるようになって

だけど、ある時、ふと気がついたのでした。

わたしは、さやかちゃんに迷惑かけて、助けてもらってばかりだけど……

わたしがさやかちゃんの助けになっていることなんて、あるのかなって。

「まどか、これあげる」

「まどか、今日、遊ぼうよ」

「まどかを、いじめるな！」

そう、いつもわたしを気にかけて、守ってくれるさやかちゃんだけど——

わたしは、もっと——

さやかちゃんの為に何かしてあげたいと思うようになっていたのです。

でも、それが何かわからなくて……

勉強を教えてあげられるほど、わたしも頭良くないし、スポーツも、友達も、さやかち

ゃんは、わたしの助けなんていらないほどしっかりしていて。
このままじゃ、いつかさやかちゃんはわたしを疎ましく思ってしまうんじゃないのかな……
そんな不安が、心の中で次第に大きくなっていくのでした。
さやかちゃんの存在が、わたしの中で大きくなればなるほど、その不安も大きくなって

せめてさやかちゃんと対等にならなきゃって思うほど、空回りして——
そして——中学二年生になった今年、それは起きました。
上条恭介くんが、事故に遭ったのです。
命は取り留めたけど、それは、バイオリンがもう弾けなくなるくらいの大怪我で——さやかちゃんは、見たことがないほど取り乱していました。しばらく学校も休んで、ようやく来るようになっても笑うことがなくなっていて……そんなさやかちゃんを見ても、わたしはしてあげられることがなくて……自分は駄目だなあ、と思うようになったのはその頃でした。
ひと月も経った頃、さやかちゃんもようやく以前の明るさを取り戻すようになっていたけど、それはわたしのおかげなんかじゃなくて——流れた時間と、病院でリハビリを頑張る上条くんのおかげで——相変わらず、わたしはさやかちゃんに心配かけて、励まされる

存在のままでした。
ここまで運良くずっと同じクラスでいられたわたしたちだけど、この先、その保証はありません。
同じ高校受けようねって話しているけど、それも確実じゃないし、いつかは、ばらばらになってしまいます。
いつかさやかちゃんにとって、本当の友達になれるのかな……
このまま一生、さやかちゃんの横にいた誰かなんて、そんなの嫌だな……
そんな思いをずっと抱くわたしでした。
そして、今——
さやかちゃんは、ひとりで悩んで、ひとりで決断して——
キュゥべえと契約しました。
上条くんの腕を治すことと引き換えに、魔法少女となってしまいました。
いつ魔女に食べられてしまうかわからない、危険な場所で——ひとりも味方がなく、毎晩のように戦っています。そして、わたしは相変わらず弱虫で——マミさんの最期の光景がどうしても頭から離れず、キュゥべえと契約することもできず……
——やっぱり、自分の部屋で泣いているだけなのでした。

明かりの消えた部屋で、ベッドに寝転んで、そんなことをいつまでも考えていたら——
一階で、玄関が開いて誰かが入ってくる気配がしました。
時計を見ると、もう午前二時でした。
「ママだ——」
わたしは飛び起きると、カーディガンを羽織ってそのまま部屋から出ます。
階段を降りると、ママはもうそこにはいなくて、浴室から水の音が聞こえました。
玄関には、鞄と上着が放り投げてあって、それを手に取るとわたしはキッチンに向かいます。
ひとつだけ点けられた照明の下には、パパの書き置きがあるのが見えました。
【お疲れ様。冷蔵庫にポテトサラダあります】
それを読んでから、わたしは椅子に腰掛け、ママがシャワーを浴び終わるのを待ちました。
すこしすると、ママがバスローブ姿でやってきて、
「お……まどか？」
「おかえり。お疲れさま」
そう笑うと「ありがと」と返事して、ママは棚からウィスキーのセットと冷蔵庫からポテトサラダを取り出します。

それを机に置いて、バスローブ姿でだらしなくひとりで晩酌を始めました。
「くあーっ、美味い！」
そう拳を固める様子を頬杖ついて見つめていると、やがてママは訊いてきました。
「なんだよ、眠れないのか？」
「うん……ちょっといい？」
「もちろん」
そう言うと、ママは再び立ち上がり、冷蔵庫から林檎ジュースとグラスを持ち出して、わたしの前に置いてくれました。そして、ふたりでグラスを合わせて、小さく「おつかれ」と言い合います。これは、時々やる母娘晩酌なのでした。
「……で？　どした？」
ウィスキーをまた一口すすって訊いてくるママに、あのね、とわたしは話し出します。
「友達がね……大変なの。やってることも、言ってることも、たぶん間違ってなくて……なのに、正しいことを頑張ろうとすればするほど、どんどん酷いことになってくの……」
ふうん、と聞いてくれていたママは、
「まあ、よくあることさ」
とあっさり言いました。
「悔しいけどね、正しいことだけ積み上げていけばハッピーエンドが手に入るってわけじ

ゃない。むしろ皆が皆、自分の正しさを信じ込んで意固地になるほどに、幸せって遠ざかってくもんだよ」

「間違ってないのに、幸せになれないなんて……ひどいよ」

わたしがそう言うと、ママは静かに頷きます。

「わたし、どうしたらいいんだろ？」

「……そいつばっかりは、他人が口を突っ込んでも奇麗な解決はつかないねぇ」

ママの言葉に、わたしの心はつきんと痛みます。

友達は他人なのかな……？

それとも、友達になれていないから、他人なのかな……？

そんなわたしを見つめて、ママは言います。

「たとえ奇麗じゃない方法だとしても、解決したいかい？」

その言葉に——

いろいろと考えたあげく、わたしは、うんと頷きます。

「なら——間違えればいいさ」

指で、ちょんとグラスの中の氷を鳴らしてママは微笑みました。

「間違える……？」

「そう。正しすぎるその子のぶんまで、誰かが間違えてあげればいい。ずるい嘘をついた

り、怖いモノから逃げ出したり、でもそれが、後になってみたら正解だったってわかることがある。本当に他にどうしようもないほどどん詰まりになったら、いっそ思い切って間違えちゃうのも手なんだよ」

「でも――それが、その子のためになるって……わかってもらえるかな？」

「わかってもらえない時もある。特に、すぐにはね。言ったろ？　奇麗な解決じゃないって。その子のこと諦めるか、誤解されるかどっちがましだい？」

「……」

……わからない。

どちらが正しいのか、わたしにはわかりません。

すると、ママは――突然、わたしのほっぺにちょんと指を触れて言いました。

「まとか、あんたはいい子に育ったよ。嘘もつかないし、悪いこともしない。いつだって正しくあろうとして頑張ってる。子供としては、もう合格だ。だから――大人になるまえに、今度は間違え方もちゃんと勉強しておきな」

「勉強……なの？」

「若いうちは怪我の治りも早い。今のうちに上手な転び方を覚えといたら、後々きっと役に立つよ。大人になっちゃうとねー、どんどん間違えるのが難しくなっちゃうんだ。背負ったモノが増えるほど、下手を打てなくなってくの」

「ふうん……」
わたしは、飲むのを忘れていた林檎ジュースに口をつけながら、よく考えます。
そして、おずおずと尋ねました。
「……それって、辛くない？」
「大人は誰だって辛いのさ。だから酒飲んでもいいってことになってんの」
ママは、にっこり笑って、グラスをすこし上げました。
それを見て、わたしも思わず微笑んでしまいます。
「わたしも、早くママとお酒飲んでみたいなぁ」
「さっさと大きくなっちゃいな。辛いぶんだけ楽しいぞぉ、大人は」
そう言って——
わたしのおでこに、ちょんと人差し指を触れさせるママでした。

○

だけど——
翌日になっても、具体的にどうしたらよいのか、わたしにはまだわかりませんでした。
学校では、さやかちゃんに話しかけることもできず——

学校が終わっても、さやかちゃんは「じゃあね」とだけ言ってひとりで帰ってしまいました。

どうしたんですの、と尋ねてくる仁美ちゃんに曖昧な言葉を返して——わたしもひとり家路につきます。それからずっと昨日の晩にママに言われたことを考え続けていました。

「……正しすぎるさやかちゃんの分まで、わたしが、間違える……」

ほむらちゃんに、もう一度さやかちゃんの力になってくれるよう頼むほうがいいのかな？それとも、杏子ちゃんに会って、もうさやかちゃんに絡むのはやめてくれるよう頼むほうがいいの？　なんとか三人で協力して魔女と戦えるようにするにはどうしたらいいのかな……？

そもそも、ママの言っていた〝間違える〟ってどういうことなんだろう？　今は勘違いされて、嫌われても、さやかちゃんの為にどうしてあげたらいいんだろう……

家に着いても、パパの晩ご飯を食べても、その考えがまとまらなくて——

寝る前に終えようと始めた宿題も手につかず、気がついたら、もうすっかり深夜になっていました。

「……わからないよ、わたし」

机の上で、くしゃりと髪を掴んで俯いた時でした。

（——まどか！）

突然、わたしの頭の中にキュゥべえの声が響きました。
（まどか――まどかっ！）
「……キュゥべえ？」
急いで窓のカーテンを開くと、二階にあるわたしの部屋の窓にはキュゥべえがひっついていました。
鍵を外して、窓を開けてあげると、転がり込むように中に入ってきます。
「急いで！　さやかが危ない！　ついてきて！」
「……えぇ!?」

ママたちに気がつかれないようにそっと玄関から外に出て――そこから駆け出したわたしの肩にキュゥべえは飛び乗ります。
「杏子が、さやかにちょっかいを出した」
「――え？」
「今日、キミたちの学校が終わってからのことなんだ」
そうキュゥべえは――その経緯を語り出します。
「さやかがいつものように、あの少年のお見舞いに行ったんだけどね――彼はもう退院してて。それでさやかは家に行ったんだけど、そこで、杏子と鉢合わせしたんだ」

「それ……まずいよ……」

さやかちゃんがまず最初に病院に行ったっていうことは、さやかちゃんは上条くんの退院を知らなかったっていうことで——それって、上条くんがさやかちゃんに知らせなかったってことで——上条くんが忘れてしまっただけなのか、どうなのかわからないけど……でも、きっとさやかちゃんは傷ついたと思う……

キュゥべえは、ひとつ頷いて——あくまでも淡々と話を続けます。

「杏子は、さやかのあの少年に対する想いを知ってて、いろいろと言った。会いもしないで帰るのかとか、今日一日追いかけ回していたくせに、とか」

「……」

「あげく、これは杏子なりの解決方法なんだろうけど——他人の為に魔法少女として契約したさやかを強く責めた。そんなことするくらいなら、おまえ無しにはその少年が生きていけないように、腕も足もずたにしてやるべきだってね」

「……そんなこと言ったら、さやかちゃんは」

——きっと、すごく怒る。

さやかちゃんは、昔から自分のことよりも他人の痛みに敏感で——

だから、いつもわたしの面倒も見てくれていて……そんなさやかちゃんに、杏子ちゃんのその言葉はまるで相容れないものであるはずで——

「うん。僕も、あんなに怒ったさやかを見たのは初めてだ」
その冷静なキュゥべえの言いように、わたしの心は冷たくなっていきます。
「もうふたりの決闘は避けられないだろう。だから、僕はキミを呼びにきた。最悪のことも覚悟しておいたほうがいいと思ってね」
「……さ、最悪って？」
「美樹さやかは、魔女と戦うよりも先に命を失うかもしれない」
……駄目。
そんなの、絶対駄目だよ……！
震え始める膝を励まし、もうこぼれ落ちそうな涙をこらえ、わたしは懸命に駆け続けます。
住宅街の外れからしばらく進むと、隣町との間に高速道路があって、それを跨ぐ小さな橋が見えました。
キュゥべえは、あっちだ、とわたしの前を飛んで案内してくれます。
その橋は、四方から死角になっていて——
誰の目にも留まらず決闘をするには、ちょうどよい感じで。
わたしにとっては、誰が何の為にこんな場所を作ったんだろう、と気が重くなる場所でした。

お腹の横がきりきりと痛み、肺は破裂しそうなほどだったけど、懸命に駆け続けました。深夜にもかかわらず、たくさんの車のヘッドライトが行き来する高速道路の上にたどり着いたところで——そのふたつの影が、目に入ります。

すでに変身して、長い槍を携えた、赤い衣装の杏子ちゃんと——

制服姿のまま、その杏子ちゃんを睨みつけるさやかちゃんでした。

さやかちゃんが、ソウルジェムを構えようとしたその時——

「待って——待って、さやかちゃん！」

わたしは、叫んでいました。

「待って。お願い、やめて！」

「……まどか」

その声が届き、さやかちゃんは僅かにこちらを振り向きます。

わたしはそのまま懸命に駆け続けて、なんとかさやかちゃんの元までたどり着き、その制服にしがみつきました。

「やめてよ、さやかちゃん！」

「邪魔しないで。そもそもまどかは関係ないんだから」

「だ……駄目だよこんなの！　絶対おかしいよ！」

切れ切れの息で叫んで、わたしは必死にさやかちゃんの腕を掴みます。

すると、くすくすと笑い声が聞こえました。
「フン、ウザイ奴にはウザイ仲間がいるもんだねぇ」
それは——佐倉杏子ちゃんでした。
今日はチョコレートがかかったスナック菓子を頬張りながら、わたしとさやかちゃんを見つめてにやにやと笑います。
「やめて、やめてぇ、か。まったく甘っちょろい連中だぜ」
それに、さやかちゃんが何か言い返そうとした時、
「じゃあ、あなたの仲間はどうなのかしら？」
その聞き覚えのある声が響き——
いつの間にか、杏子ちゃんの背後には、暁美ほむらちゃんが立っていました。
ちっと舌打ちする杏子ちゃんに、ほむらちゃんは静かに言います。
「話が違うわ。美樹さやかには手を出すなと言った筈よ」
その言葉で——
ほむらちゃんが杏子ちゃん側に立っていることがわかり……わたしは、最後の頼りにしていた細い希望が断ち切られたことを知りました。なんとかほむらちゃんと杏子ちゃんとさやかちゃんを仲直りさせて、三人で魔女に立ち向かえたらっていう希望が……今、崩れさっていくのを感じていました。

「アンタのやり方じゃ手緩すぎるんだよ。――どのみち、向こうはやる気だぜ」
さやかちゃんを見つめながら笑う杏子ちゃんに、
「なら――」
ほむらちゃんが一歩前に出ます。
「……私が相手をする。手出ししないで」
「ほ……ほむらちゃん」
――わたしは、どうしたらいいんだろう。
――さやかちゃんの為に、間違えてあげるってどうすればいいんだろう。
祈るように両手を組み合わせ、わたしがそう必死に考えを巡らせていると、
「ふん――じゃあ、こいつを食い終わるまで待ってやるよ」
杏子ちゃんがお菓子をひとかじりして、槍を引きました。
そのふたりの余裕たっぷりの仕草に――
「舐めんな……」
わたしの横から絞り出すような、そんな声が聞こえて。
「舐めるんじゃ、ないわよ……」
――いけない。
さやかちゃんが、顔を紅潮させて、ソウルジェムを掲げようとした、その瞬間――

わたしの手は、自然と動いていました。
多分、わたしのその行動は、さやかちゃんも完全に無警戒で――
さやかちゃんの手にあったソウルジェムは、するり、とわたしの手の中に奪われていました。
「……え」
――こうするしかないの。
今、こんなに三人が仲が悪い状態で魔女と出逢っちゃったら――きっと、マミさんに起きたようなことがまた起きちゃう――それは、きっとマミさんが一番悲しむはずで……
だから、今は、こうするしか……
「――さやかちゃん、ゴメン」
そう一言謝ると――
わたしは、さやかちゃんのソウルジェムを力いっぱい、夜の高速道路目掛けて投げ捨てました。
「なっ……!?」
「え……？」
「……は」
さやかちゃんも、ほむらちゃんも、杏子ちゃんも、わたし以外の誰もが呆気にとられて

いたけど――

そんなわたしたちの前で、ソウルジェムは一度目映く輝き――無数のヘッドライトの川へと落ちていきました。そして、それは、たまたま真下を走っていたトラックの荷台に落ちて、そのまま運び去られていきます。

わたしがほっと息を吐いた、その瞬間――

「――まずいッ！」

血相を変えたほむらちゃんが跳躍して――次の瞬間、ほむらちゃんは光に包まれると、あの黒と白の魔法少女の姿に変身します。そして、瞬く間に、その姿を夜空にかき消していました。

「まどか……あんた何てことをッ」

さやかちゃんも怒鳴ってくるけど――わたしは、涙声で叫び返します。

「だって、こうしないと……こうしないと、止められないもの！　わたしはさやかちゃんに決闘なんかしてほしくない！」

「だからって――」

そうわたしに、何か言いかけた瞬間でした。

さやかちゃんの瞳が、唐突に空白になって――

そのまま、わたしの腕の中に倒れ込んできました。

「え――さ、さやかちゃん!?」
ぐっと身体の重みがわたしの全身にのしかかり、一緒にその場に崩れるように座り込んでしまったけど、なんとかさやかちゃんの顔を上に向けて、わたしは叫び続けました。
「さやかちゃん？　さやかちゃん！　どうしたの!?」
だけど――
さやかちゃんの瞳はすでにからっぽで……唇も色を失っていました。
「今のはまずかったよ、まどか」
そこに……キュゥべえの声が響きます。
「よりにもよって友達を放り投げるなんて、どうかしてるよ」
「――え？　……放り投げるって？」
訳がわからず、そう尋ね返すわたしに向かって――
杏子ちゃんが駆け寄ってきます。そして、倒れ伏すさやかちゃんを乱暴に掴み、その顔を覗き込みました。
「や、やめて！」
叫んで、その腕を振り払おうとするけど――
杏子ちゃんの瞳は、大きく見開かれていて。
「……どういうことだ、おい!?」

そうキュゥべえに怒鳴りつけていました。
「こいつ、死んでるじゃねーかよ！」
……え？
「おい、どういうことなんだって訊いてんだ！」
けれど――
キュゥべえは無言で、さやかちゃんを見つめています。
その赤い瞳は、闇夜にきらきらと輝いていて――
そして、それはどうしてか……
わたしには、とても禍々しいものに思えて――
「……さやかちゃん、ねぇ、さやかちゃん……起きて、ねぇ？」
わたしは、ただ、そう呼びかけさやかちゃんの身体を揺さぶっていました。
怖くて、目の前で起きていることが理解できなくて――
ただ、ぼろぼろとこぼれ落ちる涙を拭いもせず、必死にさやかちゃんの身体に力を込めていました。
だけど、さやかちゃんの首は――
まるで壊れた人形のように、揺れ動くばかりでした。
「キミたち、魔法少女が――」

そこに、いつものように淡々と、どこか呑気な、キュゥべえの声がします。
「身体をコントロールできるのは、せいぜい１００メートル圏内が限度だからね」
「――１００メートル？　何のことだ？」
「普段は当然、肌身離さず持ち歩いてるんだから、こういう事故は滅多にあることじゃないんだけど……」
杏子ちゃんの叫びにも、淡々と返すキュゥべえの答えは、どこか場違いにのどかで――
「何言ってるのよキュゥべえ！　助けてよ！　さやかちゃんを死なせないで！」
わたしは、ただそう泣き叫んでいました。
けど――キュゥべえは。
「まどか、そっちはさやかじゃなくて、ただの抜け殻なんだって」
「え……？」
「さやかはさっき、キミが投げて捨てちゃったじゃないか」
その言葉の意味が、すぐには理解できなくて――
呆然とそこに座り込むわたしの耳に、いつまでもキュゥべえの言葉は響いていました。
――ただの人間と同じ、壊れやすい身体のままで魔女と戦ってくれなんて……僕には、とてもお願いできないよ。

「――キミたち魔法少女にとって、もとの身体なんていうのは外付けのハードウェアでしかないんだ。キミたちの本体としての魂には、魔力をより効率よく運用できる、コンパクトで安全な姿が与えられているんだ」

その淡々とした言葉が何を意味していて。
それはつまり、どういうことになるのか。
この時……わたしには、まるでわかっていませんでした。

「魔法少女との契約を取り結ぶ僕の役目はね――」
キュゥべえは、赤い瞳をわたしたちに向け――冷たく、言い放ちます。
「キミたちの魂を抜き取って、ソウルジェムに変えることなのさ」
凍りついていくわたしの心に――
『いいものじゃないわよ……魔法少女なんて――』
そんなマミさんの言葉が響き。
『一度魔法少女になってしまったら、もう救われる望みなんてない』
そんなほむらちゃんの言葉が蘇ります。
『あの契約は、たったひとつの希望と引き換えに、すべてを諦めるってことだから』

あの悔しそうなほむらちゃんの瞳が、思い出されます。

「……キミたちはいつもそうだね。事実をありのままに伝えると、決まって同じ反応をする」

涙でぐしゃぐしゃになったわたしに――

キュゥべえは、微笑むように言いました。

「訳がわからないよ。どうして人間はそんなに、魂の在処にこだわるんだい？」

あとがき

最初に『魔法少女まどか☆マギカ』の小説版執筆のお話を頂いてから、もう二年ほどになるでしょうか。ニトロプラスブックスの後に、芳文社さまから一般流通版が発売され、そして、今日ここに星海社さまから文庫版を出版して頂けることとなりました。

ご存じの通り、現在「まどか☆マギカ」は世界中にたくさんのファンを持つ巨大な作品となってしまっていて、その発芽過程に何の関わりもない自分が3回もコメントを寄せるということは恐れ多いのですが——まずは関わった創作者たちに代わり、この作品を愛してくださっているすべての方に、改めて厚くお礼を申し上げさせて頂きます。

さて、ちまたでやたらとまどかが「さやかちゃん」と連呼する小説として有名な本作ですが、いやそんなことないだろう、と思って久しぶりにゲラを読み返したのですが、まごうことなき真実でした。ちなみにすべて数えた方がいるらしく、台詞だけで665回呼んでいるらしいです。もう3回もゲラを読んでいるのに、こんなことに今更気がつくなんてどうしたことでしょう。僕の場合、とにかく必死に「鹿目まどか」をイメージしてあの世界を生きてみたという感じでしたのでまるで気かつかなかったのですが、これはちょっと冷静になるとすごい回数です。

文庫版発売にあたって、少し修整すべきだろうか。

そう改めて見直してみたのですが、しかし、そのひとつひとつの「さやかちゃん」はその場その場でまどかの愛情がいっぱい詰まった台詞であるような気がして、結局直すことは出来ませんでした。文字にするとただの「さやかちゃん」ですが、その場面ごと、その心情ごとに「さやかちゃん」という単語が放つ「リズム」や「色彩」や「重さ」の違う、世界でひとつの「さやかちゃん」だと思うわけです。というわけで、誤字・誤用表現の修整（まだあった）以外、ほぼそのままの形で刊行されております。いろいろと未熟な小説であり、また本編であるアニメ作品と幾つか展開の異なる箇所がございますが、それでも自分に出来る最大限の愛情を注いだ作品であることは間違いありません。どうか、正史であるアニメ本編の太く大きな幹から伸びたひとつの枝であるとして、ご寛恕頂けると有り難く思います。

二〇一三年九月　一肇

本書は、二〇一二年に芳文社より刊行された『小説 魔法少女まどか☆マギカ』に加筆訂正を加え、一、分冊のうえ、文庫化したものです。

Illustration　原画／谷口淳一郎（たにぐちじゅんいちろう）・彩色／serori
Book Design　BALCOLONY.
Font Direction　紺野慎一

使用書体
本文　――FOT-筑紫Aオールド明朝 Pr6 R＋游ゴシック体 Std D〈ルビ〉
ノンブル――ITC New Baskerville Std Roman

星海社文庫 ニ1-01

魔法少女まどか☆マギカ（上）

2013年10月17日　第1刷発行

定価はカバーに表示してあります

原　作——Magica Quartet
©Magica Quartet/Aniplex・Madoka Partners・MBS 2013 Printed in Japan

著　者——一肇（Nitroplus）
©Hajime Ninomae 2013 Printed in Japan

監　修——虚淵　玄（Nitroplus）

発行者——杉原幹之助・太田克史

編集担当——太田克史

編集副担当——山中　武・林佑実子

発行所——株式会社星海社
〒112-0013　東京都文京区音羽1-17-14　音羽YKビル4F
TEL 03(6902)1730　FAX 03(6902)1731
http://www.seikaisha.co.jp/

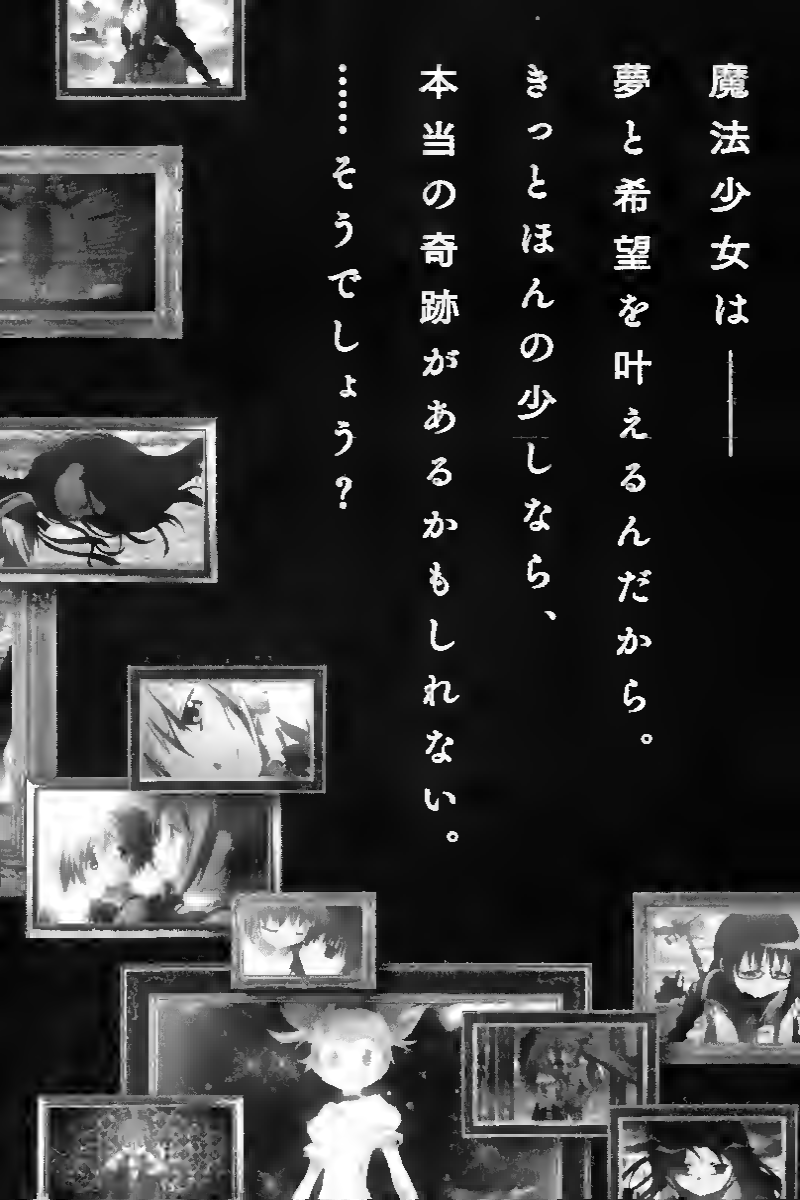
発売元——株式会社講談社
〒112-8001　東京都文京区音羽2-12-21
販売部 03(5395)5817　業務部 03(5395)3615

印刷所——凸版印刷株式会社
製本所——株式会社大進堂

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記の上、講談社業務部あてにお送りください。送料負担にてお取り替え致します。
なお、この本についてのお問い合わせは、星海社あてにお願い致します。
本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。
本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-138956-4　Printed in Japan

魔法少女は――
夢と希望を叶えるんだから。
きっとほんの少しなら、
本当の奇跡があるかもしれない。
……そうでしょう？



〝ワルプルギスの夜〟を前に
次々と命を散らしていく魔法少女たち。
彼女らを救うべく、まどかが下した
運命の決断とは――？

小説版

魔法少女まどか★マギカ 下

PUELLA MAGI MADOKA MAGICA

『魔法少女まどか☆マギカ（上）』と同時発売！

☆星海社FICTIONS
一肇×安倍吉俊のタッグが描き出す、
ありとあらゆる怪異を詰め込んだ
極上の青春怪談小説!!
ようこそ、こちら側の世界へ
フェノメノ
一肇
Hajime Ninomae
Illustration /
安倍吉俊
yoshitoshi ABe
『フェノメノ 美輪本夜石は怖がらない』
『フェノメノ 弐 融解ファフロッキーズ』
『フェノメノ 参 収縮ファフロッキーズ』
星海社朗読館『願いが叶う家』
好評発売中
最新作
『フェノメノ 肆 同胞事件』
2013年11月発売予定

『フェノメノ』
＝ビジュアルノベル
ニトロプラス
フェノメノ 美鹿木夜石は怖がらない より、「願いの叶う家」をビジュアルノベル化!
現在、無料ダウンロード中。
URL http://www.nitroplus.co.jp/game/phenomeno/
星海社FICTIONS

これは始まりに至る物語――。
星海社文庫
Fate
フェイト／ゼロ
Gen Urobuchi
虚淵玄
Illustration
武内崇・TYPE-MOON
虚淵玄がその筆（ペン）によって描き出す七人の魔術師（マスター）の
究極の決闘劇『Fate/Zero』が、
星海社文庫の創刊ラインナップに堂々の登場！
武内崇による全巻描き下ろしのカバーイラストに加え、全扉絵をフルカラーで収録。
続いも新たに全六巻で「小さな愛蔵版」星海社文庫に現界する――！
http://sai-zen-sen.jp/sa/fate-zero/
詳しくは公式サイトをチェック！
作者のtwitterも併せてfollow!
虚淵玄：@Butch_Gen
twitter

☆星海社FICTIONS

龍と剣、そして目くるめく魔法の世界。

金の瞳と鉄の剣

虚淵玄の剛筆が唸り、高河ゆんの絵筆が華麗に舞う！
“虚淵玄×高河ゆん”、スーパータッグが
ファンタジーの歴史に新たな一章を刻みつける！

Gen Urobuchi
虚淵玄 Illustration／高河ゆん

最前線
星海社ウェブサイト『最前線』にて大人気連載中!!
Access Us! >>> http://sai-zen-sen.jp/

魔法少女まどか☆マギカ(上)・(下)

一肇

監修虚淵玄×一肇のタッグで生まれた『魔法少女まどか☆マギカ』公式ノベライズ！

ちょっぴり気弱な女子中学生・鹿目まどかは完全無欠の"魔法少女"に変身することで、理想の自分になれると信じていた――その残酷な真実を知るまでは……。

"魔法少女"ものの新境地を切り開いたTVアニメ『魔法少女まどか☆マギカ』を、虚淵玄監修のもと一肇が公式ノベライズ！　これは鹿目まどかの目線から語られる、奇跡と魔法の物語。(10月17日頃発売予定)

鬼哭街

虚淵玄　Illustration／中央東口

虚淵玄がその剛筆を血に染めて抉り出す、相克の復讐劇――これぞ代表作。

かつては友と信じた男の裏切りにより、辱めの果てに命を奪われた自身の妹・瑞麗の仇を討つため、犯罪都市・上海へと舞い戻った孔瀟羅。

振りの偃刀と必殺の電磁発頸「紫電掌」を武器に、凶悪無比な五人の仇敵たちへの復讐劇の火蓋はついに切られた――！

虚淵玄×ニトロプラスのサイバーパンク武侠ノベルゲームを、虚淵玄自らが小説化。全てのバトルシーンを担当イラストレーター・中央東口の描き下ろしカラーイラストが彩る"完全版"として星海社文庫化！

DON'T TRUST OVER 30

TAGRO

僕たちは、良い大人になんかなれない――。

大人になれない大人たちのめくるめく幕藤、それは青春の残照――。表題作をはじめ、ゼロ年代に文芸誌『ファウスト』を中心に発表された珠玉の名品を収めた傑作短編集、待望の文庫化。新たに、著者によるあとがきと、同級生として若き日を共有したライター・志田英邦による解説を収録。